
ボクがささえてあげるから

日下部良介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクがささえてあげるから

【Nコード】

N0409E

【作者名】

日下部良介

【あらすじ】

伝説のガキ大将、西崎拓はある日夢か本当か分からないけれど、不思議な老人に、15年後に運命の出会いをする女の子を支えてあげなければならないと告げられる。しかし、彼女三浦恭子を待ち受けていたのは・・・拓の覚悟は・・・そして、彼女の未来は・・・

健やかに育ってくれますように

1. 健やかに育ってくれますように

時計の針は間もなく午後六時を指そうとしていた。
みづらたかゆき

三浦孝幸は、さっきから何度も腕時計に目をやっている。

もはや、仕事は手につかなくなっていた。

「おい、三浦、今日はもういいから早く帰れ。」

そんな孝幸の様子を見かねた所長の高橋が声をかけた。

「その調子で机の前にいたって、どうせ、仕事にならんだろう。」

孝幸は慌てて、取り繕うように電子計算機を叩き始めた。

「いえ、大丈夫です。今日中にあげる約束ですから。」

孝幸は、中堅の建設会社で技術者として働いている。

現在は都内の建設現場で主任として、所長の高橋の下で工事の統括を担当している。

一週間ほど前から、設計変更に伴う、工事費の増減見積もりをまとめている。

翌日から3連休となる、この日のうちに何とかまとめてしまいたかったのだが、思った以上に手間を食ってしまった。

工事現場での実務に時間をとられて、こう言った事務的な作業はだいたい夕方の五時以降から実施することが多く、毎日残業してもなかなかかはかどらなかった。

しかし、孝幸はあともう一息というところまでこぎつけていた。

この日は現場の作業が雨のため、午前中で切り上げになった。

おかげで午後からはみっちりと見積書の方に時間を割くことができたからだ。

ところが、夕方の四時頃、孝幸宛に電話が入った。

じつは、孝幸の妻、早紀は妊娠はらなしていて、そろそろいつ生まれてもおかしくない時期に入っていた。

電話の相手は早紀の母親の愛子あいこからだった。

「孝幸さん？お仕事中にごめんなさいね。恭子が産気づいて今病院に入ったから。」

「えっ？」

孝幸は、少しうろたえた。

そろそろだということは分かっていたし、また、楽しみにもしていた。

しかし、この2、3日は正直、すっかり忘れてしまっていた。受話器の向こう側からは、義母の声が冷静に現状の様子を伝えている。

「まあ、初めてだし、生まれてくるまでにはまだ時間がかかるだろうから、孝幸さんは仕事が終わってからゆっくりくればいいよ。」

そう言っって病院の名前を告げた。

早紀がいつも定期健診を受けていた病院だった。

「よしっ！とつとと片付けちまうか。」

とは言うものの、気ばかり焦って、ようやく集計が終わって、検算してみると、するたびに答えが違うのだ。

「あれっ？おかしいなあ。」

腕時計を見ると、既に終業時間の五時はとうに回っていた。

「ちくしょう！どうなってるんだ？これが合えば終わりなのに。」

そこに所長の高橋から声がかかったのだ。

「おい、三浦、今日はもういいから早く帰れ。」

孝幸は慎重にゆっくりと一列ずつ確認しながら、電子計算機のキーを押していった。

3589825・・・更にもう一度確認してみた。3589825。

「よし！ピッタリだ。」

結局、最初に計算した数値が正しかった。

それから、端数を調整して経費を加え、設計変更に伴う工事費の見積もりが終了した。

「所長、終わりました。確認してください。」

「わかった。後は任せろ。だから、とっとと行って来い。」

「ありがとうございます。」

高橋が手をあげて、追い返すしぐさをしながら、孝幸の方を見ると、孝幸は既に、ジャンパーを片手に出入り口のドアに手をかけていた。外に出て、ドアを閉めるとガラス越しに高橋に頭を下げて、スチール製の踏み板で出来ている仮設事務所の階段を駆け降りて行った。高橋は、その“カンカンカン”という、リズムカルな音を聞きながらつぶやいた。

「まあ、初めての子じゃあ、無理もないな。」

聖都大学病院の産婦人科は15階立タワーの5階、8階を占める。受付と外来及び分娩室は5階で、6階、8階が病室になっている。孝幸が受付に到着すると、義母の愛子が電話をかけているのが見えた。

孝幸は、一度、愛子の視界に入るように回り込んでから軽く手を挙げて合図した。

愛子は孝幸に気がつくと、頷いて、電話を終わらせようと話をまとめ始めた。

「じゃあ、そう言うことだから、また電話するよ。」

愛子は受話器を電話機に戻すと、孝幸に微笑みかけた。

「ずいぶん早かったわね。まだまだ生まれそうにないよ。」

「そうなんですか？」

「ああ。まあ。最初はだいたいこんなもんさ。あなたが来たなら、私は一旦家に帰って入院の支度を整えて出直してくるわ。」

そう言つと、義母の愛子は孝幸をおいてエレベーターの中に消えて行った。

孝幸はどうすればいいのかわからないまま、とりあえず、受付に行

つて、早紀が今どこでどうしているのかを聞いてみることにした。

「あのう、三浦と申しますが…」

事務服を着た中年の女性が、孝幸を見て微笑みながら応えてくれた。

「三浦早紀さんのご主人ですね？」

「はい。どうして分かったんですか？」

「あら？今、三浦っておっしゃったじゃありませんか。」

「ああ、そうか！」

孝幸は自分がかかなり浮足立っていることに、うろたえると同時にそんな自分を初対面の女性に見透かされていると思うと、なんだか急に恥ずかしくなってきた。

「初めてのお子さんだそうですね。おめでとうございます。」

「ありがとうございます。」

孝幸は、女性の目を見ることができずに、横を向いて返事をした。受付の女性は、患者のリストをチェックしながら、孝幸に話しかけた。

「私も同じ名字ですから奥さんのことはよく覚えています。今は準備室にいますから、もう少し待っていて下さいね。」

「はい。」

孝幸は、そう返事をして、女性の胸に付けられたネームプレートを見た。

『三浦由紀子』と書いてあった。

良く見ると、それほど中年という感じではなかった。

“早紀と同じくらいかもしれないなあ…”そんなことを思っていると、三浦さんは早紀がいる準備室の場所を教えてくれた。

孝幸は三浦さんに礼を言っ、早紀がいる準備室へ早足で向かって行った。

産気づいたと言っても、陣痛の間隔が短くなって、その度に痛みが伴うので、担当の先生に相談してみたら「もう、いつ生まれてもおかしくない時期なので、思いきっていらっしゃい。病院に入れば、

赤ちゃんもその気になって出てくることもありますから。」などと
言われたのでとりあえず、病院に来たのだった。

なので、母親の愛子と二人で、タクシーで来た。

病院に来てからは、しばらく落ち着いていたのだけれど、病院の空
気を感じているうちに、先生が言ったとおり、子供が出てきたがつ
ているような気がしてきた。

「ねえ、お母さん、なんだか生まれそうな気がしてきたわ。」

「いいや、まだまだだよ。」

「そうかなあ…」

「一応、孝幸さんには連絡入れておいたからね。時期に来るんじゃないかな。」

「どうかしら…このところ、毎日残業で、帰りも遅いから。」

「ばかだねえ。男なんてものは子供が生まれるなんて言ったら、仕
事さぼつても飛んで来るもんだよ。」

「お父さんもそうだったの？」

「うーん…あれは例外だね。出産に付き合うところか、あんた達の
オムツも替えたことがなければ、ミルクをやったこともないよ。1
日中家にいたのに、本当に役立たずだったよ。その、お父さんに、
一応電話してくるわね。さっきは家にいなかったから、誰もいなく
て心配してるといけないから。」

「そうね。」

早紀は、愛子に手を振ってベッドに横になった。

陣痛の間隔がだんだん短くなってきた。

本当に、もうすぐ生まれそうな気がして、一人になるとなんだかと
ても心細くなった。

しばらくすると、部屋のドアが開き、孝幸が入ってきた。

「早紀、大丈夫か？」

孝幸の顔を見たときに、安心した。

安心したら、急に激痛とともに、破水したような感覚に襲われたの
で、孝幸に確認した。

「破水したかもしれないんだけど、どうなってる？」

「えっ？」

孝幸は寝間着をめくって見てみたが、もはや、冷静に対応できる状態ではなかった。

「今、医者を呼んでくる。」

そう言つて、部屋を飛び出した。

早紀は、孝幸のうろたえようを見て、なんだか可笑しくなった。手に持っていたナースコールのボタンを押して、状況を看護師に伝えた。

「今行きますから、ちょっとだけ我慢していて下さいね。」

すぐに看護師が来て様子を見てくれた。

「意外と早く来ましたね。今から分娩室に入りましょう。」

孝幸は部屋を出たものの、どこへ行つて誰に言えばいいのかもわからず、廊下をウロウロしていた。

こんな時に限つて、誰とも会わない。

ふと思い出して、さっきの受付に行つてみることにした。

すると、『今日の診療は終了しました。』の札が掛けられていた。

こうなると、もう、何をどうすればいいのかわからなくなった。

ちょうどその時、奥の通路を三浦さんが通るのが目に入った。

「三浦さん。」

孝幸はそう叫んで、奥の通路の方へ駆けだした。

「まあ、ご主人。病院の中は走つてはいけませんよ。」

「あつ！すみません。あの…ちょっといいですか？」

「あら、わたし、既婚者からのお誘いはお受けできないんですよ。」

「！」

こんな時にこの人は何を勘違いしているんだ？

「それでは。」

そう言つて立ち去ろうとする三浦由紀子の腕を捕まえて、孝幸は説明した。

「なんだ！そうだったんですか。だったらナースセンターへ行った方が早いですよ。」

「その、ナースセンターってどこにあるんですか？」

「準備室のお隣ですよ。気がつきませんでしたか？」

「すみません。ありがとうございます。」

孝幸は、一応、礼を言っただけでナースセンターへ走りだしました。

背後から、「走らないで下さい。」という声が聞こえたような気がしたが、構っている余裕などなかった。

ナースセンターにたどり着くと、孝幸は開口一番こう叫んだ。

「破水したみたいなんですけど見てもらえませんか？」

近くにいた看護師に、「落ち着いてください。」となだめられて、

孝幸は少し落ち着きを取り戻したが、まだ、興奮気味だった。

「まず、お名前をし得ていただけますか？」

「はい、三浦孝幸です。」

「それはあなたのお名前ですね。破水したのはあなたですか？」

「何バカなこと言ってるんですか？ボクが破水するわけないでしょ！」

「そうですね。私もあなたのお名前を聞いたつもりはないんですけど。」

そう言われて、孝幸はようやく冷静さを取り戻した。

孝幸が落ち着いたとみると、その看護師はにっこり笑って、「三浦早紀さんのご主人ですね？」

と確認した。

「はい。」

孝幸が答えると、手招きをして、ナースステーションの中に招き入れた。

そして、孝幸は看護師から帽子と防護服みたいなものを手渡された。

「奥様は今、分娩室にお入りになられました。ご案内しますので、それを着ていただけますか？」

「えっ？分娩室ですか？」

「そうですよ。たぶん、ご主人が部屋を出られた後に、奥様はナースコールを押して担当の看護師を呼んだようですね。」

「ナースコール？」

孝幸は、今までの自分の行動が何の役にも立たなかったことにがっかりした。

「こんな、一生懸命なご主人がいてくれるなんて奥様はとても幸せですね。」

そう言われて、孝幸は少しだけ、自尊心を回復することができた。

「ありがとうございます。」

そう、礼を言って、その看護師の顔をはじめてまともに眺めてみた。まだ、二十代の前半ではないかと思った。

こんな、娘に軽くあしらわれてしまった自分はまだまだガキなんだと思いつつ、こんなに若いのに、これだけすごい対応ができるこの娘はすごいなあと感心した。

“スースーハー” そばで立ち会ってくれている看護師がそんな風に早紀を促している。

「はい、いきんで。」

けんめいにいきんで見せる早紀。

孝幸は、出産に立ち会ってはいるものの、何をしていたのか分からず、ただ、早紀の手を握りしめることしかできなかった。

そんな孝幸を、看護師さんはにこやかに見守っている。

「ご主人、しっかりその手を握ってあげていて下さいね。」

それから何時間経っただろう？

良く覚えてはいないが、もしかしたら、30分くらいだったかもしれない。

しかし、この子の産声だけはよく覚えている。

「ほら、もう少しですよ。がんばって！」

そう言われて早紀は最後の力を振り絞り、いきみ続けた。

すると、“オギャー” 元気な産声とともに、一つの新しい命がこの世に誕生した。

孝幸はその瞬間腰を抜かして、その場にへたり込んだ。

医師に手を差し出され、やっとの思いで立ち上がると、その場にいたすべての人たちから祝福された。

「おめでとうございます。女の子ですよ。」

「ご主人よく頑張りましたねえ。でも、いちばんのお手柄は奥さんですからね。」

孝幸は、早紀に歩み寄りねぎらいの言葉をかけた。

「よく頑張ったね。君は本当に偉いよ。それに比べたら、ボクなんか…」

孝幸の目からは、見る見るうちに涙がこぼれ落ちてきた。

その涙が、早紀のほつぺたに落ちた。

早紀はそれを舌でなめて「しょっぱいよ。」と孝幸を見つめた。

「ねえ、疲れたから、少し休むね。」

そいつで早紀は眼を閉じた。

「うん。うん。ゆっくり休めばいいよ。」

孝幸は保育器に入れられた自分と作の子供をずっと、飽きることなく眺めていた。

「お母さんがあんなに苦労して産んでくれたんだ。健やかに育ってくれよ。」

そう思いながら、いつまでもその子の顔を眺めていた。

愛子はその孝幸を見て、早紀にこう言った。

「先が思いやられるね。こりゃあ、この子が嫁に行く時は大変だよ！」

早紀も頷いて、応じた。

「そうね。」

運命の“あの人”、運命の“あの子”

2・運命の“あの人”、運命の“あの子”

首に風呂敷のマントをくくりつけて、ジャングルジムの天辺で腕を組み、遠くを見つめているのは西崎拓にしざきたく5歳。

幼稚園の年長で、春から小学校にあがる。

体も大きく力も強い。この幼稚園の、いわゆる番長格だ。

それでいて、思いやりがあり、年中、年少のチビ助たちからは絶大な人気を誇る。

風呂敷のマントは今時珍しいスタイルだが、本人はそれが気に入っていて、お昼寝開けのお迎えまでの間はいつも、こうやってジャングルジムの上で迎えが来るまでの間の時間を過ごしているのだ。

「タクちゃん、危ないから降りてらっしゃい。」

担任の真弓先生が声を掛けても知らぬ顔をして遠くを見つめている。それは、お迎えが来る道の方とはまるで違う方向なのだ。

拓がいつも見ているのは日が沈む西の方角だ。

「タイシヨウ、何を見てるの？」

一の子分の小山悠斗こやまゆうとがジャングルジムに登ってきた。

「ゆくと、神様って本当にいると思うか？」

「神様？」

「そうさ。ボクは絶対いると思う。」

「ボクも思うよ。クリスマスにプレゼントくれるもの。」

「バカ！それはサンタクロースだ。それに、そのサンタはたぶんゆとのパパかママだ。」

「えーっ？違うよ。だって、パパとママはボクの欲しいもの知らない

いのに、クリスマスの朝はちゃんとボクの欲しい物が枕元に置いてあるもん。」

「ゆーと、お前クリスマスの前にサンタに手紙を書くだろう？」

「うん！」

「その手紙は誰がサンタに届けるんだ？」

「郵便屋さんでしょう？」

「じゃあ、お前サンタの家の住所知ってるのか？」

「ううん。だから、ママが住所書いてポストに入れるんだよ。」

「やっぱりそうか！それはたぶん、お前のママが、パパの会社に送っているんだ。そしてその手紙を見たお前のパパがクリスマスイブの夜にプレゼント分かって帰るのさ。」

「タイシヨウ、それって本当なの？」

「ああ、多分な。」

悠斗は頭を抱えて悔しがった。

今までサンタクロースは本当にいると思っていたからだ。

今時、この歳までサンタクロースを信じているなんて、なんと純情な子供なのか……

「悠斗ーっ、帰るわよ。」

悠斗の母親が、迎えに来て、ジャングルジムのしたから呼んでいる。悠斗はタクの方を見て、もう一度確認するように首を傾げて見せた。拓は間違いないというように頷いて見せた。

母親に連れられて帰る悠斗が「ねえ、サンタって本当はパパなの？」

と母親に尋ねる声と、「あら、知らなかったの？」と素っ気なく答える母親の声が拓の耳に入ってきた。

間もなく、「タクーッ、おまたせー。」と叫ぶ声が聞こえてきた。

タクの祖母、峰子だった。

タクの両親は共働きで、幼稚園のお迎えは、一緒に暮らしている祖母の役目だった。

母親が帰ってくるのは6時頃だ。

夕食の買い物をしてから帰ってくる。

帰ってくると、そそくさと食事の支度をして、出来上がる頃には父親も帰ってくる。

こうして、家族4人揃って、食事をするのが西崎家の日課となっている。

食事が終わると、拓は決まって父親と風呂にはいる。

その日幼稚園であつたことを必ず話して聞かせるのだ。

風呂から上がると、みんなでテレビを見る。

そして、9時頃になると拓は布団にはいる。

ある日、拓が近所の公園で遊んでいると、白いヒゲを生やしたおじいさんが現れて拓にこう言った。

「西崎拓、良く聞け。今日、お日様が沈む方角にある町で一人の女の子が産まれる。15年後にお前はそのこと仲良くなるじゃろう。」

そしてその女の子はそれから1年後に歩けなくなってしまうじゃろう。お前は決してその子を見捨ててはいかんぞ。そして、お前が支えてやればきつと奇跡が起こるじゃろう。」

拓は、逃げたくても動くことが出来ずに、そのおじいさんの話をずっと聞いていた。

体が動くようになって、ハツと思つた瞬間には、既に、おじいさんは消えていた。

拓は辺りを見回したが、おじいさんの姿はどこにも見えなかった。

それは2月の3連休前の金曜日の朝に見た夢だった。

拓は、目がさめてからも、なんだか不思議な感覚が体の中でくすぐっているような気がした。

そして、その日の夜、布団に入つてすぐに、“オギヤー”という、赤ちゃんの泣き声とセーラー服を着た女の子の顔が拓の頭の中をよぎったのだ。

朝の夢に出てきたおじいさんが言ったのはこのことだったんだ。

拓は、この日から、15年後に知り合うことになるであろうセーラー服の女の子の顔を忘れることはなかった。

そして、幼いながらに「今よりもっと強くならなきゃ。」と思うようになった。

小学校にはいると、近くにある警察の道場で剣道を習い始めた。拓の父親の勝も大学まで剣道をやっていて、二段の腕前だった。学校では友達がいじめられていると、相手が上級生でも食ってかかった。

体格にも恵まれていたので三年生くらいまでなら互角に渡り合った。家に帰って、風呂で父に話しをすると、ことのほか誉められた。それが嬉しくて、喧嘩と剣道に励んだ。

しかし、勉強も頑張った。

成績は常に上位10番くらいには入っていた。通知票でも2と1はもらったことがなかった。

小学校の上級生になると、廻りの他の小学校でも“第五小に西崎あり”という評判がたち、六年生になると、地区の陸上・水泳の競技会で1位を5種目で取った。

特に、1000m走では区大会でも優勝して都大会に出場したが、風邪をこじらせ、惜しくも予選で敗退した。

噂を聞きつけた私立中学から「是非うちの陸上部へ。」といったスカウトの話が何件あった。

両親、特に父親は私立にやりたかったようだが、拓がどうしても地元の中学に行きたいと言い張ったので、両親は拓の意見を尊重して地元の公立中学に進学させた。

中学にはいると、拓は陸上部に入部した。

部活が休みの土・日には、剣道の道場に通うことも続けた。

サッカー部に入った小山悠斗とは今でも、親友と呼べる仲だった。

拓がトラックを走っていると、悠斗が横に並んで併走を始めた。

拓は悠斗に合わせてペースを落とした。

「なあ、拓。あの話し、まだ信じてるのか？」

拓は悠斗にだけは、あの白いヒゲのおじいさんの話をしていた。

「ああ、あれはただの夢なんかじゃない。ただの夢にしちゃあ、リアルすぎる。」

「お前が私立のスカウトを蹴って、ここに来たのもそのせいなんだろう？」

「まあな！彼女が来ていたセーラー服はこの制服だった。」

「気のせいじゃないのか？だって、彼女はずっと西の町に住んでいるんだろう？中学になったらこの町に引っ越して来るとも言うのかねえ？例えそうでも、彼女がここに入ってくる時には、俺たちもう卒業しているだろう？」

「確かにそうだが、あの時の彼女がこの制服を着ていたのは、俺にここへ来いというメッセージなんだと思う。」

「オーケー！何かあったらいつでも力になるぜ、大将。」

そう言うとき悠斗はフィールドのセンターサークルの方に向かってコースをそれていった。

拓は悠斗に手を振り、再びペースを上げた。

ここ数年で、この町でも、高層のマンションがいくつも建ち並んで、人工が急激に増加した。

昔からこの町に住んでいる人たちに交じって、よその土地から移ってきた新住民の割合がかなり多くなった。

三浦家も、恭子が生まれた後に二人の子供が産まれて、今住んでいるマンションが手狭になってきたため、この町の高層マンションの4LDKのファミリータイプの広めの部屋を購入することにした。恭子が小学校4年の時に引っ越してきていた。

恭子たちが引っ越してきたのは第三小の学区だったため、恭子たち兄弟は三人揃って第三小学校に転校した。

恭子が転校してきたときにも、まだ、“伝説のガキ大将、西崎拓”の名前は語り継がれていた。

その名前を耳にしたとき、恭子の脳裏にある記憶がよみがえった。“にしぎたく”…なぜだかわからないけれど、懐かしい響きが

する。

そして、その名前には心地よい安らぎを覚えたのである。

恭子は、いつかその人がわたしの前に現れるに違いない……ふとな気がした。

転校して最初に友達になった野々村仁美ののむらじみに、放課後誰もいなくなつた教室で、西崎拓つてどんな人だったのかを聞いてみた。

「お兄ちゃんの同級生がその人の親友だつて聞いたんだけど、お兄ちゃんはあまり知らないみたいだから。役に立てなくてごめんね。でも、どうして？その人のことが気になるの？」

仁美は教室の後ろの方の窓際の壁にもたれかかつて恭子の方を見た。

「うん、ちょっとね……」

恭子も窓に近づいて、仁美と並んで壁にもたれかかった。

「なんか訳あり？」

恭子は体を反転させて窓から外の景色を眺めながらつぶやいた。

「わたしね、“その人”のこと、生まれる前から知っていたの。」

仁美は驚いて恭子の横顔を見つめた。

そして、気を取り直して聞き返した。

「なにそれ？前世がどうか、そういう系？」

「ちよつと違うんだけど……わたしにも良く分からないわ。ただ、“

その人”がわたしの運命を左右する人かもしれないの。」

「ふーん？なんか変なの。」

「そうね。」

校庭からは、どこか遠くを見つめる恭子と、後姿の仁美が並んで立っているのが見えた。

拓は、恭子と恭子の家族がこの町に引越してきていることなど知る由もなかった。

まして、恭子の名前さえ知らなかった。

拓が知っているのは、15歳になった恭子の顔だけだ。

今の小学校4年生の恭子と道で偶然すれ違ったとしても、それが恭

子だとは気がつかないだろう。

この年、拓は中学校を卒業する。

あれから10年が過ぎようとしている。

計算上、“あの子”は今、小学校の4年か5年……いや、4年だ。

ここ（拓が通うこの中学校）には、どんなかたちで来るんだろうか？
もしかしたら、もうこの町にいるかもしれない。

例えば、あの新しいマンションのどれかに引越してきているかもしれない。

だとしたら、第三小か第四小、第五小に通っているはずだ。

拓は、自分の母校でもある第五小の校門の前に来てみた。

ちょうど、下校中の児童達が出てくるところだった。

“あの子”の面影のある子はいないか出てくる子を一人一人確認してみた。

似た感じがする子は何人かいたが、どれも違う子だった。

拓には、そう確信できた。

しばらく眺めていると、懐かしくなり、正門から校庭の方へと歩いていった。

すると、校舎の方から拓を呼ぶ声が聞こえてきた。

「おい！西崎君じゃないか？」

拓が振り向くと、体育教師の野村が手を振っていた。

「今、そっち行くからちよつと待ってる。」

野村はそう言うのと、ニッコリ笑って窓を閉めた。

拓が在学中、野村は5・6年の担任だった。

そして、陸上の基礎を拓に教えたのも野村だった。

拓は校庭を端から端まで見渡してみる。

なんだか少し狭く感じる。

野村はすぐにやってきた。

「お久しぶりです。」

「おう！元気そうじゃないか？ずいぶん頑張ってるみたいだなあ。」

「ええ、おかげさまで。それより、この校庭ってこんなに狭かった

かなあ？」

「ああ。卒業した連中はみんなそう言うけど、校庭はちっとも変ってない。お前たちがでかくなったからそう感じるだけさ。ところで今日はどうしたんだ？」

「なんだか懐かしくなって…」

拓の表情が心なしに暗いような気がしたので、野村は心配になった。

「なんかあったのか？」

「えっ？いや、別に…」

「そうか？それならいいが…そういえば今年は受験だろう？どうだった？」

「推薦で城東第一に決まりましたよ。」

「そうか、一校に決まったか！お前なら当然だな。」

「はい。」

拓は、当然の結果だというように胸を張って答えた。

「こいつ！」

野村は呆れて、拓の背中をポンと叩いた。

「まあ、先生のおあげですよ。先生が陸上を教えてくれなかったら、推薦はなかったですよ。」

拓と野村はしばらく立ち話をした後、別れた。

拓は、学校の近くの公園でブランコに腰を降ろし、軽く漕いでみた。思えば、あの白いヒゲのおじいさんに会ったのが、まさにこの場所だった。

「せめて名前だけでもわかればなあ…」

拓は、高校に進学しても陸上部に入った。

城東第一高校は、陸上の名門校で都内はおろか、関東各地の中学から優秀な選手が集まってくる。

そして都内有数の進学校でもある。

中学では、関東大会まで行った拓でも、代表になるのは至難のわざだったが、1年の秋には100×4のリレーメンバーに選ばれた。

勉強の成績も400人いる学年の中で、常に50番以内を確保していた。

もちろん才能もあつたに違いないが、拓は努力することを惜しまなかった。

“あの子”が現れた時に、ちゃんとささえてやれる男になっていくてはいけない。

その思いだけで、人一倍頑張ることができたのだ。

もしかしたら、“あの子”は現れないかもしれない…そう思ったことも何度かある。

しかし、拓は信じ続けた。

だからこそ、今の拓がある。

そして、その事実こそが本当に起こりうる運命の証であると拓は信じた。

“あの子”と出会うのは拓が大学1年の学年末、そして“あの子”は中学3年の卒業前ということになる。

あと3年…

2年の春期大会で拓は100mの代表になり、日本記録に近いタイムで都大会を優勝した。

全国の切符を手に入れたと同時に、一躍陸上界のスターになった。

そんな時、小学校の恩師、野村から声がかかった。

「区の連合陸上大会に参加する子供たちのコーチをやってももらえないか？」というものだった。

高校の顧問からは了解を得ているということだったので、快く引き受けた。

野村の話だと、6年生を中心に第五小のグラウンドで、第三小、大四小の子供たちと合同練習を実施することになっているらしい。

もしかしたら、“あの子”に会えるかもしれない。

そんな期待をしたのも、引き受けた理由の一つだった。

“伝説のガキ大将、西崎拓”はもはやこの町のヒーローだった。恭子の家族もみんな拓のことを知っていた。

特に父親の孝幸は、拓が日本記録を更新してオリンピックの代表になるだろうとスポーツニュースで取り上げられて以来、大のファンになってしまった。

「お前たち、この町の引越してきてよかったなあ。オリンピックランナーの後輩になれるんだからなあ。」

「まだオリンピックに行くつもりもないし、日本記録も更新してませんから。」

恭子が冷静に言うと、孝幸はむきになった。

「いや、絶対間違いない。あいつなら必ずやってくれるよ。もしかしたら、恭子だって、西崎君のお嫁さんになれるかもしれないんだぞ。」

「いやだあ！お父さんったら。」

この頃は、そんな会話がどこの家でも交わされていたに違いない。

しかし、恭子はひそかに思っていた。

もしかしたら、案外そんなことになるかもしれない…と。

6年になった恭子は、春の運動会でリレーの選手に選ばれ、3位でバトンを受け取ると、前の二人をあつという間に抜き去り、トップでアンカーの男子にバトンを渡した。

アンカーの男子がゴール直前で抜き返されて、恭子のチームは2着に終わったが、恭子のタイムは男子より早かった。

当然、連合陸上大会では100mとリレーの選手に選ばれた。

そして、ニュースは突然やってきた。

第五小での合同練習に西崎拓が臨時コーチとしてやって来る…というものだった。

恭子は胸がドキドキして、押しつぶされそうになった。

“あの人”に会える…

合同練習の前日、下足箱で靴を履き替えていると、仁美が声をかけ

てきた。

「一緒に帰ろう！」

恭子は笑顔で仁美を見てうなずた。

「心ここにあらずって感じね。」

仁美にそう言われると恭子は自然に顔がほころんでいくのを感じて下を向いた。

「やっと会えるね！」

「うん。」

「私も練習見に行ってもいい？」

恭子も仁美はバレーボールのクラブに入っていたが、仁美の方は走るのが苦手だった。

運動会の100m競争もビリだった。

「練習じゃなくて、“あの人”を見に来るんでしょう？」

「へへっ！ばれたか。」

恭子は靴を履き替えると、とっとと玄関に向かって歩き出した。

「モタモタしていると置いて行くわよ。」

「あつ、まってよ。」

仁美もあわてて靴を履き換え、ケンケンして、つま先を蹴りながら恭子の後を追ってくる。

「知ってる？西崎拓って、第五小で野村先生に陸上を教わったんだって。」

「知ってるよ。」

「なんだ。」

仁美は、恭子が住むマンションの近くにある居酒屋の一人娘だった。その居酒屋のマスター……つまり、仁美の父親が第三小のバレーボールチームの監督なのだ。

恭子も転校してきたときに、仁美からバレーボールに誘われてチームに入ることにした。

背の高い仁美と違って、恭子はどちらかというと小柄なほうだったので、6年生になった時、限界を感じてバレーボールはやめてしま

った。

しかし、バレーボールのトレーニングで走り込みをやっていたおかげで、走るのだけは早くなった。

恭子は歩きながら、仁美にずっと顔を見られているような気がした。だけど、振り向いて目が合ってしまったら、ばつが悪いと思ったら前を見ているしかなかった。

自然と歩く速度が早くなっていった。

「ねえ、恭子ちゃん、なんか怒ってるの？」

仁美にそう言われて恭子は立ち止まった。

「ごめんなさい。なんか、恥ずかしくて……」

「わかる、わかる。私もそんな人がいたら、きっと胸がドキドキして倒れちゃうわ。」

それから、あれこれ、仁美の恋愛観などを聞かされながら歩いた。仁美の家の前で別れて、恭子はマンシヨンのエントランスへ向かった。

オートロックの操作パネルにルームキーを差し込むと、エントランスの扉が開いた。

エレベーターホールに來ると、2台のエレベーターの間にあるの掲示板上に合同練習の案内が貼ってあった。

“臨時コーチ、西崎拓”の文字が大きく書かれていた。

「うわっ！」

恭子は、あすの合同練習には見物人が山ほど来るかもしれないと思った。

午前中の校庭では少年サッカーの練習が行われていた。

連合陸上大会の合同練習は午後3時からだったが、拓は久しぶりに悠斗に会うためにお昼前のこの時間に学校へ来た。

悠斗は、サッカーの名門校へ進学し、1年でレギュラーの座をつかみとった。

しかし、冬の全国選手権で対戦した相手チームの選手に足を踏まれ、

骨折。

日常生活には影響がないほど回復はしたが、サッカー選手としての再帰は望めないと知り、サッカー部を退部して、今は土日限定で母校の少年チームの臨時コーチをやっている。

終了の合図のホイッスルが鳴ると、将来のＪリーガーや日本代表になるかもしれない子供たちが監督の野村先生の前に集まってきた。野村先生の横に立っているのが悠斗だった。

何やら、子供たちに一言、二言、説教しているようだったが、拓のところまではその声は聞こえなかった。

子供たちが、そのたびに声を揃えて「はいっ！」と言っただけがはつきりと聞こえてくる。

そして最後に「ありがとうございました。」と子供たちが頭を下げると、各々迎えに来ている保護者の方へ散らばって行った。

それを見届けるようにして、悠斗と野村先生が近付いて来る。

子供を連れて拓の横を通り過ぎる母親たちは、例外なく拓に「がんばってね。」とか「応援してるわよ。」などと声を掛けて行く。

さすがに、地元のヒーローだけあって、拓を知らないものなどこの町には存在しないようだった。

「こりゃあ、悪いことなんかできないな。」

拓はそう思っただけで苦笑いした。

そして、悠斗が手を挙げてハイタッチを求めながら拓のそばにやってきた。

拓も手を挙げ、応えた。

「よっ！大将。」

そう言っただけで、悠斗は思いっきり拓の手のひらを引っ叩いた。

「あいたっ！」

拓は思わず手を引っ込め、もう片方の手で引っ叩かれた手をさすった。

「相変わらずだなあ。元気そうで安心したよ。」

その後ろから笑いながら野村先生が声をかけた。

「久しぶりに飯でも食いに行こうか？」

「まさか、それって今日の日当のつもりですか？」

拓が冗談で言うと、野村はマジマジと頭を下げて手を合わせた。

「日本一のランナーに飯一杯でコーチを頼むなんて本当に悪いと思っ
っているんだ。」

そんな野村を見た拓と悠斗は「先生、冗談だよ。」と、腹を抱えて
笑った。

「それにまだ、日本一にはなってますから。」

拓の言葉に安心した野村は行きつけの中華料理屋に二人を案内した。

店に入ると、野村はまず餃子を二人前と野菜いためライスに生ビ
ールを注文した。

「これは内緒だぞ。」

野村はそう言つて、生ビールのジョッキを指した。

「じゃあ、俺も他のもかな？」

悠斗が言つと、「ばか！未成年のくせにふざけるな！」と、野村に
頭を小突かれた。

「まったく冗談の分らん人だなあ。なあ、大将！」

拓は笑いをこらえて頷いた。

「まあいい、お前たちも早く好きなものを頼め。大きな声では言え
ないが、ここの店は頼んでから出てくるまでに、相当時間がかかる
んだ。」

そう、小声で言う野村のうしろから店主の声が聞こえてきた。

「先生、聞こえてますよ。遅いのが嫌なら他の店に行ってもいいん
ですよ。」

野村は咳払いして、二人にウインクした。

「耳だけはやたら地よく聞こえるみたいだな」

再び、厨房の奥から「なんか言ったか？」と、声が聞こえてきた。
三人は顔を見合わせて、思わず噴出した。

恭子の家でも昼食を取っていた。

恭子は父親が大騒ぎすると思ったから、合同練習の臨時コーチに西崎拓が来ることは言わないでおいた。

ところが、エレベーターホールの掲示板に貼られてある案内を孝幸が見逃すはずはない。

案の定、今日の練習を見に来るつもりでいるらしい。

「お父さん、やっぱり見に来るよねえ？」

「当たり前じゃないか！大事な娘がオリンピックランナーに見初められるかもしれないんだからなあ。」

「あなた、変なことしないで下さいね。恥ずかしい思いをするのは恭子なんですからねえ。」

「お前たち二人揃って、いったい俺をなんだと思っているんだ？」

「まあ、あなたはご自分をなんだと思っているのかしら？」

「ん？まあ、なんだ！よき父親とでもいうか！」

「そうですね。あなたはともよき父親ですよ。ですから、優子と浩人も一緒に連れて行ってあげてくださいな。」

恭子たちが第五小に着くと、校庭の周囲は見物人でいっぱいだった。

地元のケーブルテレビまで取材に来ていた。

恭子は、同じ第三小の友達と引率の先生と一緒に練習が始まるのを待った。

しばらくすると、校門の方がざわついて来た。

野村先生と二人の高校生らしき男の人とが歩いて来るのが見えた。

野村先生の左側の人：

間違いない“あの人”だ。

運命の出会い

3・運命の出会い

拓たちが学校に戻ると、校庭の周りにはかなりの人ばかりが出来ていた。

「何だ？この人ばかりは。なんか面白いことでもやるのか？」

「何を人事みたいに言ってるんだ？みんな、お前を見に来たに決まってるじゃないか！」

拓は正直驚いた。

高校では、これほどスター扱いされることはなく、一歩間違えば、代表の座さえ危ういのだ。

実際、都大会クラスのランナーは数人いる。

拓たちのようにある程度完成されたクラスになると、0・01秒の壁がどれほど高いものなのかは、所詮素人にはわからないのだ。

それが、ちよつとテレビで取り上げられただけでこの騒ぎだ。

ただ、拓にしてみれば、こんな風にもてはやされるのは心地いいものだと思っていた。

それだけに、全国で無様な走りをしようものなら、何と言われるか…考えただけでも、ぞつとする。

もし、そんなことになったら、当分家に帰ってこられないな…

合同練習の主催者でもあり、この地区では指導者としても評価の高い野村が挨拶をしてから、拓を紹介した。

「ボクは第五小でこの野村先生に陸上を教えてもらったのがきっかけで本格的に走るようになりました。いわば、野村先生に出会わなければ、今のボクはありませんでした。みんなも、野村先生に教え

てもらえることはすごく幸せなことだと思います。今日は野村先生のお手伝いをさせていただきますのでよろしく願います。」
拓が挨拶を終えると、周囲から嵐のような拍手と、歓声が上がった。野村が拡声器を使って、予想外の見物者たちに注意を促した。それから、各学校の引率の先生を集めて、子供達を種目別に振り分けた。

子供たちはそれぞれの学校の体操着を着ていて、どの子もな名前を描いた布を胸に貼っている。

拓は、第三小の体操着が今でも変わっていないのを確認すると、懐かしさにとともに安心感を覚えた。

第五小の野村が長距離走、第三小の小林先生が投擲競技を、第四小の唐沢先生が跳躍競技を指導することになった。

拓と飛び入り参加の悠斗で短距離を教えることになった。

全員で準備運度をして、1週200mのトラックをゆっくり2週ほど走ってから、それぞれの種目別に分かれての練習が始まった。

短距離の選手は、各校男女二人ずつの12人。

とりあえず、各々の実力を見たかったので、一人ずつ50m走をやってもらうことにした。

悠斗にタイムを計ってもらうことにして、拓は一人一人のフォームや走るときの癖をチェックした。

野村の指導を受けているだけあって、第五小の子供たちはタイムもフォームも申し分なかった。

なかでも、長谷部と書かれた布を貼っている男子は、この時期の子供にしてはかなりいいセンスをしていた。

才能があるというのはこういう子のことを言うんだろ…と拓は思った。

話を聞いてみると、陸上競技が盛んな私立の中学に進むということだった。

第五小の子供たちに比べると、他の学校の子供たちはフォームもバ

ラバラで教えがいがありそうだった。

全員が走り終わったところで、悠斗が拓のところに走り寄ってきた。悠斗は、驚いたというような表情でタイムを記録した表を拓に見せてこう言った。

それを見た拓も、一瞬目を細め、悠斗に確認した。

「お前、計り間違えたんじゃないのか？」

悠斗は首を左右に振って、否定した。

「断じてない。なんなら、もう一度、彼女には知ってもらえばいいじゃないか？」

拓は“三浦”と書かれた布を付けている少女を捜した。

少女はすぐに見つかった。

第三小の体操着を着て、こちらをじっと見ていた。

拓は彼女を手招きした。

「三浦さん？ちよつといい？」

そう言って悠斗からストップウォッチを取り上げた。

「お前、他の子たちに、もも上げ特訓やらせといてくれ。」

もも上げ特訓とは、拓と悠斗が中学の時、教育実習で来ていた体育教師の卵に早く走る方法として教えられたものだった。

文字どおり、モモを高くあげてスキップするように走る練習方法だ。「了解！」

そう言っていると悠斗は三浦と書いた布を貼った女の子以外の子供たちを集めた。

恭子は、拓にアピールしようとか、“あの話”をしようとかいう気持ちには全くなかった。

今はまだ、その時期ではないと感じていたからだ。

ただ、“あの人”の顔をその目に焼き付けておきたかった。

テレビや新聞の写真では何度も見たが、実物を見るのはこれが初めてだった。

そして、振り向いた拓と目が合うと、拓が手招きしていたので、辺

りを見回してから、拓の方に向き直り、自分を指して、読んでいるのが自分なのかを確認した。

拓は頷いて、恭子の名を呼んだ。

「三浦さん、ごめんね。ちょっとタイムを計り間違えたみたいだから、もう一度走ってもらっていいかな？」

「わかりました。」

恭子は頷いて、スタートラインの方に歩いて行った。

ゴールラインに着いた拓がピストルを高くあげてスタートの用意を促した。

恭子はクラウチングスタイルでピストルの先端を見つめた。

白い煙が上がるのと同時にスタートした。

その瞬間、パーンと鳴り響く音が辺りにこだました。

拓は、恭子のスタートを見て、抜群の集中力とタイミングの良さに感心した。

荒削りだが、前傾姿勢で、足も高く上がっている。

恭子の走りは、こうして見ていると、さっきとは違って何かにひきつけられて行くような気がした。そんな感覚に見舞われているうちに、恭子はみるみるゴールに迫ってくる。

そして、あっという間にゴールを駆け抜けて行った。

先ほど、悠斗がしましたタイムより0.02秒速いタイムだった。

「これは……」

拓は、ふと、長距離の選手たちにフォームの型を教えている野村の方を見た。

野村はすぐに拓の様子に気がついた。

「はい。じゃあ、そんな感じでちょっと走ってみようか。トラックをゆっくりでいいから3週走ってみて。」

そう言っただけで子供たちをトラックに送り出すと、拓の方に駆け寄った。「どうした？」

拓は野村にストップウォッチを見せた。

「先生これを見てください。」

「ほーう！大したタイムじゃないか。どこの子だ？」

野村が感心していると、ゴールを駆け抜けて、校門の近くまで走っていった恭子が戻ってきた。

「今度はちゃんと計れましたか？」

声の主を見て野村は驚いき、拓を見た。

「まさか……」

「はい。」

恭子は、きょとんとした表情で二人を交互に眺めた。

拓は久しぶりに自宅に戻っていた。

普段は、高校の体育寮に入っていて、土・日も練習があるので、通常は月1回の連休の時くらいしか自宅には帰らない。

この日は特別に次の日の練習も休みを許可されていたので、自宅でくつろぐことにした。

拓の部屋は、高校に入る前のままで、入試のための参考書などがぎっしり詰まった本棚に混じって陸上競技の雑誌や専門書が陳列されている。

拓は、ポケットアルバムを何冊か手に取って、懐かしい写真を眺めてみた。

幼稚園のジャングルジムの天辺で、夕陽を受けながら風呂敷のマントを首にまいた自分の姿を見て、思わず吹き出してしまったが、すぐに真顔に戻って窓の外を見た。

窓からは沈んでいく太陽の日差しが入ってきていた。

あの頃見ていた西の空と同じ夕陽だった。

今日の合同練習は、久しぶりに、のびのびとした気持ちで陸上に接することができ、有意義で大いに収穫もあった。

三浦恭子という女の子の才能には本当に驚かされた。

最初の50m走では、女子の中では抜群のタイムだった。

男子を含めても、レベルの高い第五小の二人と遜色がなかった。

その後の練習で、ちょっとしたアドバイスをすると、すぐに走る“コツ”をつかんだようだった。

練習終了前にもう一度50m走のタイムを計ったら、どの選手も0.01〜0.1秒程度は早く走れうようになっていた。

しかし、三浦恭子は特別だった。

タイムだけなら、今日集まったどの子よりもいいタイムを叩き出した。

もちろん、男女含めての話だ。

連合陸上大会で走れば、彼女のもとに名門校と言われる学校のスカウトたちが群がるに違いない。

これは、ちょっとした楽しみができた。

拓は、自分のことのように嬉しくて仕方がなかった。

そして、この日いちばん大きな収穫だったのは、“あの子”の名前を知ることができたことだ。

“あの子”は拓が予想した通り、少し前にこの町に引っ越してきていたのだ。

三浦家では、恭子の父親孝幸が興奮して話している。

「でかしたぞ、恭子。あの、西崎拓に見初められるとは大したものだ。」

「見初められるってなんなの？」

恭子は、うざったそうに孝幸を睨み返した。

「そんなに西崎拓が気に入ったのならお父さんが結婚すればいいでしょう！」

「なにを悠長なことを言っているんだ？このチャンスを逃す手はないぞ。他の誰かに持っていけないように今からつばを付けておいても損はないと言ってるんだ。」

晩酌のビールを飲みながら、ほろ酔い気分の孝幸は目をワクワクさせて夢を膨らませている。

「お父さんったらいい加減にしたら？恭子はまだ小学生なんだから。」

「何を言っただ、戦国時代や江戸時代には12、3で嫁に行くのは当たり前だったんだぞ。」

「今は江戸時代でもなければ、戦国時代でもないでしょう？ いい加減にその話はもうやめにしましょう。さあ、御飯よ。」

孝幸は、グラスに残ったビールを飲み干すと、しぶしぶこの話題を切り上げた。

「第五小の野村先生と拓さんに、ちゃんとした先生について練習すれば、高校生くらいまでには全国大会に出られるようになるかもしれないって言われたわ。今度の連合陸上大会くらいなら軽く優勝できるかもしれないって。」

恭子は大皿に盛られたサラダを自分の小皿にとりながら自慢げに話した。

「足が速いのはお母さんに似たんだな。お母さんも、高校生の時にインターハイに出てるんだぞ。」

孝幸が言う。

「そうなの！知らなかったよ。」

恭子は驚いて母親の早紀を見た。

早紀は照れ臭そうに、優子と浩人の皿にサラダを取り分けていた。

「赤ピーマンは入れないでね。」優子が注文を付ける。

「好き嫌いはダメよ。」早紀は優子をたしなめ赤ピーマンの入ったサラダの皿を優子に渡した。

優子は恭子の妹で小学校4年生だ。

「俺、ピーマン大好き。」

弟の浩人が言う。

「浩人は何でも食べるから偉いね。」早紀に褒められると、自慢げに優子の方を見る。

浩人は小学校の2年生だ。

「ところで、恭子、中学はどうするんだ？」

孝幸が聞いた。

孝幸は、この町に引っ越してきてから、積極的に町会の行事に参加している。

そのため、町会のお偉いさん達ともひたしくなっていた。

実は、今日の合同練習を見に来ていた町会長が、野村先生から私立の中学のスカウトが恭子を勧誘に来るといふような話を聞いたと聞かされていたため、恭子が望めば、陸上競技の名門校といわれる私立中学への進学も考えはじめていたのだ。

そんな孝幸の考えなど知ってか知らずか、恭子はあっけなく「一中に行くよ。」と答えた。

一中というのは、もちろん、地元の公立中学校で、拓の母校でもある。

練習が終わった後は、拓の周りにサインを求めたり、写真を撮らせてほしいという、保護者達が群がってきた。

拓は、丁寧これらの人たちの希望を聞き入れてやることにした。

そんな中、一人の少女に意外な話を聞かされたのだ。

その少女は、どこで手に入れたのか、拓の写真を持って来てサインをねだった。

「伝説のガキ大将、西崎拓さんですよ。」

拓が卒業した後、第五小でそんなうわさ話がささやかれ始めていたのは拓も知っていた。

まさか、今でも語り継がれているとは思わなかったので、照れ臭そうに苦笑いした。

その少女は、拓に写真とサインペンを渡すと、こう告げた。

「運命の人へって書いてください。」

拓は一瞬、心臓が止まりそうになった。

「まさか…」そう思ったものの、気を取り直して、少女の顔を見つめた。

“あの子”の面影はどこにもない。

この少女がそんな風に言っただのは、ただの偶然か、もしくはミィハ

「的な発想からのことだろうと考え直した。
ところが、その少女は言葉をつづけた。

「恭子にあげるんです。拓さん、恭子はどうでした？あの子ったら、
おかしいんですよ。拓さんのこと、生まれる前からしていたってい
うんだもの。」

ペンを持った拓の手が止まった。

「キョウコって？」

「今日、練習で教えたでしょう？三浦恭子よ。」

拓は愕然とした。

辺りを見回し、恭子の姿を捜してみたが、どこにも見当たらなかった。

もう、帰ってしまったらしい。

「ねえ、早くサインして。」

少女に促されて、拓は再びペンを走らせた。

そして、サインをした後にこう付け加えた。

“何があってもボクがささえてあげるから…信じて”

写真を受け取った少女は拓が付け加えた言葉を読んで、ニッコリ笑
った。

「最後の言葉、私には意味が分からないけど、恭子なら、きっと喜
ぶわ。」

そして、拓に礼を言うと、小走りにその場を去った。

走り去る少女の後姿を拓は、ただ、ぼくと見つめていた。

彼女はボクのことを知っていた…

なのに名乗らなかった。

どうしてだろう？

部屋の窓から夕陽を見つめながら考えた。

ボクが思っていた人間とは違ったからか？それとも…

いくら考えても、納得のいく答えを見つけることは出来なかった。

何か理由があることは間違いないはずだ。

だが、やっとわかった。

“あの子”の名前は三浦恭子。

これからは、直接会うことがなくても、見守ってやることができる。今後、彼女の身に何が起こるのかはわからないが、とにかく今は見守ってやることしか拓には出来ない。

白いヒゲのおじいさんの予言だと、恭子とひたしくなるのはもう少し先になる。

どんな経緯でそうなるのかは想像がつかないが、あの予言が、どうやら真実であることがはつきりと見えてきた。

野々村仁美は、翌日の日曜日にバレーボールの練習試合があったため、恭子に拓のサイン入り写真を渡したのは月曜日になってからだった。

「恭子！土曜日 of 合同練習、よかったね。“あの人”どうだった？」

恭子と仁美は、恭子が転校してきた4年の時からずっと同じくラスで、出席番号も16番と17番で、席も、前と後だった。

仁美は後ろ向きに椅子に座り、背もたれに両腕をおいて、恭子の顔を下から覗き込むようにして尋ねた。

恭子は、机に両肘をつけて両手で顔を支えるようにした。

「拓さんって、すごいね。あの人 of アドバイスの通りに走ったらすごく早く走れたのよ。」

仁美は、恭子を睨み付けて、違う、違うという風に首を振った。

「そうじゃなくて、告白しなかったの？」

「わざわざ言わなくても、その時になれば自然と近くにいけると思っただから。」

「そんなことだろうと思ったよ。」

仁美は、やれやれというように両手を上げて、自分のカバンから1枚 of 写真を出して恭子の机の上に置いた。

その写真を見た恭子の表情を仁美はニヤニヤして眺めていた。

「仁美！あなた…」

「あの人」運命の人のこと知ってたよ。でも、それがあなただっ
てことは知らなかったみたいだけど…驚いてたし。」

「どうして、そんな余計なことをしたの？」

「あら？じゃあ、これはいらないのね。」

仁美が写真をしまおうとした瞬間、恭子の手がさつと写真をさらっ
ていった。

「それとこれとは別。仁美、ありがとう。」

恭子は、写真に書かれたメッセージを心に刻んだ。

“何があってもボクがささえてあげるから…信じて”

初めての金メダル

4・初めての金メダル

東京湾の埋立地。昔はゴミ捨て場だった地域だ。

近年、この地域に高層の共同住宅や大規模なショッピングセンターが進出し始めてきた。

恭子の父孝之が勤めている会社が、そのなかのプロジェクトの一つを請け負った。

会社の命運をかけると言っても大げさではないこのプロジェクトに会社側は孝之をプロジェクトリーダーとして、任命した。

孝之はプロジェクトの細部にまで細心の注意を払い、工事着工までに作業工程の計画から、初期作業における業者選定、資材の発注や製作物の図面承認、関係官庁への工事に必要な手続き等を完了させなくてはならなかった。

そう言った作業は、工事に入ってから順次行わなければならなかった。

孝之は5人の部下とともに、着工と同時に建設現場に常駐していた。

この日は朝からそわそわしていた。

朝礼の後は事務所で席について、パソコンの電源を入れると、現状までの工事予算収支を確認していた。

が、集中できずに何度も入力ミスを繰り返してはブツブツと独り言を言っていた。

「所長、気分転換にドライブでもしてきたらいかがですか？」

見かねた主任の新垣が進言した。

「いや、気持ちは嬉しいが、しかし業務時間中だからなあ…」

「だって、それ、今やらないといけない仕事でもないでしょう？現場の方は大丈夫ですから、どうぞお出かけ下さい。なんなら、今日はそのまま代休と言うことにしてしまっただろうですか？」

工事現場には似つかわしくない、ひよろつとした色白の新垣はにっこり笑って孝幸を送り出そうとしていた。

孝幸は、部下に対しての面倒見が良く、特に、家族や独身のものなら恋人が絡んだ私用について、寛大だった。

そんな孝幸だから、部下からも慕われていた。

今日が、孝幸の娘の陸上大会だということはみんな知っていた。

朝からそわそわしている孝幸に、新垣をはじめとする5人の部下はおろか、現場の作業員たちまでが気を利かせて口にした。

「所長、早く行ってやらないと、終わっちゃいますよ。」

作業員たちが口を揃えてそう言う、新垣の下についている宮本が、からかうように言い放った。

「そうですよ。後でやっぱ行つとけば良かったって後悔しても、やけ酒には付き合って上げられませんよ。」

新垣とは対照的で、いかにも体育会系といった感じの宮本は、よくこういった、やけ酒に付き合わされていた。

「そうか？お前たちがそこまで言うなら、ちよつとだけ行ってくることにするよ。終わったらすぐに帰るから、その間だけ頼むな。」
そう言う、孝幸はゆっくりとした歩調で駐車場の方へ歩いていった。

プレハブの事務所の角を曲がって少し歩くと、後ろを振り返り誰も見ていないことを確認するやいなや、全速力で車まで走った。

2階の窓からその様子を見ていた新垣は「素直じゃないねえ。」、宮本も「しかし、わかりやすい人ですね。」そう言っ、腹を抱えて笑った。

1年前は、800m走の代表だった。

長距離の経験が誰にもなかった、たまたま校内マラソン大会で

優勝した恭子が選ばれた。

校内マラソン大会は、学校近くにある河川敷の公園を周回するもので、5・6年生の高学年は1週約500mのコースを5週する。

距離だけ考えれば、2・5キロだが、子供の追いかけっこの様なそんな大会では、ペース配分もなにもまったく関係なく、はじめは100m競争でもしているようなペースで始まり、最後は歩くようにゴールするものがほとんどだった。

そんなレースで優勝したからといって、競技会で通用するわけはなかった。

案の定、スタートから飛ばした恭子は、すぐにスタミナを使い果たし、やっとの思いでゴールにたどり着いたが、後には誰もいなかった。

今年は得意の短距離走だ。

しかも、オリンピックに出るかもしれないランナーにコーチしてもらい、これくらいの大大会なら優勝できるとお墨付きをもらっている。否応なしにも期待が膨らむ。

しかし、それがプレッシャーでもあった。

恭子の最初のレースは予選の第3組。

合同練習をした第四小の選手が同じ組にいた。

恭子が2レーン、第四小の選手は6レーンだった。

8人で走って上位3人が準決勝に進む。

競技が始まると、あっという間に恭子達の順番がやってきた。

「位置について……」

恭子はゆっくりとスタートラインに向かい、クラウチングスタイルで集中した。

ピストルの音がパーンとはじけた。

全身の力をこめて地面を蹴りだす。

見る見るうちに加速していく。

左右の選手があっという間に視界から消えて行った。

恭子は白いテープを胸に受けてゴールを駆け抜けた。

「勝った！」

スピードをゆるめながら、軽くガッツポーズをして見せた。

誰かにうしろから肩をたたかれ、振り向くと第四小の選手だった。

「やったね！おめでとう。」

「ありがとう。あなたは？」

第四小の選手はVサインをして「3位に入った。」と嬉しそうに言った。

続く第4レースでは、同じ第三小の選手は登場したが、惜しくも4位で準決勝には進めなかった。

予選8レースが終わって、準決勝に進む24人の中に、合同練習に参加した6人のうち、第五小の二人と合わせて4人が準決勝に残った。

「今年の一中校区の子たちはレベルが高いねえ……」

来賓で来ていた区議会議員の金村雅夫が野村に声をかけた。

金村は第五小から一中を出た地元の議員だった。

「……特に、あの第三小の子は素晴らしい。予選のタイムは2位だったそうじゃないかね。」

そう続けて、野村の背中をポンと叩いた。

「はい、強い子は予選レベルだと、タイムより順位を見ながら流して走っていますから。次の準決勝が試金石と言ったところでしょかね。」

「それで、いけそうなのか？」

「はい！かなり期待できると思いますよ。」

「よろしい。今年は僕も鼻が高いよ。」

金村はそう言うと、来賓席の方に戻っていった。

孝幸は競技場の駐車場に車を止めると、スタンドに駆け上がり、フィールド内の様子をうかがった。

トラックでは長距離のレースが行われているようだった。

第三小の選手たちは100m走のゴール方面に近いところのテントにいるようだ。

その場所の真上に父兄の応援席があり、早紀が手を振っているのが見えた。

孝幸は急いで移動すると、他の父兄たちに会釈をして挨拶をしながら早紀の隣に腰を下ろした。

「あなた、仕事は大丈夫なの？」

「ああ、それより、恭子はどうか？ 予選はもう終わったのか？」

「ええ、無事準決勝進出よ。しかも、予選2位のタイムよ。」

「そいつはすごいなあ。それで準決勝は何時からなんだ？」

「いまやってる1500m競争が終わってからよ。」

「そうか、じゃあ、ちょうどいいとこだな。」

準決勝は8人ずつ3レース行い、各レースの上位2位までと、3

位以下の中からタイムのいい2人が決勝へ進む。

恭子は最終組で第五小の一人と同じ組に入った。

恭子が4レーン、第五小の選手は6レーンだった。

第1レースで第四小の選手、第2レースでは第五小のもう一人の選手が登場したが、二人とも僅差の3位で順位による決勝進出はできなかったが、タイムではまだ二人とも可能性を残していたので最後のこの第3レースが重要な意味を持つことになった。

レースのタイムが遅く、恭子と第五小の選手が1位と2位なら、4人そろって決勝に出ることができるのだ。

最終レースに出る二人は、当然そのことが分かっていた。

そんな二人に野村は釘を刺した。

「いいか、余計なことは考えるなよ！ 全力でいかないとやられるぞ。」

「

はい！」

二人は揃って返事をし、健闘を誓った。

そして、いよいよ第3レースのスタート時間になった。

恭子は集中した。

ピストルの音がはじけた瞬間、頭ひとつ飛び出した。
絶妙のスタートだった。

ゴールを通過するまで恭子の視界には誰も入ってくることはなかった。

圧倒的な強さだった。

予選のタイムを0秒5上回って、区の小学生記録を塗り替えた。
文句なしの決勝進出だった。

一緒に走った第五小の選手は4位だったが、タイムで決勝進出することになった。

なんと、このレースの4位までは、前2レースの1位のタイムを上回っていた。

残念ながら、前の二人は、準決勝敗退となったが、こんなタイムを出されては仕方ないとサバサバしたものだった。

午後からの決勝では二人を応援すると言って、自分のことのように喜んでくれた。

選手達は、PTAからの差し入れの弁当で昼食をとった。

午後からレースがある恭子は付け合わせの Pasta だけを口にしました。
余った弁当は孝幸に渡した。

「仕事さぼってこんなところにいるいいの？」

「さぼっているわけじゃないさ。今日はもう終わったんだ。」

「ウソでしょう？」

恭子は、孝幸が来てくれたのはちよつと嬉しかったのだが、照れ臭くて素直に「ありがとう」と言えず、わざとからかった。

そして、選手席へと戻っていった。

話を聞いていた早紀が口を挟んだ。

「あら？いつの間に終わっちゃったのかしら？」

「恭子が記録を塗り替えてからだ。」

「現場の人には話してあるのかしら？」

「今から電話してくる。」

孝幸はそう言つて、立ち上がった。すると、高橋がそこに立っていた。

高橋は、現在は各現場を統括する課長になっている。

「あつ、課長……」

高橋は首を振り、人差し指を口に当てた。

「新垣から聞いたよ。あっち（現場）は問題ないから最後まで応援してやれ。」

孝幸は高橋の横に立つと、頭を下げて礼を言った。

恭子が生まれる時、同じ現場の所長だったのが高橋だった。

その後も高橋とはコンビでいくつも仕事をした。

いわば、孝幸にとっては上司と言っても、友達のような存在なのだった。

「それにしても恭子ちゃんも大したものだなあ。あの時の子がこんなに立派になるなんて、俺も歳をとるわけだよなあ。」

そう言つて笑う高橋を、孝幸は、自分で言うほど年をとった風には見えないと思った。

「なに言ってるんですか？それじゃあ、遠回しに俺が歳を取ったと言っているようなもんじゃないですか。」

「そう聞こえなかったのか？俺はそう言つたつもりなんだがなあ。」

「あのう……漫才はその辺にして、お二人ともこっちに来て座りませんか？」

早紀が、隣のシートを指した。

早紀が座っているシートの二つ隣のシートにはハンカチが敷かれていた。

もちろん、ハンカチの敷かれてシートは高橋のためだった。

「さすが、早紀ちゃん！気がきくなあ。」

そう言つと、高橋はシートに敷かれたハンカチを手にとると、早紀に返して早紀の隣にちゃっかり座った。

「こんなヤツを座らせるのにハンカチなんか敷くことないよ。」

「あら、そうですね…」

独身の高橋は、三浦家の身内のような存在でもあった。

「恭子ちゃん、優勝したら、何でも好きなもの買ってやるからなあ。」

高橋は大声でそう言うと、恭子に向かって手を振った。

スタンドでなにやらわめいている高橋に気が付くと、“やれやれ”というように首を振った。

「こんな平日の昼間に、おじ様まで来ちゃって、あの会社、大丈夫なのかしら？」

二人が応援に来てくれたこと、予想通り周りの雰囲気を見捨ててはしゃいでいること、そんな二人を見ていると、恭子はこれから出場する、決勝のレース前に気持ちが楽になったような気がして感謝した。

決勝のレースを前に午後から、少し雲行きが怪しくなってきた。レースが始まる頃には、雨がぱらつき始めた。

100m走の決勝は1500m決勝の後に行われる予定になっていた。

ちょうど、今、1500mがスタートしたところだった。

1500mが終わると急に雨足が早くなってきた。

競技場の係り員たちが一斉に出てきて、100mのレーンにシートをかけた。

既に他のフィールド競技は終了している。

残すは100m決勝と100×4リレーのみだった。

競技委員が各校の責任者を集めて続行するかどうかを検討し始めた。とたんに、雨が上がって、薄日が差してきた。

レーンの整備が終わり次第レースを再開することになった。

恭子達はウォーミングアップを始めた。

係り員たちはレーンの所々にたまっている雨水を拭き取っている。

そして、準備は整った。

決勝のスタートを告げるピストルの音が高らかに大空にこだました。

連合陸上大会が行われた日の週末。

高橋と孝幸が中心になって、選手たちの慰労会を行うことになった。高橋は孝幸の上司でもあったが、この町で生まれ育った町会青年部の部長を務めていた。

孝幸達が引越すと決めた時、この町を選んだのは高橋に勧められたからでもあった。

慰労会は、第五小と第四小も合同で実施することにした。

そして、臨時コーチを引き受けてくれた西崎拓にも声をかけた。

しかし、拓は練習を休むわけにいかないと、小山悠斗を通じて丁重に断ってきた。

代わりに、悠斗が出席することになった。

会場は居酒屋“ばれいしょ”。野々村仁美の家だ。

“ばれいしょ”という店の名前の由来は、じゃがいもの馬鈴薯とバレーボールのバレーをかけたもので、じゃがいも料理がこの店の売りでもあった。

選手たちは是全員参加したわけではないが、それでも、3校合わせて40人近くが参加した。

子供だけ参加したところもあれば、保護者と一緒に参加したところもあり、町会のお偉いさんや先生も含めると、70人からの大人数になった。

“ばれいしょ”は2階の座敷も含めて100名ほど入れる店だったが、この日は店の外に『貸し切り』の札がぶら下げられていた。

子供たちは2階の座敷で、大人たちは1階のテーブル席とカウントーで大宴会が繰り広げられていた。

連合陸上大会では、何人かの生徒が優秀な成績を収めていた。

第五小では女子800mで3位、女子1000mで3位、女子1000×4リレーで2位、男子走り高跳びで6位、男子走り幅跳びで2位

と6位。

第四小では女子走り幅跳びで3位、女子800mで6位、男子400mで2位、男子1500mで5位。

第三小では女子100×4リレーで6位、男子1500mで5位、と入賞者を出した。

そして、3校合わせて唯一の金メダルを獲得したのが三浦恭子だった。

雨上がりに行われた100mの決勝はレーンのコンディションが悪く記録こそ平凡に終わったが恭子の強さは、決勝でも圧倒的だった。

準決勝で恭子と一緒に走って4位だった第五小の選手も決勝では3位に食い込んだ。

しかし、100×4リレーでは決勝には残ったものの、アンカーの恭子にバトンが渡った時には再開の8位だった。

それでも恭子が二人抜いて、どうにか6位に入り入賞を果たした。100mの代表になった選手と遜色のないベンバーを加え、実力のある4人のランナーを揃えた第五小は100×4リレーで2位に入った。

2階では恭子の周りに、他の学校の生徒たちも多く集まっていた。「三浦さんってすごいよね。区の記録塗り替えちゃったんだもんね。決勝の前の雨が降らなかつたら、もつといい記録でたかもねえ。」

「本当。男子の決勝の記録より0秒1遅かっただけでしょ？」

「もしかしたら、男子のレースに出ている優勝していたかもね。」
恭子は連合陸上大会以来、地区の女の子たちの間では、かなりの人気者になっていた。

だが、天狗になることもなく、依然と同じように学校生活を送っていた。

仁美は、そんな恭子のファンのために、プリクラで恭子に写真を撮

ってもらい、せっせと店の案内チラシに貼っては配り歩いている。

1階では、孝幸と高橋が将来はオリンピックに出て、西崎拓とカップルになってオリンピックペアの誕生だと大はしゃぎしている。あながち大ぼらという訳でもない話だけに、町会の連中もすっかりその気になって後援会を作るなどとい出す始末だ。

野村は、変に期待すると、プレッシャーでつぶれる子もいるからあまり大騒ぎしない方がいいとたしなめたが、「そんなことは分かっているが、今日だけは言わしてくれ。」そう言っただけで高橋が頭を下げるので、「わかってはいるならいいですけど…」と引き下がった。

悠斗は、酔っぱらった大人たちを尻目に、2階に上がっていった。大勢に囲まれている恭子を見つけると、片手を軽くあげて合図した。恭子は頭を下げてそれに応えた。

悠斗は恭子のそばまで行くと、「ちょっと三浦さんに話があるから。」と言って、廻りの子達を遠ざけた。

「すみません。助かりました。」

「助かった？」

「はい、正直言つと困っていたんです。私、話するのは苦手です。」
「なるほど、分るよ。拓のヤツもそうだけど、“英雄多くを語らず”ってね！なんかそんな言葉あったよね？」

恭子は首をかしげた。

「あれっ？知らない？おかしいなあ…違ったかなあ…まあ、そんなことはどうでもいいや。拓から手紙を預かってるんだ。」

そう言っただけで悠斗は恭子に可愛らしいイラストが描かれている封筒を渡した。

「バカにしてるだろう？いくら女のだと言ってもこれはちょっとガキっぽいよな？」

封筒を手にとった恭子は、悠斗の言葉を聞いてクスツと笑った。

「ありがとうございます。拓さんに伝えてください。よく私がこの

キャラクター好きなの知ってましたねって。」

「へー、そうなんだ。あいつも隅に置けないなあ。じゃあ、確かに渡したからね。」

そう言っただけで悠斗は立ち上がった。

歩きかけて、振り向くと、ひとつだけ質問があると言った。

「君はアイツが言うところの“あの子”なのかい？」

恭子には悠斗の質問の意味がすぐに理解できた。

「はい。」

そう返事をする、嬉しそうにほほ笑んだ。

その笑顔を見た悠斗は、何とも言えない不思議な気持ちになった。

「まいったな。あんな顔されたら俺だって……」

悠斗は後ろ髪をひかれる思いで、酔っ払い達の相手をしに階段を降りて行った。

つかの間の安らぎ

5・中学校の運動会／つかの間の安らぎ

慰労会が終わる頃には早紀が恭子を迎えに来た。

孝幸や高橋達は二次会だと言って、カラオケの歌えるスナックへ繰り出していった。

早紀と恭子はマスターに頭を下げて、店を出た。

「あなた、明日はお仕事なんだからあまり遅くならないように気を付けてくださいね。」

早紀は孝幸に注意を促したが、高橋がそれを制して、手を振った。

「早紀ちゃん大丈夫。なんたって俺が付いてるんだから。」

早紀は、笑って、高橋に応えたが、本音は「だから余計に心配なのよ。」そう思っていた。

部屋に戻ると恭子は、早速、拓からの手紙を広げた。

「まずはおめでとう。」

ボクには分かっていたよ。

君は最初の金メダルを手にしたわけだ。

これから先、君はきっと数え切れないほどの金メダルを手にすると思う。

しかし、忘れないでほしい。

世の中には、自分の意志や力ではどうしようもないことがある。

今は、まだ気にする必要はないかもしれない。

いつか、そういう壁にぶつかっても決してあきらめないで乗り越えてほしい。

ボクはいつも君を見ているよ。

君が生まれる前からずっと・・・」

この時はまだ、恭子には拓からの励ましの手紙にしか思えなかった。

恭子がこの手紙の本当の意味を知るのもう少し経ってからだ。

恭子は、この手紙をクリアファイルのポケットにしまい込んだ。

そのクリアファイルには、他にも、仁美から貰った写真が入っていた。

その翌年の春、恭子は地元の第一中学に進学した。

仁美も一緒だった。

恭子は陸上部に、仁美はバレーボール部に入部した。

仁美は、身長も高く、アタッカーとしてはかなり、注目をされていたので、私立の名門中学からの誘いもあったが、弱小チームでも、気楽にバレーボールをやっていく方を選んだ。

今日このところにも、何人かのスカウトがやってきたので、孝幸は正直色気もあったようだが、恭子がどうしても地元の学校に行きたいと言うので、あきらめざるを得なかった。

「また一緒だね。」

入学式の後、仁美が恭子の肩を叩いて微笑んでいた。

仁美は春休みの間に、一段と背が伸びたような気がした。

恭子はそんな仁美を見上げて、頷いた。

「そうだね。これからもよろしくね。」

いつものように二人並んで教室の窓から外の景色を眺めた。

拓は高校3年に進級して、高校での最後のシーズンを迎えようとしていた。

周囲からの期待をプレッシャーに思ったことはなかったが、このころ少しスランプ気味だった。

高校生レベルでは間違いなくトップクラスではあったが、今一つ勝ちきれないといったレースが続いていた。

「西崎、春の大会では何らかの答えを出してくれよ。それによっちゃあ、大学の方にも影響してくるぞ。」

コーチの窪田は進路指導の担当でもあったので、拓の進路についても何かと心配をしてくれた。

「まあ、東日本体育大学なら間違いなく特待生で行けると思うが、入った後のこともあるからなあ。」

そんな窪田の心配をよそに、拓は相変わらずマイペースだった。

「先生、大丈夫ですよ。一つ段落が終わりましたから。それに、ボクの目標は東日本じゃなくて、東洋電機ですから。」

「東洋電機だと？いきなり実業団に行くつもりなのか？それに、段落？何のことだ？」

「まあ、見てて下さいよ。」

―― 一中の運動会は毎年春に行われる。

秋だと、受験を控えた三年生に影響があるからだ。

例によって孝幸と高橋は、朝から場所取りのためにゴザとキャンプ用の組み立て式テーブルといすを担いで、正門の最前列にいらんでいた。

二人の姿を見て登校してくる生徒たちはクスクス笑いながら二人の脇をすり抜けていく。

見かねた副校長が、仕方なく門を開放した。

二人はダッシュで、ゴール前の特等席にいち早く陣取った。

そんな二人のそばにやってきた副校長の添野は「これはダメですよ。」と、一杯飲むしぐさをして見せた。

「まあ、そんな堅いことを言わずに副校長も一杯どうですか？」と、缶ビールを差し出す高橋。

「バカッ！」慌てて、高橋から缶ビールを取り上げて、その場をしようとする孝幸。

しかし、高橋が出した缶ビールはすっかり添野に見られたようだ。

「やっぱりね。」

添野はそう言うのと、高橋のクーラーボックスを担いだ。

「終わるまで職員室で冷やしておいてあげますよ。」

「先生、ちよつと待って！それは違うんですよ。」

高橋はガツクリとその場にうなだれた。

早紀は弁当を作りながら、プログラムを確認している。

恭子が出場する競技は全部で5種目ある。

最初の100m競争が3番目に始まる。

次が、6番目に団体競技で借り物競争。

その後は午前中の最後にリズム。1年生の女子はタップダンスショーを演じることになっている。

それから、午後の部の最初にクラブ対抗リレー。これはアトラクション的なもので、各クラブの代表が、それぞれのユニフォーム姿でバスケットボール部ならボールをドリブルしながらといった感じでやる競技だ。

そして、最後が紅白リレーだ。

三段重ねの重箱と、稲荷寿司が入ったタッパーをトートバッグに詰めると、子供たちを呼んだ。

「優子、浩人そろそろお姉ちゃんが走るから出かけるわよ。」

「えーっ、もうちよつと待ってよ」と浩人。

「待ってあげたいのはやまやまだけど、私がスタートのピストルを鳴らすわけじゃないからねえ。モタモタしてるなら先に行ってるから後から一人で来なさい。」

すると、優子がゲーム機の電源を切った。

「あっ！まだセーブしてないのに。」

「出かけるの分かっててそんなのやってる方が悪いのよ。」

優子いたしなめられ、浩人はようやくあきらめて、テレビの画面を消した。

既に母親の早紀は玄関を出るところだった。

「お母さん待つて！今、行くから。」

早紀達が到着すると、孝幸達はゴール前の特等席から手を振って合図をしていた。

まだ顔が赤くなっていなかった。

「さすがにこんな時間から飲めるわけないか。」

しかし、席に着くなり、高橋が泣きついてきた。

「早紀ちゃん、聞いてよ！副校長にビール全部持っていかれちゃったよ。何とか取り返してくれないか？」

孝幸に事情を聞いた早紀は呆れてものが言えないといった風に首を振った。

「このおやじは飲む前から酔っ払ってるのか？」

早紀は口にこそ出さなかったが、そう思ってたていた。

「そんなことより、恭子の100mが始まるぞ。」

100m競争の組み分けは、事前に測定したタイムで遅いものから順に走るようになっていた。

恭子は言うまでもなく、最終組で走ることになっている。

恭子が白組だったので、白の選手が1着になると、孝幸達はやんやの喝采を浴びせた。

そして、いよいよ最終組のスタートが近付いた。

「位置について・・・」

恭子は6コース。いちばん外側のレーンだ。

つまり、ゴールした時に、観覧席にいちばん近いレーンになる。

ピストルの音が鳴り響くと同時に恭子が抜け出したのは反対側のゴール前からも分かった。

もともと一番外のコースは、立ち位置からして最前列なので、恭子

はゴールするまで、他の選手を視界に入れることもなく悠然とゴールの白いテープを胸に受けた。

観覧席では、孝幸と高橋が廻りの保護者達をあおって万歳をしている姿を1着の旗のいちばん後で見ていた恭子は、同じ列の最前列でVサインしている仁美に気がついた。

走るのが苦手な仁美は持ちタイムが遅い方から6番目だった。

つまり、最初のレースに登場したわけだが、他の5人が実力を発揮できなかったので、1位になった。

タイム通りに順位が決まれば、競争する必要はない。

実際、タイム通りであれば、この組のメンバーの中では仁美がいちばん早いことになるが、練習の時にはいつも3番目か4番目だった。何回か練習を重ねたある日、仁美は恭子にこう言ったことがあった。

「ねえ恭子、私、幼稚園の時から、徒競走と言うものでビリ以外の成績をとったことがないの。だから、今年は、人生最大のチャンスが巡ってきたわ。」

その時の仁美の言葉にはなぜか説得力があった。

恭子の記憶によると、恭子が転校してきた4年以降、確かに、仁美がビリより良い成績だったのを見たことがなかった。

それは、身長順でのメンバー構成だったので背の高かった仁美のグループはいつも俊足揃いだった。

それが幼稚園の頃からだったとは初耳だったが：

恭子も、Vサインを返して仁美を祝福した。

なぜか、そのことが自分のことのように恭子には嬉しく感じた。

プログラム6番は1年生の借り物競走。

スタートしてから50mほど進んだところに、いろんな品物が書かれたカードが置いてある。

カードは人数分の数があり、書かれている品物はすべて違うものばかりだった。

中には定番の“校長先生”とか、“お父さん”と言ったものもあれば、その日その場にあるかどうか分からない、“モモヒキ”だとか、“かつら”などというものもあった。

実際は、演劇部の部室に行けば揃うものののだが、それは最後の手段であくまでも、会場内で探さなければならなかった。

「恭子のヤツ何を引くかなあ？ “お父さん”ならいいなあ。」

孝幸がそう言うと、高橋も「“青年部部长”とか“素敵なおじさま”なんてのはないものかねえ？」

と、ワクワクしていた。

先と子供たちは、「バカじゃないの？」と呆れていた。

レースが始まると、恭子より先に高橋の出番がやってきた。

“青少年部部长の高橋さん”と書かれたカードを持った仁美が高橋の前にやってきた。

本来なら、来賓席にいるはずの高橋のところへ仁美は真っ直ぐにやってきた。

そして、仁美と高橋は見事に1着でゴールしたのだった。

孝幸は「引いたのが恭子じゃなくて良かったよ。」と胸をなで下ろしていた。

ところが、孝幸の期待も虚しく、“お父さんと二人三脚”のカードは他の子に先に引かれてしまった。

もはや、自分の出る幕はなくなつたと諦めたところで恭子の出番がやってきた。

恭子はゆっくりと、カードが置かれている場所に走っていくと、迷わず一番手前にあるカードを引いた。

カードの文字を見た恭子は怪訝な表情で眉をしかめた。

そして、恐る恐る孝幸の方へ近づいてきて、尋ねた。

「お父さん、もしかしてビール飲んだ？」

実は、副校長にビールを取り上げられると、近所のコンビニで高橋と1本だけ買って飲んでいたのだ。

孝幸はそれを咎められると思ったのか、慌てて、灰皿代わりに使っていた空き缶を体の後に隠そうとした。

しかし、恭子が持ってきたカードを見て目の色が変わった。

そこには、“酔っぱらいおじさん（または、酔っぱらいおじさんのまねをしてくれる人）”と書かれていたのだ。

勇んで飛び出そうとした孝幸は観覧席の前の張られているロープに足を引っかけて転んでしまった。

しかし、痛いなんて言っている場合ではなかったので、そのまま恭子とゴールを目指した。

途中、副校長の視線が気になったので、酔っぱらったふりをしながらゴールした。

1着は“福田先生におんぶ”のカードを引いた子にさらわれたが、孝幸は満足だった。

福田先生とは体育教師で、柔道部の顧問もしている先生だった。

午前中の最後のプログラムは1年生女子のリズム“タップダンスショー”だった。

セーラー服の下にジャージをはいたスタイルで登場した女の子たちは華麗なステップで踊り始めた。

しかし、孝幸と高橋は気に入らなかった。

恭子が踊っていた場所が自分たちの陣取った場所からいちばん遠い位置で、しかも向こう側をむいていたからだ。

「だったら、あっちまで行ってくればいいでしょう。」

早紀にそう言われると、二人はおとなしくなった。

「まあ、今から向こうに行ったら、あんなに人がいたんじゃないか。そこには見られないな。ここからでも見えるから、まあ、いいか。それに、他の子も見えてやらないとな。」

これで午前中の競技は全て終了した。

恭子たちはタップダンスショーの衣装のまま保護者席に戻ってきた。

早紀はゴザの上にランチマットを敷き、重箱を並べた。

一段目の重箱には、唐揚げと串カツ、それに卵焼きが入っていた。卵焼きは恭子が好きな甘い卵焼きだった。

二段目の重箱にはポテトサラダに海老フライ、それにウインナーソーセージが入っていた。

三段目の重箱にはリンゴやイチゴなどの果物が入っていた。

そして、恭子の好物の稲荷寿司。

去年までは、優子と浩人も一緒だったので、二人が好きな海苔巻きだった。

稲荷寿司のお弁当は本当に久しぶりだった。

恭子は午後もしレーが控えていたのだが、そんなことはまったく気にしないで、お腹いっぱい食べた。

午後のプログラムはクラブ対抗リレーで幕を開けた。

15のクラブにPTAチーム、教員チーム、町会チームが加わり、計18チームで1チームから4人ずつ参加して、6チームずつの3レースが行われる。

第一レースは文化系の演劇部、吹奏楽部、放送部、園芸部、生徒会、PTAチームお組み合わせ。

第二レースは男女混合体育系で、陸上部、バスケットボール部、バレーボール部、卓球部、テニス部、町会チーム。

第三レースは格闘系中心の柔道部、剣道部、サッカー部、野球部、水泳部、教員チーム。

この競技に出場する選手たちはユニフォームに着替えたり準備があるため、昼食休憩が終わる前にそれぞれの部室や教室に向かっていった。

恭子も、陸上部の部室へ向かった。

それを見送ると、孝幸と高橋が立ちあがった。

「さて、それじゃあ、俺達も準備するか。」

その様子を見た早紀は、目を丸くして二人に聞いた。

「まさか、出るつもりなの？」

二人は揃ってVサインを出し、「イエーイ！」とウインクをして見せた。

「その通り、二人とも町会代表さ。」

「それで、どんな格好をして出るつもりなの？」

孝幸は現場で来ている作業着に安全ベルト、ヘルメットに編み上げの安全靴を履き“働くお父さん”をモチーフにするといい、高橋は青少年部の部長として、お祭りのときのハッピー姿で走るのだという。早紀は、「まるで、誰のための運動会かわからないわね。」と閉口していたが、優子と浩人は大喜びだった。

そして、調子に乗った二人はそれぞれ、優子と浩人を背負って走ると言い出した。

「ただ走るだけじゃあ、芸がないってもんだよなあ。」

クラブ対抗リレーは、各クラブともそれぞれの特性を生かした趣向を凝らし、その姿や演技は見ている者たちを大いに楽しませてくれた。

陸上部は、レーンの外側を上級生たちがウサギとボヤハードルをやりながら、他のチームの脚色を見ながら、進んで行き、最後に体の小さな恭子が一気に追い抜いて行くという芸当を演じて見せた。

子供たちを背負って走った孝幸と高橋も大いに場内を沸かせた。

そして、運動会も次々とプログラムをこなしていき、いよいよ佳境に入ってきた。

最後の紅白リレーを前に、紅組と白組の点差はわずかで恭子達の白組はリードされていた。

紅白リレーは男女別で、それぞれ2チーム出して競われる。

白組は白チームと青チーム、紅組は赤チームと黄色チーム。

先に女子のレースが行われ、最後に男子のレースが行われて前プログラムが終了する。

各チーム2人代表を出し6人でバトンを繋いでいくことになる。
恭子は青チームの第二走者だった。

まず、女子のレースがスタートした。

青チームの第一走者はトップで恭子にバトンを渡した。

孝幸達は、恭子が前のランナーをごぼう抜きにするシーンを思い描いていたので少しばかり拍子抜けした。

しかし、恭子はそれなりに見せ場を作った。

バトンを受け取ると、後続のランナーを見る見るうちに引き離していった。

青チームは恭子を作ったリードを守り切って、最後はきわどかったものの、見事に1位でゴールした。

帰り道、恭子は仁美と並んで歩いていた。

「残念だったね。あと少しだったのに。」

運動会の結果を恭子は仁美に話していた。

「そうそう、せっかく女子がリレーで逆転したのに、男子が3着と4着じゃ話にならないわ。」

仁美も恭子と同じ白組だったので、男子の紅白リレーの結果に怒りをあらわにしている。

「だいたい、同じ白組同士でぶつかって転ぶなんて、バカげてるわ。あれがなければ1着3着で白組の優勝だったのに。」

仁美の怒りはなかなか収まりそうにないと思いながら、ふと、目を向けた先には西崎拓がいた。

「仁美、先に帰ってて。」

そう言うとき恭子は拓のもとへ駆けだした。

「なによ、急に……」

そう言っ、恭子が走り出した方を見て仁美は納得した。

「なるほど、そういうことね。」

仁美は恭子に手を振って一言だけ言った。

「がんばってね！」

恭子は恥ずかしそうな笑顔で仁美に応えた。

日本新記録

6・日本新記録

拓は大学に行くより、実業団に入って、金を稼げるランナーになるつもりだった。

もつとも、陸上競技では、選手としてやっていけるのは他のスポーツに比べて、決して長いとはいえない。

まして、プロとして食べていけるだけの報酬を得るとなれば日本国内ではまず無理だ。

とは言え、海外に出て夢を追うつもりもない。

選手としてやっていけなくなった時のことを考えれば、ちゃんと大学を出ていたほうが就職にも有利であることは間違いない。

しかし、高校卒業とともに、大学を出なければ入れないような企業に陸上競技で入れるのなら、その分、仕事も覚えられる。

そうなれば、選手として通用しなくなっても、仕事で会社に残ることも出来るだろう。

拓は、入念にストレッチをこなすと、トラックをゆっくりと走り出した。

高校3年の今シーズンは最後のチャンスになる。

窪田コーチに言われるまでもない。

日本記録にいちばん近い男と騒がれてから、スランプが続いたが、その時期にも拓には確かな手ごたえがあった。

「コーチ、一本取ってもらえますか？」

拓は、そう言つて、100mコースのスターとラインの方へ歩き始めた。

コーチの窪田は、突然の拓の行動に、一瞬、何事なのかと思ったが、拓の表情が今までとは違っているのに気がつくと、ゴールの位置に向かった。

ピストルは持っていなかったたので、ホイッスルを加えて拓に合図した。

拓がスタート位置につくと、「よい」の掛け声の変わりに左手を上げた。

「ピーッ」窪田は思いっきりホイッスルを鳴らすと同時に右手でストップウォッチのボタンを押した。

スタートしてからの一完歩が拓は強い。

そして、一気に加速していく。

今日は、足がいつもより高く上がっている。

本来なら、80mくらいが拓のベスト距離なのだ。

今まで記録が伸び悩んでいたのは、残りの20mで失速してしまうからだった。

80mが近づいてきた。

すると、拓は体を前に沈めて更に加速した。

実際は、前に沈んだのではないが、窪田にはそう見えた。

目の前を一陣の風が吹き抜けた。

窪田はストップウォッチのボタンを勢いよく押した。

そこには日本記録と同じタイムが記されていた。

窪田が拓のほうを見ると、拓は背中を向けたまま、高らかに手を掲げてVサインをして見せた。

「こいつ、やりやがった。」

恭子は陸上部に入って短距離を学んだ。

小学校で区の記録を塗り替えたとはいえ、中学にあがると、明らかにレベルが違った。

さすがに、1年から選手に選ばれるほど甘くはなかった。

しかし、いつも謙虚な恭子は他の新入部員達と一緒に先輩達の雑用

をこなしながら練習に励んだ。

一中の陸上部顧問は、この春から一中に移ってきた第五小の野村が勤めていた。

「三浦、ちよつと来い。」

野村は恭子と呼ぶと、走り幅跳びをやってみないかと聞いた。

「幅跳びですか？体育の授業でしかやったことないですけど。」

「三年の原田が転校することになって、幅の選手がいなくなったのは知ってるな？」

「はい。」

「ちよつと跳んでみる。海外では短距離の選手は幅跳びでも一流なのは知っているな。」

「分かりました。やってみます。」

「よし、じゃあ、とりあえず、自分の跳びたいように跳んでみる。」

恭子は、踏み切りの位置から歩幅を確認しながらスタートの位置についた。

その様子を見ていた野村は、「たいした本能だ。」そう思った。

恭子はスタートすると、一気にトップスピードにギアチェンジして左足で踏み切った。

とりあえず、踏み切りの位置は気にせずに思いっきり跳んだ。

みようみまねで、空中を歩くように跳んでみた。

けっこう跳べたような気がしたが、野村は渋い顔をしていた。

「やっぱりダメでしたよね。」

「ああ、てんでなつてないな。しかし、跳び方さえ覚えたら原田くらいは跳べるようになるかも知れないぞ。」

「あの、先生。私、幅跳びに転向するんですか？」

恭子は不安そうに野村に尋ねた。

「バカ言つな！基本は100だ。100の練習は続ける。続けながら幅をやる。幅をやるのは試合に出るためだ。幅なら1年から試合に出られるからな。試合に出て思いっきり走ることが大事なんだ。」

「分かりました。先生。」

拓は新学期早々に国体の予選に参加し、見事に本選出場を果たしたのを皮切りに、6月には高校総体の地区予選に出場した。

さすがに、この辺りでは拓の相手になるランナーはいないかと思われたが、唯一のライバルであり親友でもある聖都大付属高校の村上悠馬との今シーズン初顔合わせとなった決勝のレースでは、ゴール前でかなり追いつめられたがかるうじて逃げ切った。

そして、8月。高校総体の本番。

下馬評では非公式ながら、日本記録と同タイムを叩き出した拓が断然の優勝候補で地区予選で拓に迫った聖都大付属の村上、今シーズン九州地区の高校記録を塗り替えた熊本・九州学園の末吉星也の三つ巴になるとマスコミは報じていた。

3人とも危なげなく準決勝に進出した。

そこで拓は九州学園の末吉と同じレースを走った。

末吉は10秒50の好記録を出したが、拓は高校記録を塗り替える10秒38で1位のタイムを出した。

そして、二人共決勝に進んだ。

もう一方では、村上が10秒55で1位となり、拓、末吉と決勝で顔を合わせる事になった。

決勝のレースを前にして、拓はコーチの窪田に入念なマッサージを受けていた。

「手ごわいのはどっちだと思う？」

もちろん、村上と末吉のことを聞いているのだろうと拓は思ったが、こう答えた。

「一番手ごわいのは大阪南の成田だなあ。」

窪田は、予想外の答えに一瞬顔色を変えたが、すぐに根拠を聞いた。「あいつ、準決で村上の2着だったけど、余力を残した走りだった。10・55なら村上も調子が悪い方じゃなかったはずだけど、あいつはゴールする時、笑ってやがった。」

「笑ってた？走りながら？」

窪田は、冗談だろ？とでも言うように首を振って見せたが、拓は真顔で話を続けた。

「一緒に走った村上が一番分かっていると思うけど、とんでもないヤツが隠れていたもんだ。」

「成田ねえ……」

窪田は、まだ半信半疑という風な顔をしていたが、レースの時間が近付いてきたので、拓と一緒にグラウンドへ出た。

既に、村上も末吉もアップを始めていた。

窪田は廻りを見まわしたが、成田はまだ出てきていないようだった。「コーチ、あっちを見てみなよ。」

拓に言われてトラックの向こう側に目を向けた。

すると、成田は同じ学校の女子選手と談笑していた。

「なんだ、あいつ？決勝の前だつていうのに、アップもしないで女の子とイチヤついてやがんのか？」

「それだけ余裕あるんだらうよ。」

最初の試合は中体連の地区大会だった。

恭子は、付け焼刃で覚えたフォームで走り幅跳びに出場した。

スピードに乗った助走から、思いつきり跳ぶ。

恭子は、100mの練習のつもりで、思いつきり走った。

助走路は100mより短いので、早い段階でトップスピードに持っていくことが要求される。

スピードにのったジャンプは、技術的な未熟さを補うには十分な効果があった。

もともと参加者も少なかったので、恭子はなんとか決勝に残ることができた。

「先生、なんだか気持ちいいです。」

野村は恭子の表情を見て、大きな可能性を秘めた子だと痛感した。ついこの間までは、小学校に通っていた子だ。

中学校に入って、初めての試合で上級生たちに混じって、しかも、

今までやったことがない走り幅跳びに出場しているというのに、試合を心から楽しんでいる様子だ。

キラキラと目を輝かせながら、そう言う恭子の屈託のない笑顔を見て、「この子は、きつと走るために生れてきたに違いない。」野村はそう思った。

さすがに、決勝では、走り幅跳びを専門にやっている上級生たちには太刀打ちできず、8人中8位に終わったが、どの跳躍も、踏切の30cm前から飛んでいた。

野村の指示で、「下手に足を合わせようとするな。かといって、せっかく試合に出てるんだ。ファールで記録なしじゃあしょうがないだから、踏切が見えたら最初の左足で思いっきり跳べ。たとえ1m手前になってもかまわん。」ということにしていたからだ。

踏切がぴったり合っていれば、あと30cm記録が伸びていた。

これは3位に該当する記録だった。

しかし、野村も恭子もそんなことはみじんも気にしなかった。

とにかく、2年後、トップで100mのゴールを駆け抜けることしか頭になかった。

拓の予想通り、決勝は拓と成田の一騎打ちになった。

スタートは拓が断然強かった。

しかし、成田は徐々にスピードに乗って拓を追いつめてくる。

今までの拓なら、ゴール前で失速するところだが、今の拓は違う。

ゴール10m前でさらに加速をくわえて成田を突き放した。

窪田はすぐに電光掲示板に目を移した。

10秒の位から順番に数字が浮かび上がってきた。

1・0・0・2……10秒02!

窪田は飛び上がったがッポーズをした。

拓は、当然といったように窪田の方を向いてニカッと笑ってVサインをして見せた。

もはや、高校生レベルでは拓の敵はいなかった。

2着に入った成田も10秒30の好記録を出した。
末吉が10秒40で3着、村上は10秒42で僅差の4着に終わった。

高校総体という器の中では、まれに見る好レースだった。

拓は高校総体優勝の勢いで10月の国体に参加した。

拓は高校生ながら、青年の部に出場することになっていた。

少年の部では大阪の成田が10秒32で優勝した。

青年の部に出場する拓の最大のライバルは千葉の実業団東洋電機の篠塚健太郎だ。

現在の日本記録保持者でもある。

公式戦で二人が対戦するのは、もちろん初めてのことだ。

マスコミは二人の対決と、日本新記録が出るかどうかをこぞって書きたてた。

周囲の期待通り、100mはまさに二人のマツチレースになった。
準決勝第1レースに登場した篠塚は10秒03を出して余裕の決勝進出。

拓も、第3レースで10秒05で一位通過。

二人とも絶好調で臨む決勝は、日本中の注目を集めた。

オリンピックや世界陸上以外で陸上競技がこれだけ注目されたことは初めてだった。

準決勝で1位のタイムだった篠塚が4コース、拓が5コースからのスタートだった。

決勝に出場した8人のランナーが一斉にスタートラインについた。

スターターがピストルを高く掲げた。

拓は集中した。

“パーン”ピストルの音が鳴り響くと同時に拓は思いっきり地面を蹴った。

スタートの一完歩の強さでは、日本記録保持者をもしのぐ拓のダッシュ力に篠塚も付いて行くのがやっとといった感じだったが、さす

がに日本記録保持者だけのことはある。

徐々にスピードに乗ると、あっという間に拓に並んだ。

そのまま並走を続けたが、拓が最後の力を振り絞って地面を蹴るとさらに加速が加わり、拓の視界からはゴールのテープしか見えなくなった。

秋の新人戦で、1年生ながら100mに出場した恭子はその豊かな才能を見せつけて決勝まで進んだ。

1年生で決勝まで進んだのは恭子だけだった。

そして、見事に6位入賞を果たした。

そして、走り幅跳びでは3位になった。

春に比べて、踏切の位置が合うようになってきたのだ。

予想外の成績に恭子はまるで他人事のような口調で野村に言った。

「先生、意外と、走り幅跳びもいけるかもしれないですね。」

「そうだな。しかし、お前が欲しいのは100のメダルだろう？しかも、とびつきり眩しいヤツだろう？」

「はい！」

何の迷いもなく、そう答える恭子に野村は改めて期待を高めた。

今年の冬はいつもより暖かい気がした。

大学に進学をしない拓は、他の受験生達と比べて、ずいぶん余裕がある日々を過ごしていた。

高校の部活は引退して、後輩たちの指導をしながらトレーニングを続けていた。

社会人の目ばしい大会などがあれば出かけていってレース感覚を磨いた。

この頃には東洋電機への就職が内定していたので、学校が終わると、千葉の東洋電機陸上競技場まで通って練習に参加した。

もと、日本記録保持者の篠塚健太郎と一緒にトレーニングをすることは、拓にとって願ってもないことだった。

窪田から、拓の希望を聞かされていた東洋電機の池田直次郎監督は、国体の生年の部で決勝に残ったら受け入れる旨を打診していた。窪田は、そのことをあえて拓には伝えていなかった。それがプレッシャーになったらいけないと思ったからだ。しかし、それが杞憂に終わったことを決勝のレースが終わった瞬間思い知らされた。

拓は、廻りの緊張をよそにリラックスしていた。

スタンドには、恭子と野村が応援に来ていた。

野村を通じて拓が招待したのだ。

レースを間近に控えた拓は、スタンドで見守る恭子に右手を高くあげて人差し指を一本立てて微笑んだ。

恭子は頷いて、拓と同じポーズをして返した。

新人戦が終わった後、野村のところに拓から手紙と国体が開催される岡山までの新幹線の特等車が二組入っていた。

『野村先生、是非、三浦さんを連れてきてください。きっと、めったに見られないものを見ることができますよ。』
ということだった。

野村が恭子に話をする、恭子は二つ返事で了解した。

恭子が野村と出かけるにあたっては、例によって孝幸がひと騒ぎしたが、仕事の都合がつかず、同行することをあきらめざるを得なくて悔しがった。

恭子は、野村と一緒にスタンドの材前列に降りてきた。
いよいよ、決勝のレースがスタートする。

祈るように手を組んでコースの城東第一高校の白いユニフォームを着た西崎拓しか見ていなかった。

レースがスタートすると、拓が一步飛び出した。

「やった！」思わず口走り、握りしめた手に力が入る。

しかし、隣の赤いユニフォームに身を包んだ篠塚健太郎がすぐに追いついて来る。

「神様！」恭子は祈るように目を開けて拓を見続けた。心臓がドキドキと音を立てて唸りを上げているようだった。

拓が追いつかれるのが怖くて目を閉じてしまおうと何度も思った。

しかし、信じ続けて最後まで目を閉じなかった。

拓がゴールした瞬間、野村と向き合って万歳をした。

そして、抱きついて喜びを表現した。

それから、すぐに電光掲示板に目を移した。

記録はなかなか表示されなかった。

そして、10秒の位の位置に“0”の文字が表示された。

会場は歓喜の渦に包まれた。

日本新記録が誕生した瞬間だった。

そして、準に“9”の文字が3つ並んだ。

9秒99！

日本人が初めて10秒の壁を超えたのだ。

「あの野郎！やりあがった。」

野村は何度もガッツポーズをしながら涙を流していた。

恭子も感動で胸が震えた。

感極まった野村は、スタンドのフェンスを乗り越えてグラウンドに降り立った。

そのまま一直線に拓のもとへ走りだしたがすぐに係員たちに制止され連れていかれた。

スタンド前の戻ってきた拓は、恭子と握手を交わすと、右手の親指を立ててウインクして見せた。

恭子はなぜか顔が赤くなっていくのを感じて、どこかに隠れてしまいたい気持ちになった。

「今度は君の番だね。とりあえず、日本一の中学生になってみようか？」

その言葉を聞いた恭子は、すぐに気持ちが切り替わった。
「はい！」

力強くそう返事をした恭子の表情はキラキラ輝いていた。
拓は心の中で「なるほど」とつぶやいた。
確かに、こんな表情を見せられたらまいっちまうな！
そして、そんな話をしていた悠斗の顔が浮かんできた。

恭子に勝利の報告をしたのもつかの間、拓の周りにはすぐに報道陣の垣根ができた。

いくつものフラッシュが光り、まるで光の雲の中にいるようだった。
しばらくすると、野村がスタンドに戻ってきた。

「先生、何やってるんですか？これじゃあ、お父さんと来た方が良かったかなあ。恥ずかしいと思ったらありやしない。」

野村は両手を合わせて頭を下げた。

「いやゝあ、面目ない。本当にお前の言う通りだなあ。これじゃあ、どっちが引率者だか分からないなあ。」

そう言って、野村は大笑いした。

恭子も、クスクスと笑った。

ジュニアスターズ

7・ジュニアスターズ

東洋電機の池田監督は、日本新記録のおまけまでつけて国体を制した拓を自宅の離れに住まわせて迎え入れてくれた。

幸い、拓は高校での学業のほうも成績優秀だったので、総務部の人事課に配属され、業務に支障がない限り、陸上競技の練習に専念できる環境を得ることが出来た。

これで、目標の第一段階をクリアした拓は、社会人として、そして男としての器を磨くべく日々の鍛錬に励んだ。

恭子は中学2年になり、念願の1000mの代表になることが出来た。

春の中体連では1000mで3位に入り、走り幅跳びでは2位に入った。

リレーでは見事に優勝し、恭子はリレーを含めて3種目総てで都大会への出場権を得た。

リレーは都大会でも決勝に進んだが、8位に終わった。

走り幅跳びでは、大健闘で決勝まで進んで5位入賞を果たした。

最も期待していた1000mでは準決勝で敗退し、決勝へ進むことが出来なかった。

野村は、「来年がある。」と恭子を励ましたが、恭子は悔しくて、その夜は家に帰るなり部屋に閉じこもって夕食も取らずに泣きまわった。

そして、その後は気持ちを切り替え、いつもの恭子に戻っていた。孝之は、部屋で泣きじゃくっている恭子を心配していたが、部屋から出てきた恭子の様子を見てわが目を疑った。

「おい、恭子？大丈夫か？」

「大丈夫！来年は絶対優勝する。そして全国大会に行くわ。約束よ。そして、拓さんと同じ城東第一に入るわ。」

今までとはまるで別人のようにりんとした表情で言い放つ恭子はもはや前しか見ていないようだった。

実業団では、高校のときと違って、大会の数が格段に多かった。

東洋電機陸上部としては、種目別、選手のレベル別にあらゆる大会にそれぞれの選手を派遣していた。

ルーキーとはいえ、拓の实力は折り紙つきだったため、池田監督は篠塚健太郎と同等の扱いで競わせた。

レースになればライバルの二人ではあったが、普段は先輩・後輩の立場をわきまえ、拓はひたすら、シューズ磨きや部室の掃除など裏方の仕事にも進んで取り組んだ。

そういう高飛車ではない拓の姿勢は他の部員達からも好意をもたれ、名実ともに東洋電機陸上部の顔としての知名度を徐々に上げていった。

一方、高校選手権で、サッカー選手としての再起の夢を立たれた悠斗は、体育教師としての資格を取得すべく、地元からそう遠くない場所にある国立の体育大学へ進学した。

選手としての実績は残せなかったが、早くに再起を諦めることになったのが幸いして、自力で合格できるだけの学力を養うのにはちょうどよかった。

悠斗がこの道を選んだのには理由があった。

それは、恭子だった。

無論、恭子と拓には運命とも言えるつながりがあって他の誰もそれを断ち切ることなど出来ないことは十分に分かっていた。

それでも、悠斗は恭子に恋をしていた。

当時小学校6年生だった恭子に、高校2年の悠斗は恋をしてしまっ

ただ。

それは、あの連合陸上大会の慰労会の時だ。

普通に考えたら、その段階での5歳差はありえない年齢差だが、そのとき雄図が見た恭子は不思議なくらい大人っぽくて綺麗だった。いつか拓が一人前の男になって恭子を迎えに来る日が必ず来るに違いない。

ならば、せめて、それまでの間、自分が恭子のそばで彼女を見守っていてやりたい。そう思ったのだ。

大学に進んだ悠斗は、特に陸上競技の指導者としての基礎知識からみっちりと学んでいた。

体育教師になったからといって、恭子が進学する学校へ赴任できるかどうかは分からない。

しかし、今の悠斗には、そうするしか他に考えられる事がなかった。その一方で、相変わらず、地元の小学校で、サッカーのクラブチームのコーチは続けていた。

そして、そのことが恭子との接点を大きくするきっかけともなった。小学校4年生になった恭子の弟、浩人がチームに入ってきたのだ。悠斗は、三浦浩人という名前を見る前に、恭子によく似た顔立ちの新入部員が恭子の弟だと確信していた。

新入部員は浩人のほかに4人、浩人も含め5人いた。

いずれも、ちゃんとしたチームに入ってサッカーをやるのは初めてだということだった。

考えてみれば、悠斗自身も小学校4年になって、このチームに入ったのがサッカーとの出会いだった。

それが、高校1年で選手権に出場するまでになって、怪我さえなければ、Jリーガーになって、日本代表にだってなれたかも知れないのだ。

そう考えれば、この5人の新入部員は日本サッカー会の黄金の卵なのだ。

悠斗は、ふとそんなことを思った。

新入部員の初日のメニューとしては、基礎体力と適正を見るために体力測定を行うことになっている。

浩人が恭子の弟だとはいえ、悠斗はあえて特別な目で見るつもりはなかった。

しかし、何といっても優秀なスプリンターと同じ血が通っている浩人は自然と悠斗の目を引き付けた。

50m走を行ったときだ。

5人の新入部員の中では、最先着を果たした。

タイム自体はそれほど優秀というわけではなかったのだが、スタート直後の反応が抜群で、瞬発力がけた違いのように思えた。

そう、まるで拓の走りを見ているようだ。

驚かされたのはそれだけではなかった。

スタミナがすごい。

グランド10週の持久力走では、浩人以外の4人は全て1週以上周回遅れにさせられるありさまだった。

「こいつは驚いたなあ。けっこうな掘り出し物かもしれないなあ。」

監督の寺西が浩人を見ながらつぶやいた。

野村が一中に赴任したため、この寺西が後を引き継いだ。

寺西は第五小の教員だが、悠斗と同じく、高校時代に冬の選手権に出場したほどの実力者だった。

「なんと言っても生粋のサラブレッドですからねえ。」

満足げな顔をして悠斗が答えた。

「何だ、悠斗、知っているのか？」

「ええ、母親は高校生のとき100mでインターハイに出たことがあるそうです。そして、中学生のお姉さんは2年で都大会に出場しています。100と幅とリレーに出て、100は惜しくも準決止まりでしたが、幅は5位入賞したそうです。来年は、100と幅では間違いなく優勝争いするといわれていますよ。」

「ほーう、カエルの子はカエルってヤツか。よしっ！ボールに慣れ

たらボランチで使ってみるか。」

「そうですね。本当は手薄なディフェンスに持っていきたいところですが、体が小さいのがちょっと気になりますね。」

「まあ、まだ4年だ。これからデカくなるさ。」

「そうですね。」

広めのリビングルームはバルコニー側を本来のリビングとして使っている。

ソファや洒落たサイドボードが置かれていて、大型テレビが目をつく。

母親の早紀は、恭子をはじめ、子供達の運動会やイベントがあるたびに、ビデオカメラを担いで撮影をしていた。

このテレビは、それを見るために孝之が奮発して購入した。

キッチンよりのスペースはダイニングとして使われていて、対面キッチンのカウンターと一体になっているテーブル席で恭子は雑誌を読んでいた。

去年の国体の記事が載っている陸上競技の専門雑誌だ。

そう、拓が日本新記録を出した時のものだ。

何度も何度も読み返しているうちに、書かれている記事を恭子は一語一句全て暗記してしまった。

向かい側の席では父親の孝之が新聞を広げて読んでいる。

キッチンでは母親の早紀が昼食の支度をしている。

「ねえ、恭子ちゃん、浩人を迎えに行ってくれないかしら？それとも恭子ちゃんやってくれる？」

早紀はタマネギをきざみながら、涙目で恭子に言った。

「そうか、今日からジュニアスターズに入ったのか。」

浩人が入ったチームのチーム名がジュニアスターズというのだ。

「どうせなら、城東タイガースに入ればよかったのに。」

城東タイガースとはこの地区では強豪の野球チームのことだ。

孝之は、熱狂的な阪神ファンで、同じタイガースと名のついた城

東タイガースに浩人を入れたかったのだ。

「仕方ないよ。今はサッカーのほうが人気あるもの。」

恭子は父親の孝之にそう言うと、雑誌を閉じてマガジンラックにしまった。

「久しぶりに小山先輩の顔も見たいから行ってくるね。」

そう言つて、恭子は阪神タイガースの野球帽をかぶった。

実は孝之の影響で、恭子もかなり熱狂的な阪神ファンになってしまっていたのだ。

“ピーッ” 朝礼台の上から寺西がホイッスルを鳴らすと悠斗は子供達に集まるように指示をした。

「集まれー！」

子供達が朝礼台の前に集まると、寺西は練習の終了を告げた。

「来月の大会には6年生中心のメンバーでいくが、調子のいいものがいたら5年も4年も試合に出すからそのつもりで練習しろよ。6年も、しっかりやらないと、メンバーからはずすからそのつもりでいろよ。」

「はい！監督。」

子供達は声をそろえた返事をした。

レギュラーには入れるかどうか微妙な位置にいる6年線の顔からは緊張の表情が覗いている。

逆に、5年生と春からやっている4年生たちは目を輝かせている。今日、入ったばかりの4年生たちには、現実とは程遠いというような話に聞こえたようだ。

「よし！じゃあ、今日はこれで解散。」

悠斗が言つと、子供達は声を揃えて、「ありがとうございました。」
と言いつつそれぞれに散つていった。

悠斗が水道で顔を洗っていると、後ろから聞きなれた声がした。

「小山先輩、浩人、どうですか？」

タオルで顔をふきながら振り返ると、恭子がいた。

「よう！久しぶりだなあ。弟を迎えに着たのか？」

「はい。」

浩人は日影になった玄関の庇の下でシューズを履き替えていた。

恭子に気がつくと、手を振って合図をした。

恭子も手を振って返した。

「カエルの子はカエルってヤツだなあ。」

「えっ？カエル？」

「ああ！あいつ、たいした瞬発力してるよ。それに持久力が群を抜いている。6年と走ってもいい勝負になるんじゃないか？」

恭子は、悠斗の評価が高いのに意外だというような顔をしたが、すぐに、納得したような表情になった。

「そりゃあそうですよ。だって、小さいときから、私達と一緒に走り回っていたんですもの。浩人はチビで走るのが遅いから、いつも必死に着いてきていたわ。考えてみればそうよね。私達からすれば遅くても、同じ4年生となら誰にも負けなくらい走ってるんだから、当たり前といえば当たり前よね。だけど、それだけじゃあ、サッカー選手にはなれないんじゃないですか？」

恭子の話を聞いて、悠斗はなるほどと思った。

「何言ってるんだ？今日入ったばかりでそんな決め付けられるかよ。だけど、あいつは、きつと、すごい選手になるような気がする。」

「まあ、先輩がお世辞を言うなんて、こういう風の吹き回しかしら？」

「いや、あなたがちお世辞でもないんだぞ。」

声のした後ろを振り向くと、そこには監督の寺西がいた。

「あっ！」

とつさに声を出した恭子は思わず手で口を塞いだ。

「なるほど、この子がサラブレツとお姉さんか？さすがに、いい体してるなあ。」

寺西の言葉に、恭子と悠斗は一瞬たじろいだ。

寺西は、二人の表情を見てすぐに弁解した。

「バ、バカ！勘違いするな。スプリンター向きのいい体だといったんだ。」

すると、二人は顔を見合わせて笑った。

「監督さんったら、冗談ですよ。」

そんな話をしているうちに、浩人が恭子のそばにやってきたので、

恭子は二人に挨拶をして浩人と一緒に帰っていった。

恭子は、途中で振り向いて、手を振りながら悠斗に向かってこう叫んだ。

「先輩、来月、新人戦なんで時間があつたら見に来てください。絶対優勝しますから。」

悠斗は分かったと合図して恭子たちを見送った。

「ちえっ！どうしてあのじいさんは、俺じゃなくて拓のところに現れたんだ？」

「じいさんって誰だ？」

「い、いえ、なんでもないです。」

悠斗は慌てて、その場を取り繕うように、濡れたタオルで顔を覆った。

「じゃあ、また頼むな。」

寺西はそう言つて悠斗の肩をポンと叩いて自転車にまたがった。

「はい、分かりました。」

紺に白いラインが三本、胸には漢字で“一中”と書かれている。

シンプルだが、インパクトのあるユニフォームだ。

「まだデザイン変えてないんだなあ。なんか懐かしいや。」

拓は久しぶりに母校のユニフォームを見て自分が中学生だった頃のことを思いだしていた。

「やつぱり、あの紺色は強く見えるよなあ。」

紺色は一中のスクールカラーなのだ。

区営総合運動場のスタンドの中段ほどで手摺にもたれかかった、小山悠斗と西崎拓は中体連秋の新人戦陸上競技大会の会場に来ていた。

拓は、一応、有名人なのでスポーツキャップにサングラス姿だ。もちろん恭子の走りを見にきたのだ。

「彼女の調子はどうなんだい？」

「絶対に優勝すると言ってたぞ。」

「野村先生も相当入れ込んでいるようだな。」

「なんでだ？」

「走り幅跳びやらせてるんだろう？」

「ああ、なんでも、試合に出ることがいい経験として生きてくるからだそうだ。まあ、確かにその通りだよな。」

「俺の時は、ああいう指導はしてくれなかったからなあ。先生も色々勉強してるんだろなあ。」

「おい、出てきたぜ。」

恭子たちがグラランドに出てきた。

恭子はグラランドに出るとすぐに、悠斗が来ている事に気が付いた。しかし、悠斗の隣にいる拓を見て驚いた。

「拓さん？」

恭子が手を振ると、拓は一瞬だけサングラスをはずして笑って見せた。

「先生、大変！拓さんが来てるよ。」

「なんだって？」

野村はスタンドを見渡して悠斗と拓の姿を確認すると、恭子に微笑んだ。

「今日は無様な走りは見せられないぞ。新記録を出したあいつの前ではなあ。」

「もちろんですよ！」

午前中は100mの予選と二次予選、走り幅跳びの予選が行われた。

恭子は、100mでは2戦とも軽く流して組のトップで通過した。

走り幅跳びでは、1回目の跳躍で早々と自己記録を更新して、そのまま決勝進出を決めた。

昼休みに入ると、悠斗と拓が一中の選手団に励ましの言葉を言うために控え室へやってきた。

恭子以外の生徒達は拓を目の当たりにするのは初めてだった。

「キヤー！西崎拓よ！」

たちまち、控え室は大騒ぎになった。

「今日はたまたま会社が休みになったのでみんなの応援にやってきました。ボクも、4年前まではこのユニフォームを着て走っていたので、みんなにも頑張ってもらいたいと思ってこれを差し入れします。」

そう言つて、紙袋を野村に差し出した。

中には東洋電機陸上部のスポーツタオルが入っていた。

生徒達は、早速、スポーツタオルを取り出すと、次々に拓にサインをねだった。

拓は、一人一人に丁寧にサインをした。

学校の先輩で、同じ地元に自宅があっても、宅の場合、高校に入ってから殆ど、寮に入っていたので、めったに地元で顔を合わせる機会はなかったのだ。まさに、スターといった間隔でしかない。

逆に、悠斗はずっと、自宅から通っているし、休日ときはジュニアスターズのコーチをしているので、弟がチームに入っていたりすると、接する機械が多い分、一中生たちには人気もある。

「小山先輩、西崎選手とは仲がいいんですか？」

生徒の一人が質問した。

「幼稚園の頃からの親友さ。羨ましいだろう？」

悠斗が走答えると、いつせいに「いいなあ。」という声が聞こえてきた。

「恭子、約束忘れんなよ。」

悠斗が言つと、恭子はVサインを出して見せた。

「三浦、頑張れよ！」

拓が右手の親指を立て、恭子のほうに突き出してウィンクすると、恭子も同じように親指を立てた右手を拓の方に突き出した。

「じゃあ、スタンドで見てるから。」

そう言つて、悠斗と拓は控え室を後にした。

二人が去つた後の控え室では、恭子が他の、特に女子生徒たちに「どういうこと?」、「知り合いなの?」等の質問攻めにあつたのは言うまでもない。

午後の早い時間に、リレーの予選があり、一中は準決勝に進出した。

引き続き、100mの準決勝。

恭子はここもトップで決勝進出を果たした。

その後は走り幅跳びの決勝。

本職でないとはいえ、恭子は二度、自己記録を更新して、優勝した。

「いい走りだ。」

拓は、走り幅跳びの時の恭子の助走を見てそうつぶやいた。

「彼女はトップスピードに持っていくまでのダッシュ力が半端じゃないんだ。」

「お前の走りと似ているなあ。」

「ああ、これは偶然じゃない気がする。」

悠斗は宅の顔を見た。

「例のあれか?」

「たぶんな。」

「じゃあ、彼女も日本新記録を出せそうか?」

「いや、それは叶わないだろうな……」

拓は、どこか遠くを見るような目でグラウンドを眺めていた。

このことを知っているのは拓だけだ。

このことだけは、悠斗にも話していない。

そのときが来たら、彼女を支えてあげられるのはボクしかない。

そのときまで、あと2年……

立ち止まるな・・・そして、風になれ

8・立ち止まるな…そして、風になれ

リレーの準決勝第1レース。

8チーム中3チームが順位で決勝に進出することが出来る。

4位以下のチームはタイムで2チームが決勝にいくことが出来る。

したがって、5位でも、タイム次第では決勝に行くチャンスが残されることになる。

恭子の中は第二コース。

もちろん恭子がアンカーだ。

予選のタイムでは準決勝に進んだ16チーム中9位だった。

この第1レースの8校の中では4位。

微妙な位置にいることはチームの全員が自覚していた。

「いいか、予選のような走りでは決勝に行くことは難しい。分かっていると思うが、予選で流してきた学校も、ここでは力を出してくるぞ。第2レースに強豪が揃っているから3位には入れなかったら、タイムで残ることはないと思え。」

野村は、恭子たちに檄を飛ばした。

リレーのメンバーは円陣を組んで気合を入れた。

「由美、スタート大事だからね。」

キャプテンで第二走者の大橋歩美が言った。

橋本由美は頷いた。

そして、歩美は続けた。

「そしたら、私も頑張るから、陽子も何とか恭子にバトンを渡すまでふんばって。」

「頑張るわ。」

秋本陽子も気合充分だ。

「最後はいつも頼ってばかりで申し訳ないけど、やっぱりあなたが頼りなの。お願い！私達を決勝に連れて行って！」

キャプテンの大橋歩美と他のメンバーが一斉に恭子を見た。

「任せなさい！」

恭子は一言言い放った。

そして、キャプテンの号令で最後の気合を入れた。

「イッチュウー ファイツ！」

「オー！」

野村は腕時計を見てキャプテンの肩を叩いた。

「時間だ。一中のど根性を見せてみる！」

メンバーは声を揃えて「ハイ！」と応えると、それぞれのスタート地点へ散っていった。

円陣を組んだ一中のメンバーを見ていた拓と悠斗は、決勝へ進むのが微妙な状況であることは把握していた。

「ずいぶん気合が入っているなあ。」

悠斗が言う。

「ああ、ギリギリの線だからなあ。この第1レースで3位までには入れなかったら2レースの顔ぶれからしても、タイムで拾われるのは難しいだろうからな。」

拓は、相変わらずどこか遠くを見ているような視線で答える。

「なあ、拓。どうかしたのか？さっきから、なんか、上の空みたいだけど、気になることでもあるのか？」

長年一緒にいる悠斗には、拓の微妙な心の変化も手にとるように分かった。

「別に。なんでもないさ。」

そう言って拓は意識をトラックに集中させた。

「そうか？だったらいいけど……」

悠斗は、このとき、拓が恭子とのことで何か隠しているに違いない

と確信した。

スターターがピストルを持った手を空に向かってかざすと、第一走者たちは意識を集中させ、その時を待った。パーン！

その瞬間、8人のランナーは一斉に地面を押しのけるように飛び出した。

一中の第一走、者橋本由美は持ち前の瞬発力でトップに立った。

しかし、第二走者の大橋歩美にバトンを渡すときに少しもたついて2位に転落した。

歩美はそれで動揺したのか、実力を出し切れないまま、二人に抜き去られ、一中は4位に後退した。

それでも最後は意地を見せて、第三走者にバトンを渡す間際には3位とほぼ同着くらいまで盛り返した。

「お願い！」

歩美からバトンを受け取った秋本陽子は、しっかりと頷いてバトンを握りしめた。

陽子は必死に食らいついていこうと頑張ったが、恭子にバトンを渡すときには少しはなされた4位だった。

恭子はバトンを受け取ると、すぐにトップスピードに入って、前を行く3位のランナーを追いつめ、ほとんど同時にゴールしたが、完全に追い抜くことは出来なかった。

そして、どっちが3位に入っただのかは写真判定になった。

写真判定の結果、一中は惜しくも4位となった。

恭子たちはがっくりと肩を落とした。

中でも、バトンの受け渡しで失敗したキャプテンの大橋歩美は膝について泣き崩れてた。

「まだ、落ちたと決まった訳じゃないわ。」

由美が歩美の肩を抱いて励ました。

「そつよ。第2レースの結果を見ましよう。」

恭子もそう言って歩美を抱き上げた。

スタンドで見ていた、拓と悠斗は電光掲示板の順位とタイムを見比べていた。

「4位か……こりゃあ、まずいな。」

悠斗が呟く。

「ああ、でもタイムを見てみるよ。第2レースの結果では充分可能性を期待できるタイムだ。」

「なるほど。よく頑張ったな。これなら期待できるぞ。あいつら、そのことにまだ気が付いていないらしいな。」

「そのようだな。」

グラウンドでうなだれている一中のメンバーを見て、拓と悠斗はそう思った。

悠斗は大声で一中のメンバーに呼びかけた。

そして、掲示板の方を指して、両手で大きな　を作った。

それに気が付いた恭子が、同じように両手で　をつくって返したので、恭子がまだ諦めていないと二人は理解した。

拓が予想して通り、第2レースでは上位3チームが圧倒的な強さを見せたものの、4、5位のチームは大きく離されてゴールした。その結果、一中は7番目のタイムでギリギリ決勝進出を果たしたのだった。

第2レース5位のチームのタイムが電光掲示板に浮かび上がったとき、恭子たちは飛び上がって喜んだ。

キャプテンの歩美はこの幸運を神様に感謝した。

そんな恭子たちを野村は戒めた。

「おい、嬉しいのは分かるが、喜ぶのはまだ早いぞ。決勝では少しでも上の順位を目指して貰わないと、あいつらにも失礼だぞ。」

そう言って、野村が示した方には、僅差で敗れた第2レース5位だ

ったチームのメンバーが肩を落として泣き崩れていた。
ついさつきまでは自分たちがそこにいた。
そのことを考えると、恭子たちも浮かれているわけには行かない
と思った。

100mの決勝に残ったのは8人。

準決勝で3番目のタイムだった恭子は第3コース。

1コースには南部三中の君塚真奈美。

2コースは川村中の江藤和美。

4コースが南部四中の原智子、準決勝の1位のタイムを出した選手
だ。

5コースは高野台中の田中美由紀。

6コースはつづじヶ丘中の進藤麻衣子。

7コースは南部四中の原郁子、4コースの原智子とは双子の姉妹だ。
そして、8コースには東部二中の柳瀬川純子。

恭子と原智子とのタイム差はわずかに0秒02。

準決勝をトップ通過を確信した瞬間からスピードを落として、流し
た恭子には充分逆転可能なタイム差だった。

「いよいよ100の決勝だな。」

スタンドの手摺にもたれかかった悠斗は拓に向かってそう言った。

スタンドのプラスチック製の椅子に座っていた拓も立ち上がって手
摺にもたれかかった。

「そろそろ行かなくちゃ。」

「なんだって？」

「そろそろ練習に行かなくちゃならない。」

「何を言ってる？今日は休みじゃなかったのか？」

「ああ、会社は休みにしたが、練習を休むわけにはいかない。」

「じゃあ、せめてこのレースだけでも見ていつてやれよ。」

「イヤ、見るまでもないさ。」

そう言つて、拓はスタンドを後にした。

「冷たいヤツだなあ。」

歩き去る拓の背中を見つめて悠斗はそう呟いた。

拓が競技場の外に出たとき、ピストルの音が響き渡り、場内に歓声が上がった。

「立ち止まるなよ。君はこんなところで躓いてなんかいけないんだから。そして、風になれ。」

拓は一瞬だけ振り向くと、そう呟いた。

スタートと同時に恭子は一步前に飛び出した。

それからみるみる他の選手たちを引き離れた。

50mに差し掛かる前に既にトップスピードに乗せていた。

4コースの原智子と5コースの田中美由紀が食い下がる。

しかし、誰も恭子の影を踏むことすらできなかった。

電光掲示板に浮かび上がった数字を見て野村は腰を抜かしそうになった。

11.75。

女子の中学生記録に0秒02届かない数字だった。

走り幅跳びの5m87cmも大した記録だが、これは中学生記録から比べると、30cm以上差がある。

これが2年の秋の新人戦で出た記録となれば、当然、中学生記録の更新が期待される。

野村は改めて自分の運命を神に感謝した。

もしかしたら、自分の教え子が男女の日本記録を両方塗り替えるかもしれないのだ。

そう思ったら、気絶しそうになった。

それは不思議な感覚だった。

まるで空を飛んでいるような気分だった。

廻りの景色が消え去り、歓声も雑音も聞こえなくなった。

自分が今いるのは陸上競技場のトラックの上、しかも、100mの決勝の舞台だということさえ忘れてしまいそんな感覚。

恭子は風邪と同化してゴールを駆け抜けた。

テープを切った瞬間、意識が戻って後ろを振り向いた。

1、2、3…7人いる。

恭子の前には誰もいない。

『勝った？』

そう思った瞬間、「やったぞー！」そう叫んでいる野村の声が耳に飛び込んできた。

そのまわりでチームメイト達が、飛び跳ねてバンザイをしている。

「そうか、私レースに出てたんだ！」

恭子にはまるで実感がなかった。

すると、原姉妹が恭子のそばに駆け寄ってきて祝福の言葉をかけた。
「三浦さんおめでとう。さすがだわ。でも、リレーでは負けないわよ。」

「ありがとう…」

恭子はようやく自分が優勝したことを意識した。

優勝するのは当たり前。

レースお前まではそう思っていたが、いざ、実際に優勝してみると、その言葉の重みがズシリとのしかかってきた。

そう、まだリレーの決勝が残ってる。

リレーの決勝では原姉妹がいる南部四中が油症候補の筆頭に挙げられている。

準決勝の第二レースでは、100の決勝に進む原姉妹を温存して1位通過しているのだ。

しかも、タイムは決勝に進んだ8チーム中で最速だった。

その南部四中が4コース。

1コースが恭子達、第一中学。
2コースは新藤麻衣子率いる、つつじヶ丘中。
3コースは君塚真由美率いる南部三中で原姉妹率いる南部四中にはライバル意識をむき出しにしている、100決勝でのリベンジを議論んでいる。
5コースは江藤和美率いる、川村中。
6コースは田中美由紀率いる、高野台中。
7コースの東洋中は100の決勝には選手を送れなかったが、4人がそこそまとまったチームだ。
そして8コースが、柳瀬川純子率いる、東部二中。

恭子達、第一中学のタイムは50秒38。

原姉妹のいる南部第四中学の記録は飛車角抜きでも48秒23。

この段階で2秒以上劣っていた。

これに原姉妹が加われれば、中学記録の47秒73を更新するかもしれないという期待がかかる南部四中にどこまで善戦できるか…

正直、野村は6位入賞できれば言うことはないと思った。

いくら、100mチャンピオンの恭子がいるとはいえ、他のメンバーの力量を考えたら、決勝に出られただけでも、奇跡に近かったからだ。

男子はことごとく予選で敗退し、かろうじて走り高跳びの佐藤良伸が6位入賞を果たし、面目を保った。

したがって、第一中学としてはこの女子100×4リレーが最後の種目となる。

特の近隣校も、リレーでは決勝に残ることができなかったのも、このレースにはそれらの学校の選手や関係者が期待を込めて第一中学の応援に集まってきた。

恭子は、こういったプレッシャーを存分に楽しむことができる選手だったが、他のメンバーは相当緊張しているようだった。

野村はメンバーの緊張をほぐそうと、冗談を交えて励ましの言葉をかけたが、これがかえって逆効果になったようで、準決勝でバトン抜け私でミスをしたキャプテンの大橋歩美と第一走者の橋本由美は手の震えが止まらなかった。

見かねた恭子は他のメンバーを集めて円陣を組むと小さな声でささやいた。

その言葉を聞いた他のメンバーは、プツと吹き出して笑い始めた。

「だから、気楽にいきましょう。それに、私達、一度、準決で落ちてるんだから。そう思えば、このレースはロスタイムみたいなもんだから。ねっ！」

歩美と由美の震えは止まっていた。

そして、いつものようにキャプテンの大橋歩美が気合を入れる言葉を口にした。

「由美、スタート大事だからね。」

「任して！」

橋本由美は頷いた。

そして、歩美は続けた。

「私は今度こそ、頑張るから、陽子も何とか恭子にバトンを渡すまでふんばって。」

「OK！頑張るわ。」

秋本陽子もいつも以上に気合充分だ。

「最後はいつも頼ってばかりで申し訳ないけど、やっぱりあなたが頼りなの。だけど、今日は思いっきり楽しみましょう。」

キャプテンの大橋歩美と他のメンバーが、いつものように一斉に恭子を見た。

「任せなさい！」

恭子も、いつものように一言言い胸をパーンと叩いた。

そして、キャプテンの号令で最後の気合を入れた。

「イチチュウー ファイツ！」

「オー！」

さあ！準備は整った。

選手たちは中央の表彰台の前の整列して、メンバーの確認が行われて後、レースに關しての注意事項を聞かされ、それぞれのスタート地点へ散っていった。

第一走者の橋本由美は他のメンバーを見渡した。準決勝と一緒に走った南部三中、川村中、東部二中は同じ顔触れだった。

少なくともこの三人には先行できると確信していた。

できれば、トップで歩美にバトンを渡してやりたいと思ったが、南部四中は第一走者に原郁子を起用してきた。

100m決勝では4位に入賞した選手だ。

由美自身も、決勝には残れなかったが、準決までは勝ち残ったランナーで、恭子に比べれば見劣りするが、他の学校だったら、アンカーに起用されてもおかしくない実力であった。

実質、第一中は由美が逃げて、他の二人が持ちこたえ、最後、恭子が突き放す。

これがリレーでの必勝パターンだった。

しかし、由美は原郁子の顔を見ても動じることにはなかった。

不思議と、落ち着いて物を考えることができた。

『まあ、最悪、5位くらいでいければ、最後、6位入賞は出来るかもね。』なんて計算をする余裕すらあった。

反対に、他の学校の選手たちはかなり緊張している様子だった。

第二走者の大橋歩美は、あくまで、つなぎに徹することと割り切っている。

第一走者のメンバーを考えると、おそらく由美は2位でバトンを運んでくるだろう。

『私が二人、陽子が二人に抜かれたとして、最悪6位で恭子にバトンが渡ればそこから順位が下がることはないから、入賞確実、野村

先生大喜び！』

二人に抜かれてもいい！そう考えると、気分が楽になった。

第三走者の秋元陽子も歩美と同じような計算をしていた。

しかし、他のメンバーの様子を見ると、明らかに緊張しているのが分かった。

この新人戦では、ほとんどの選手が初めて決勝のレースに出ているのだ。

場慣れしているものなどほとんどいない。

南部四中の選手だけが、200mで優勝している。

そんな選手が入ってきた第3グループの他のメンバーは相当南部四中を警戒している。

しかし、陽子にとっては彼女を計算に入れる必要がない。

当然、自分より先にバトンを受け取るだろうし、彼女を追い抜くとか差を詰めるなんてことは全く考えていなかったからだ。

何より、自分のうしろには恭子がいる。

こんなに心強いことはない。

恭子のいる第4グループ。

さすがに、ここは100mの決勝を再現したかのようなメンバー構成だった。

当然、他の学校の選手たちは恭子を警戒しているようだった。

しかし、これはリレー。

このこのバトンが運ばれて来た時の順位とタイム差が重要になる。

当然、ここで横一線だったら誰も恭子にはかなわない。

ここに来るまでに、第一中学をどれくらい離して来られるかが、他の学校の作戦上のキーポイントだった。

したがって、第二、第三走者にある程度実力のある選手を廻したいところだったが、そうになると、第一走者が手薄になる。

スタートでの出遅れはやっぱり避けたい。

その辺の駆け引きがレースのポイントだと考えていた。

ただ、一校南部四中以外は。

南部四中は、明らかに実力が抜けていた。

最後に三浦恭子がいても、相手は第一中学ではなく、中学記録だけそう考えていた。

各校、様々な思惑を秘めてスタートに時間が、刻一刻と近づいていた。

優勝のご褒美

9・優勝のご褒美

恭子は顔を上げて空を見上げると、そっと目を閉じ、大きく深呼吸をした。

「時間です。準備してください。」

係員の男性が声をかけた。

恭子は目を開いてスターと地点を見た。

由美がスタート位地に付いていた。

「いい顔をしているわ。」

由美の表情に緊張のいろはなく、今、この時を楽しんでいるような、そんな顔に見えた。

スターターが位置に付き、「位置について。」と促す。

各校の第一走者たちはスタート位置へ進んだ。

「用意…」

由美は自分の心臓の鼓動を感じながら、意識を集中させた。

周囲の雑音が消えた瞬間、一か八かの勝負に出た。

思いつきり地面を蹴りだしたのと同時に“パーン”とピストルの音がした。

「ドンピシャ！」

由美は他の選手たちより1歩先に飛び出した。

フライングギリギリだったが、二度目のピストルはなかった。

第一中学は1コースだったので、他の選手たちのスタート具合が手に取るように分かった。

由美はスタート直後には2コース・3コースの選手の前に出ていた。その後はもう何も考えずに、第2走者の歩美の左手だけを見て走っ

た。

「もう少し…」

もう少しでトップのままバトンをつなげる。

しかし、4コースの原郁子選手が先にバトンを渡すのがチラッと見えた。

ほぼ同時に由美も第2走者の歩美にバトンを渡した。

歩美には、ピストルがなるのと同時に由美が飛び出すのがはつきり見えた。

それから、あつと言う間に由美が近づいてくる。

歩美は徐々に助走を始め、左手を差し出した。

そして、今度はしっかりと由美からのバトンを受け取った。

「行けーっ！」

歩美は左手で受け取ったバトンを右手に持ち替えながら、後方から聞こえてきた由美の声に心の中で頷いた。

バトンを受け取ったときは2位だった。

しかし、最内を走る歩美には、まだ前方に5人の選手が見えた。

そんな中で、今、自分が何番目なのかは考えるつもりはなかった。

ただ、次の第3走者、秋元陽子へバトンをつなぐことだけしか考えていなかった。

そして、すぐに陽子の背中が見えてきた。

「お願い！」

そう言つて陽子にバトンを渡して歩美はその場にひざまずいた。

既に走り終えた由美が右手の指を3本立てて歩美に微笑みかけている。

「よかった。さっきよりがんばれたんだわ。」

歩美は立ち上がると、ゴール地点へ向かって駆けだした。

歩美から渡されたバトンは、準決の時よりずっと重たく感じられた。

陽子は、この重さこそが自分を励ましてくれるメンバーたちの気持ちの証だと感じた。

第一中学が1コースだったのは、陽子にとってプラスだった。

陽子は小学生の頃、スケートのショートトラック競技を冬の間やっていた経験がある。

コーナーがきつければきついほど、力を発揮できるのだ。

しかし、さすがに、土の上では陸上競技の専門家たちに食らいついていくのがやっとだった。

アンカーにバトンを渡すところは直線コースの入口になる。

ここで各校横一線に並ぶのだ。

今までずっとコーナーを走ってきた陽子は、自分が今何番目なのかまったく分からなかった。

というより、気にする余裕がなかった。

「頑張つて！」

そう叫ぶ恭子の声がはつきり聞こえた。

陽子は最後の力を振り絞ってバトンを差し出した。

その外側で3人の選手が既にバトンを渡し終えて、最終走者に声援を送っている姿があった。

恭子にバトンが渡った二が4番目。

野村は、この時点で6位入賞は間違いないことを確信した。

しかし、野村が驚いたのは今まで走った3人が、3人とも100mの自己記録を更新していたからだ。

あくまでも、バトンを受け取って渡すまでの参考記録だが、第2走者の大橋歩美と第3走者の秋元陽子は、終始コーナーを走っていたにも係わらず、直線で記録を取ったときの最高タイムを越えていたのだから驚いた。

「こりゃあ、ひよつとするとひよつとするかもしれんなあ！」

スタンドで見ていた、悠斗も、ここまでの展開から一中が相当、

頑張っているのが分かった。

もっとも、準決勝でもバントラブルがなければ、1秒以上タイムが短縮されていただろうことを思えば、当然といえば当然だと頷いた。

そして、いよいよ、恭子へバトンが渡った。

「よし！行けっ！」

悠斗は懇親の思いをこめて叫んだ。

「いい感じだわ。みんな最高の走り。」

恭子は由美、歩美、陽子の走りを見つめながら、自分の体の中で血液が躍動しているのを感じた。

第3走者の陽子が近づいてくるに伴って、恭子はワクワクして仕方がなかった。

心臓の鼓動がリズムカルに時を刻んでいる。

スタンドの歓声がスローモーション画像のBGMように聞こえてくる。

4コース、南部四中の原智子が先頭でバトンを受け走り去っていった。

続いて、5コースの川村中・江藤和美、3コース・南部三中の君塚真由美が僅差で走り出した。

少し遅れて、4番目で陽子からバトンを受けた恭子は、バトンの感触を左手に感じた瞬間、全身に今までに経験したことのないエネルギーが溢れてくるのを感じた。

恭子はバトンを受けて最初の力を左足で思いっきり地面に向かって放出した。

同時に、地面で反発した力が少し沈め加減にした恭子の体を一気に前方へはじき出した。

ものの二、三步で恭子は江藤和美と君塚真由美を視界の外に弾き飛ばした。

恭子以外の全てのものが止まっているように見えた。

恭子の動き自体も、まるでスローモーションのようだった。競技場にいた誰もがそう感じていた。

それほど恭子の走は力強く、美しかった。

江藤和美と君塚真由美は恭子の姿を確認することが出来なかった。一陣の風が通り過ぎたと思ったら、恭子の姿は遙か彼方に消えていくように見えた。

実際には1、2 m前にいるだけだったが、二人にはそう思えた。

恭子の前には南部四中の原智子しかいなかった。

バトンを受けたばかりの江藤和美、君塚真由美とは違って、既にトップスピードに達している原智子を捉えるのは、さすがの恭子でも容易なことではなかった。

しかし、恭子の視界にはゴールの白いテープしかなかった。

今、自分が走っているのは、3人のチームメイとが運んできたバトンをゴールまで届けること。

その思い以外には何もなかった。

原智子に届こうが届くまいが、そんなことはどうでもよかった。

そして、もう一度あの時のような風を感じてみたいと思った。

「もう少し！もう少し……」

目の前には、ゴールの白いテープが迫っていた。

月に一度、練習が休みになる第一日曜日の前日。

それこそ一月ぶりに拓は実家に帰ってきていた。

居酒屋“ばれいしょ”の二階の座敷。

拓が来るときは、マスターが気を利かせて二階の個室を空けてくれる。

そこで悠斗と酒を飲んでいると、マスターの娘でもあり、恭子の親友でもある野々村仁美が二人のそばにやってきた。

「ねえ、拓さん？ 恭子に知られてもいいかしら。拓さんが来ていること。」

拓は、“恭子”と聞いて、少しためらったが、「かまわないよ。」と、答えた。

逆に、悠斗はかなり“ドキッ”とした。

悠斗がコーチを勤めるサッカークラブ、ジュニアスターズに恭子の弟の浩人が入ってきてから、恭子と接する機会が多くなっていった悠斗は、以前にも増して恭子のことが気になっていったからだ。

「悠斗先輩もいいですね？」

仁美に念を押されて、悠斗は二つ返事で「もちろんさ！」と答えた。仁美は嬉しそうに、その場で携帯電話で恭子の家に電話をかけた。

「へへえ、もう携帯電話なんか持ってるんだ？」

拓は、感心して仁美に問いかけた。

「今時、持っていない方が珍しいですよ。私の友達だと、恭子くらいのもんかしら。」

「そうなんだ？」

拓は、益々感心した。

そう言う拓も携帯電話は持っていなかった。

「まったく、走ることはかり考えているヤツには携帯電話なんか必要じゃないみたいだな。」

悠斗がからかうように、拓の方を見て言った。

「えっ？ まさか、拓さんも携帯持っていないんですか？」

拓は、少し恥ずかしそうに「う、うん。まあ…」と、話を濁した。

「それは残念ねえ…」

そう言つて仁美は首を傾げて何やら考え出した。

「どうかしたのか？」

その様子に気が付いた悠斗が尋ねた。

「実はね、今電話したら、恭子も、この前の新人戦で優勝したから、

携帯買って貰ったんだって。だから、拓さんと番号とアドレスを交換できるって楽しみにしていたのに……」

「そうなんだ！じゃあ、替わりに俺が交換してやるよ。」

雄太が自分の携帯電話を取り出して、いじり始めると、急に拓が立ち上がった。

「仁美ちゃんゴメン、すぐ戻ってくるから恭子ちゃんが来たら、少し待っててって、そう言つといて。」

そして、階段を駆け下り、出ていった。

「なんだ？急に、どうしちゃったんだ？」

悠斗は、訳が分からず、仁美の顔を見た。

仁美もキョトンとした顔で突っ立っていた。

受話器を置いた恭子は、嬉しさを表情に出さないように部屋へ戻った。

部屋に戻ると、買ってもらったばかりの携帯電話を手を取った。

折りたたみ式で、白いボディのシンプルなデザインのものだ。

ジーンズに後ろのポケットにそれをねじ込むと、ウィンドブレーカー

を羽織り、阪神タイガースの野球帽をかぶって部屋を出た。

そのとたん、居間にいた父親の孝之に、声をかけられた。

「仁美ちゃんなんだって？」

「うん、ちよつと話があるって。だから今から、仁美ん家行つて来る。ごはんご馳走してくれるみたいだから、お母さんにそう言つていて。」

孝之はチラッと時計に目をやった。

午後6時だった。

「遅くなるようなら電話してくれ。迎えに行つてやるからな。」

「うん、お願い！」

その返事を聞いて、孝之は、安心した。

恭子は、孝之が迎えに来るのを拒絶さえしなければ、父親に束縛されることのないのを心得ていた。

「気をつけて行つて来いよ。」

孝之がそう言った時には、既に恭子は玄関を出ていた。

その頃拓は、駅前の携帯電話ショップに来ていた。

携帯電話の事なんかまるでわからないので、ショップの店員に聞いてみた。

「実は、初めて使うんですが、どれが簡単ですか？」

電話会社の制服を着た女性の店員が歩み寄ってきて、無数に並べられた携帯電話の中から、1台を手にとって、拓に示した。

それは、テレビのリモコンのようなデザインのもだった。

「これが、いちばん簡単に扱える機種です。お年寄りの方へのプレゼントには最適ですよ。」

「お年寄り？」

そう言われて、拓は店員が勘違いしているのだと気が付いた。

「いえ、プレゼントではなくて、僕が使いたいです。」

店員は少し驚いた顔をしながらも、すぐに表情を整えて、いくつかの携帯電話を物色しながら、拓に質問をしてきた。

「どういう目的でお使いになれますか？」

「目的ですか？」

拓は不思議に感じた。

電話を買うのに、電話を掛ける以外の目的って…

「ええ、例えば、写真の画質にこだわるとか、音楽を楽しむとか色々ありますけど。」

「はあ…操作が難しくなければ何でもいいです。」

「今は、どの機種もそんなに難しくはないですから、これなんかいかがですか？若い方には結構人気があるんですよ。」

「じゃあ、それ下さい。すぐに使えるんですか？」

「ありがとうございます。少々手続がありますので、30分ほどお待ちいただけますか？」

「30分…分かりました。なるべく急いで下さい。」

恭子が“ばれいしょ”のドアを開けると、マスターが人差し指で上を指した。

恭子は頷いて二階での階段を上がっていった。

座敷の個室から、笑い声が聞こえてきた。

恭子は個室の襖戸を少し開けて中を覗いた。

仁美と悠斗が見えた。

拓の姿は見当たらなかった。

襖戸が開いたのに気が付いた仁美が、大きく襖戸を開くと、そこには恭子が立っていた。

「あら、いらつしゃい。さすが、チャンピオン。早かったわね。」

恭子は拓がいらないことに、ちよつと、がっかりしているようだった。

「仁美、拓さんは？」

「うん、なんだか、急に出ていっちゃって。すぐ戻るから、恭子が来たら待つてるようにって。」

「そう…」

「まあ、上がりなよ。すぐに戻って来るって。」

悠斗に促されて、恭子は座敷に上がった。

「はい。これで、今から使えますよ。」

店員に携帯電話を手渡された拓は、手提げ袋を受け取ると、大急ぎで“ばれいしょ”へ向かって駆け出した。

女性の店員は、クスクス笑いながら駆け出して行った拓の後姿を見送った。

「おい、今の西崎拓じゃないのか？」

奥にいた男性の店員が女性店員の横に来てそう言った。

「西崎…？」

「なんだ、知らないのか？100mの日本記録保持者でこの町の小学校と中学校を出てるんだぞ。」

「そうなんですか？ だったら、もっと早く教えて下さいよ。サイン貰っておけばよかった。」

“ばれいしょ”の二階の座敷では、悠斗が恭子の新人戦での活躍をたたえていた。

「しかし、野村先生も君に走り幅跳びをやらせるなんて、大したもんだよ。先見の明があるというか、なんというか…」

その時、階段を駆け上がってくる足音が聞こえてきたかと思うと、背後の襖戸が勢い良く開いた。

そこには息を切らしながら、額の汗を手でぬぐっている拓がいた。

「おい、どこ行ってたんだ？ 恭子ちゃん、とつくに来てたんだぞ。」

悠斗が、少々激しい口調で拓を責めると、拓は、左手で“ゴメン”という風な仕草で三人にそれぞれ詫びた。

そして、右手に持っていた手提げ袋を差し出し、ようやく落ち着いた心臓に左手を当てて口を開いたが声にならなかった。

拓が差し出した手提げ袋が携帯電話会社のものであることは、他の三人にはすぐに分かった。

それを見た悠斗が、ニヤニヤしながらからかうように拓に言った。

「なんだ、急に飛ぶ出していったと思ったら、恭子ちゃんが携帯電話の番号を交換したがつて聞いたもんだから、それ買いに行つたのか？」

悠斗の言葉で、状況を理解した恭子は、拓の方を見てはにかむような笑みを浮かべた。

拓は座敷に上がると、早速悠斗に買ったばかりの携帯電話を見せて、使い方を聞き始めた。

「とりあえず、ここにいるメンバーの電話番号とメールアドレスを入れてやるから、あとは自分で説明書を読んで研究しろ。」

悠斗はそう言つて、三人の番号とメールアドレスを拓の携帯に登録した。

「ねえ、悠斗先輩、私もお願いしていいかしら？」

そう言つて恭子も携帯電話を取り出し、悠斗に渡した。

「あれっ？これ、お前と同じじゃないか？」

悠斗はそう言つて、拓の携帯電話と見比べた。

拓が買つてきた携帯電話は、恭子を買つてもらつたものとまったく同じものだった。

「なんだよ！お前たちは？どこまで、運命共同体なんだ？」

四人は、しばらく互いの携帯電話をいじったり、メールをしてアドレスの確認をしたりしながら過ごしていたが、やがて拓が新人戦の話を始めたので、恭子の表情が変わった。

「リレーは残念だったね。」

「そうだよ！ゴールがあと1mでも先にあつたら、絶対に抜かしていたのに。」

実際にその場で見ていた悠斗は、本当に悔しそうな顔をして残念がった。

リレーの決勝では、惜しくも第2位だった。

4位でバトンを受け取った恭子は、あつという間に、前の二人をかわすと、先頭を走る南部四中の原智子を追いつめた。

そして、ほぼ二人同時にゴールになだれ込んだ。

判定は写真に委ねられ、一中は二着に敗れた。

しかし、一中のメンバーたちは、恭子に駆け寄り、まるで、優勝したかのようにはしゃぎ、そして、大声をあげて泣いた。

「ありがとう！恭子。」

「だけど、いちばん楽しかった。今までのどのレースよりも風に近づけたような気がするわ。」

「ああ、確かに、野村先生が言っていたけど、バトンを受けてからだから、実質100mなかったかもしれないけど、普通に100m走っていれば、中学新を出していたかもしれないって。」

「でも、あれはリレーだったから、気持ちがすごく入っちゃったから。」

「その気持ちを忘れないようにするんだ。それが、君の走りの原動力になる。いつでも、君の周りにはそういうエネルギーが満ち溢れているんだ。それは、ある意味、神様に選ばれた人間にしか与えられないものなんだと思う。君はそれを間違いなく持っている。」

拓にそう言われると、不思議と、その気になってくる。

そして、それは、恭子の心の奥深くにずっと眠っていた感覚でもあった。

拓と巡り合ってから、恭子の中のこういった感覚が徐々に目覚めてくるのを恭子は感じていた。

「こりゃあ、一中から男女の日本記録保持者が出るのも時間の問題だなあ！」

そう言っではしゃぐ悠斗と仁美をよそに、拓はやさしいまなざしで、恭子を見つめていた。

恭子は、その時、拓のまなざしが何を語っているのか、感じ取ることはできなかった。

「拓さん、私も覚えるから、拓さんも早く携帯の使い方覚えてくださいね。」

「ああ、頑張るよ。」

「ねえ、拓さん？写真撮ってもいい？」

そう言っつて、恭子は拓に向かって携帯電話のカメラを向けた。

それを見た仁美が、恭子から携帯電話を取り上げてこう言った。

「どうせなら、二人一緒の写真撮ってあげるよ。ほら、恭子向こうに行って拓さんの横に座って。」

仁美にそう言われると、恭子はテーブルの向かいに座っていた拓の方に行き、拓の腕を取って体を寄せた。

「ほら、もう少しくっついて。じゃないと入らないわ。」

恭子は拓にほっぺたがくっつくほど顔を寄せた。

「ハイ、チーズ！」

カシャツとシャッター音が響くと、恭子は早速画面を確認した。
「やった〜！この写真、拓さんにも送っておいてあげるわね。」
無邪気の喜んでいる恭子の表情はまだまだ子供そのものだった。
拓は複雑な気持ちで、恭子の笑顔を眺めた。

ホワイトクリスマス

10・ホワイトクリスマス

空はどんよりとした雲に覆われ、朝から寒さが肌を刺した。

しかし、駅前の商店街は活気に満ち溢れていた。

どの店の店頭にも“SEEL”と書かれたビラが貼られている。

そして、クリスマスツリーのイルミネーションと“ジングルベル”

の曲が、行き交う人たちの心をよりいっそうかき立てているようだ。

「こりゃあ、久しぶりにホワイトクリスマスになるかもな！」

携帯電話ショップの男性店員が空を見上げてそう言った。

中から、女性の店員もできて空を見上げた。

女性の店員は腕組みをして早々に店の中へ引き上げていった。

店内に流れているラジオ番組のパーソナリティが“今夜は夕方から降り始めた雪が、日付の替わる頃にはうつつすらと積もるだろう。久しぶりのホワイトクリスマスになるだろう”と伝えていた。

通知票を開くと、国語4、数学5、理科（物理）5、社会（政治・経済）4、英語4、音楽5、美術4、体育5、家庭科5といった数字が並んでいる。

「うわー！いいなあ！と、いうよりさすがだね！」

そう言っただけで恭子の通知票を後の席から覗き込んだ仁美は、自分の通知票と見比べてため息を付いた。

「どれ、見せてみなさい！」

恭子が振り向いて、仁美の通知票を取り上げた。

恭子は、そのまま仁美の机で通知票を広げて、自分のと比べてみた。国語5、数学3、理科（物理）4、社会（政治・経済）5、英語3、音楽4、美術3、体育5、家庭科5。

「あら、凄いじゃない！」

「そんなことないわよ。“3”が3つもあるし。それに、恭子に『凄い』なんて言われても、ありがたみが感じられないわ。」

「何言ってるのよ。私にしてみれば、政治・経済で“5”を貰う人なんて神様みたいだわ！」

「そうなのよねえ！国語も得意だし、私って、新聞記者に向いてるんじゃないかしら！」

「いいかもね！」

「そうよね！もしそうだったら、恭子の記事が書けたらいいなあ。」
「私の？」

「そう！恭子がオリンピックで拓さんと一緒に活躍する記事。」

「オリンピックだなんて大袈裟だわ。」

そんな話で盛り上がる二人をよそに、担任の野村が冬休み中の注意事項を話し始めた。

恭子は正面に向き直り、野村の話に耳を傾けた。

昼を過ぎても一向に気温が上がる気配はなかった。

グラウンドを周回する部員たちの口元からは一様に白くなった息が吐き出されている。

2週、3週、周回を重ねるごとに、徐々に体が温まり、うっすらと汗をかき始めた頃、空から白いものが落ちてきた。

選手たちは立ち止まって、一斉に空を見上げた。

「予報よりずいぶん早いなあ。」

誰かがそんなことを呟いた。

拓は、かまわずに一人で走り続けた。

すると、いきなり後から肩をポンと叩かれた。

振り向くと、篠塚が走りながら拓に言い寄ってきた。

「練習が終わったらちよつと付き合ってくれないか？」

「今日はちよつと……」

「分かってるさ！デートなんだろう？手間はかけさせないから、ち

よっただけ！なっ？頼むよ！」

篠塚はそれだけ言っと、拓の返事を聞かずに、ペースを上げて拓を追い抜いていった。

「相変わらず、訳わかんねえおじさんだなあ。しかし、あんなに喋りながら走ってるのに全くリズムが替わらない。さすがシノさんだ。」

拓は、篠塚が参加しなかった国体こそ、連覇を果たしたが、全日本は篠塚が制した。

日本記録保持者とはいえ、百分の1秒を競う世界では、ちょっとした体調の変化で勝負の結果が変わってしまうほど、拓と篠塚の力は拮抗していた。

終業式を終えた恭子と仁美は駅前のショッピングモールにある広場で待ち合わせをしていた。

クリスマスのプレゼントを買ったためだ。

恭子は、広場の真ん中にある時計台の下で白いベンチに座って仁美が来るのを待っていた。

手をセーターの袖の中に納めて、ほっぺたを覆っている。

吐く息は白くじつと座っていると、凍えそうなほど寒い。

「まったく、なんでこんな外で待ち合わせすることにしたんだろう？」

そんなことを思いながら立ち上がって、飛び跳ねたり時計台の廻りを歩いたりしていると、頬に冷たいものが触れたような気がした。

恭子は立ち止まり空を見上げた。

空から雪が舞い降りてきた。

「雪？」

恭子は、一瞬、さっきまでの寒さを忘れてしまった。

「どつりで寒いはずね！」

都会では温暖化の影響なのかどうかは分からないけれど、こんな時期に雪が降るのは珍しい。

雪を見てワクワクするなんて、自分もまだまだ子供なんだとそう思った時、聞きなれない声が自分を呼んでいるのに気がついた。もちろん、声の主は仁美だった。

ただでさえ、暗くなるのが早いこの季節なのに、空は厚い雲に覆われ、昼過ぎから降り始めた雪が次第に世界を塗り替えていく。町の明かりに照らされた雪は、いつそう白く輝き、天然のイルミネーションはクリスマススイブの夜を最高に演出してくれた。まさにホワイトクリスマスとなった。

拓は本社の玄関口で篠塚を待っていた。

クラクションが2回ほどなった後、ヘッドライトが拓を照らした。シルバーのセダンな窓から篠塚が顔を出し、拓を手招きしている。拓は小走りで車に近づき、助手席のドアを開けると、素早く体を押し込み、シートベルトを締めた。

「こんなに雪が積もってるのに大丈夫ですか？」

拓は、篠塚の運転を心配した。

「バカ言え、俺は自分の脚で走れなきゃあ、カーレーサーになっているところさ！」

自慢げにそういいながら、篠塚はセダンを発進させた。

「ところでどこに行くんですか？」

「まあ、いい！黙ってついて来いよ。」

しばらく走ると、セダンは駅前のショッピングモールの中にある駐車場に入っていた。

駐車券を受け取り、車を空いたスペースに止めると、シートベルトを外してドアを開けた。

「何か買ひもんでもするんですか？」

「うん！モノはもう買ってある。受け取るだけだ。」

「だったら俺が来る理由がないじゃないですか。」

「大ありさ！受取人が来なきゃあ、話にならない。」

「受取人？って、俺っすか？」

「いいから、早くついて来い！」

そう言つて、篠塚はショッピングモールに入っているブランドショップへ入っていった。

「頼んでいたものを貰おうか。」

そう、店員に告げると、店員の女性は満面の笑みを浮かべてレジブースの下の方からきれいにラッピングされた大小の箱を二つ取り出した。

それを受け取った篠塚は、大きい箱を拓に渡し、ウインクをしながらこう言つた。

「金は後でいいぞ！とりあえず、クリスマスイブに彼女に会おうつてヤツがプレゼントの一つも持っていけないんじゃ、お姫様が悲しむぜ！」

「シノさん！」

呆氣にとられた拓を残して、篠塚は小さい方の箱をジャンパーのポケットに突っ込むと、駐車場の方へ走つていった。

走りながら、ふりまかずに、手を振つて、叫んだ。

「早く行けよ！雪で電車が止まっちゃったら大変だぞ！」

一人置いて行かれた拓は、女性の店員に箱の中身を聞いてみた。

店員はニコニコしながら、答えた。

「グイトンのポーチですよ。」

「グイトンってなんですか？」

女性の店員はクスクス笑いながら、同じ商品を手に取つて見せてくれた。

「これもらつたら、女の子は嬉しいもんなんですか？」

「はい、もちろんですよ。ちなみに、篠塚さんがお持ちになったのはステファニーの指輪なんですよ。」

そんなやり取りをした後、店内の壁に掛けられている時計に目をやると、拓は女性の店員に一礼して、駅の方へ向かつて歩き出した。ショッピングモールは駅ビルと繋がっていて、駅ビルから直接電車のホームへ出られるようになっていた。

拓が切符を買おうとした時、ちょうど上りの電車がホームに滑り込んできた。

急いで切符を買って、ホームを横切り電車の飛び乗った拓は、大事なことを聞き忘れたと思った。

「これって、いったい、いくらくらいするんだろう？五千円くらいはするんだろうな・・・」

恭子と仁美は、ショッピングモールの中にある、パッケージジシヨップに来ていた。

この日の買い物の目的は、プレゼントを買うことではなく、用意したプレゼントをラッピングするための包装紙やリボンを買うためだった。

実は、秋の新人戦が終わった後、二人でマフラーを編み始めたのだ。

それまで、二人とも編み物などやったことがなかったから、恭子の母親に手ほどきを受けながら、ようやく“手編みのマフラー”が完成したところだった。

恭子はもちろん拓のために、そして、仁美は悠斗のために。

その頃、悠斗は終業式を終えた後の子供たちを連れて、サッカーの練習試合をするため、隣町の小学校を訪れていた。

「こんな雪の中で試合したのは選手権に出た時以来だなあ。」

悠斗が懐かしそうにそういうと、監督の寺西は複雑な表情を浮かべて悠斗の顔を見た。

「もう、引きずってないよな？」

「ああ、怪我のことですか？引きずってたら、こいつらの面倒なんて見ていませんよ。それに、今はちゃんと新しいの目標がありますから！」

悠斗がきっぱり言い切ったので、寺西は微笑んで立ちあがった。

「そうか、新しい目標ねエ・・・まあ、お前なら、きっとやり遂げられるさ。」

そんな寺西の顔を見上げて、悠斗はニツコリ笑った。

雪はだんだん激しくなり、すぐ先の景色も見えないくらい吹雪いてきた。

寺西は相手校の監督と話し合い、試合を中止することにした。

この時点で2 - 2の同点だったが、お互い、点を取っていたのでそこそこの収穫はあったとして中止することに同意した。

「さあ、みんな帰るぞ」

寺西はマイクロバスにチェーンを巻きつけて子供たちを車に詰め込んだ。

「監督、将来の日本代表たちが乗ってるんですから、無茶な運転はしないで下さいね！」

悠斗が真顔でそういうと、寺西は分かったと頷いて曇った窓ガラスをヒーターで暖めた。

恭子と仁美は、それぞれ好みの箱や包装紙を選び終えると、ラッピングコーナーへ行った。

そこでは、ショップの店員がきれいなラッピングの仕方を教えてくれるクリスマス時期だけのサービスをやっていた。

二人は手編みのセーターを箱に入れた。

仁美は白い長方形の箱で蓋が透明のセロハンになっていて中身が見えるもの。

それを、赤い包装紙で包んだ。

そして、グリーンのリボンでクリスマスっぽいらぴんぐにした。

恭子は紺色の丸みのついた筒状の箱のリボンのシールを貼った。

それを、銀色のラッピング用の袋に入れてからブルーのリボンで縛った。

「どお？」

仁美はラッピングし終わったクリスマスプレゼントを掲げて恭子に

見せた。

「素敵！まさにクリスマスって感じだよ。私のはどお？」

恭子も自分のを仁美に見せた。

「すごく可愛い！」

二人とも満足げに、笑みを浮かべながら、ラッピングコーナーで貰った、クリスマスツリーの絵が描かれた赤い紙袋にラッピングしたクリスマスプレゼントを入れてパーティー会場へ向かった。

“ばれいしょ”の店先には店のイメージには似つかない、クリスマス用の飾り付けが施されていた。

厨房では、仁美の父親が、忘年会のグループのための料理の下ごしらえの余念がない。

アルバイトの店員達が忙しそうにテーブルのセッティングをしている。

カウンター席では馴染みの客数人が既に一杯やっている。

午後、6時を過ぎた頃から、店内は忘年会の団体客でにわかに騒がしくなってきた。

仁美の父親は、宴会客の料理を板前に任せると、別の料理の支度にとりかかった。

「おやつさん、お嬢さんたちのパーティーは何時からですか？」

仁美の父親は、手を休めることなく、板前の質問に答えた。

「6時半からだ。」

「もう、時間がないじゃないですか？手伝いましょうか？」

「大丈夫だ。それに、こっちの料理はお前さんの専門外だ。」

板前は、仁美の父親が用意した材料や調味料を見て、なるほど頷いて自分の仕事に戻った。

そこには、パスタや生クリーム、霜降りのステーキ肉、レタスに似た見たことのない野菜、トロピカルなフルーツといった洋食の材料が山ほど用意されていた。

寺西は、子供たちを一人一人自宅の前まで送り届けた。

途中で、“ばれいしょ”の前にさしかかり、そこで悠斗を降ろした。
「じゃあな！」

そう言つて寺西は悠斗に手を振った。

車を降りた悠斗は、店の軒先まで走り、頭や服についた雪を払い落した。

店に入ると、そこは別の世界のように暖かった。

「うー！暖ったけえ！」

両手を口の前で合わせて、息を吹きかけながら、奥の階段へ向かつて店の中を進んでいった。

道中、アルバイトの店員やおかみさんに「早いね！」などとからかわれながら、二階の座敷へ上がっていった。

見渡すと、二階の座敷もほとんどの席が客で埋まっていた。

悠斗はいちばん手前の個室の襖戸を開けた。

まだ、誰も来ていない部屋にあがりこんで、ジャンパーを脱ぎ、ハングーに掛けて床の間のポールにぶら下げた。

そのまま、奥の右側の席に腰を下ろした。

すぐに、女将の仁美の母親が熱いおしぼりと緑茶を持ってきた。

「いらつしゃい！寒かったでしょう？試合どうだった？」

悠斗はおしぼりを顔にかぶせて、しばらく上を向いたまま、答えた。

「後半途中で中止！2 - 2で引き分け。監督が車で子供たちを全員家まで送っていったよ。」

「まあ、寺西先生も大変ねエ。今時珍しいわよね。あんな先生。」

「本当ですよ！ボクもあんな先生に習いたかったなあ。」

悠斗はようやくおしぼりを顔から取って暑い緑茶を一口すすった。

「じゃあ、ごゆっくり！」

そう言つて女将は部屋を出た。

改札口を出た拓は、南口方面へ歩いた。

駅ビルの出口から空を眺めたが、雪は到底やみそうになかった。篠塚に車で送ってもらったので傘を持っていなかった拓は駅の売店でビニール傘を買った。

“ばれいしょ”までは駅から歩いて10分。タクシーの乗ろうかとも思ったが、タクシー乗り場には5、6人の行列があつたので、歩くことにした。

道中は見慣れた風景だったが、雪が舞う景色はどこか新鮮に感じた。白い息を吐きながら、店の明かりが見えるところまで歩いてきた頃には、手がかじかんで、体もすっかり冷え切っていた。

店の前まで来ると、場違いな飾り付けを見て思わず吹き出した。

「なんだか、すごい飾り付けだなあ。」

そう言つて、拓は店のドアを開けた。

恭子と仁美は、帰る途中、あまりの寒さに、ショッピングモールを出たところにある、ハンバーガーショップに立ち寄った。

その時点では、パーティーが始まるまでに、まだ2時間はあつた。

二人とも、ホットココアを飲みながら話し込んでしまった。

ハンバーガーショップの店内は、それほど暖房が利いていなかったが、ホットココアのおかげですっかり体も暖まった。

しかし、ココアが覚めてくると、次第に肌寒くなってきた。

それでも外の寒さに比べたら天国のようだった。

「ちよつと、お手洗いに行つてくるね。」

仁美がそう言つて席を立とうとした。

そのとき、仁美の後方の壁に掛かつていた壁掛けの時計が目に入つた恭子はハツとした。

6時35分。

「仁美、たいへん！もう、時間過ぎちゃってるよ！」

「えっ？過ぎてるつて、今、何時よ？」

そう言つて仁美は店内を見まわして時計を捜した。

恭子が指差した方を見て目の色が変わった。

「やばい！お手洗いなんて入ってる場合じゃないわね！走るよ！」
そう言くと、自分のトレーに恭子のカップを乗せ、空いた恭子のトレーと重ねて返却ブースの戻すと、紙袋と上着を手にとって店を出た。

恭子も慌てて仁美に続いた。

二人は走って“ばれいしょ”向かった。

勢いよくハンバーガーショップを飛び出した仁美は、100mもしないうちに立ち止った。

「もうダメ！走れないよ。恭子、先に行つて！」

「なに言ってるの？ほら、お店はもうすぐそこじゃない！」

恭子にそう言われて正面を向いた仁美の眼には、色とりどりの電飾が巻きつけられたプラスチック製の巨大な雪だるまと、暖簾代りにぶら下がった万国旗が見えた。

その場所だけは異様な雰囲気を感じ出していたが、あたりはすっかり雪化粧をして静まり返っていた。

走っていた時には景色を眺める余裕すらないほど、必死だったが、こうして立ち止って、周りの景色を目にすると、それぞれの家の玄関先にはきれいなイルミネーションが施されていて、白銀の世界をより一層、神秘的なものに感じさせていた。

恭子も仁美も、こんなクリスマスイブの夜を経験したことがなかったので、思わず、パーティーに遅刻していることさえ忘れてその場にたたずんだ。

背の高い仁美と、恭子のシルエットはまるで、恋人同士のようにだった。

二人が帰ってこないのも、心配になった仁美の父親は店の外に出て、辺りを見回した。

すると、道路の向こう側でカップルがイチャついているのが見えた。

「まったく、最近の若いもんときたら、恥を知らんのかねえ。」

そう思つて、大声でアベックをからかった。

「おい！おめえら、そんなところでイチヤイチヤしてないで、早く家に帰えんな！」

すると、そのアベックは驚いて振り向き、こつちを向いた。

店の明かりに照らされた二人の顔を見て仁美の父親はギョツとした。アベックだと思っていた二人は、仁美と恭子だった。

その瞬間、仁美が駆け寄って来て、ほつぺたに平手を叩きつけた。

「何考えてんの？このくそおやじ！」

仁美はそのまま、雪も払わずに店の中へ入っていった。

「恭子、何してるの？早くいくわよ！」

恭子は、赤い手形がついたマスターの顔をしみじみと眺めながら頭を下げた。

「お世話になります。」

ほつぺたを押えて、ボーっとしていたマスターが我にかえって押えていない方の手を差し出し、恭子に応えた。

「なーに、いいってことよ！」

二人が二階の座敷へつくと、当然ながら、悠斗と拓はすでに席についていた。

「遅れちゃって、ごめんなさい。」

二人が気まずそうに謝ると、拓と悠斗は目を見合わせて、クラツカ―を鳴らした。

「メリークリスマス！」

クラツカーの細い紙テープと小さな色紙の切れ端を頭から受け止めた恭子と仁美に拓と悠斗は満面の笑みを浮かべて迎えてくれた。

恭子は、嬉しくて、目が潤むのを感じて、涙がこぼれ落ちないように紙テープを拭うふりをして眼を拭いた。

「メリークリスマス。」

久しぶりに会った拓は、一段と男らしくなったように思えた。

4人の関係

11・4人の関係

年の瀬独特の雰囲気は、クリスマスのそれとはまた違った面持ちがある。

恭子はどちらかというと、年の瀬のワサワサした感じが好きだった。

12月29日。

この日から、父親の孝之は年末年始休暇に入っていた。昼食を終えると、家族揃って、近所の商店街へ買出しに出掛けた。駅前のショッピングモールには、なんでも揃う、大きなスーパーもあるのだが、お正月の買出しは、やっぱり地元の商店街と決めている。

恭子たちの住むマンションから“ばれいしょ”の前を通って路地を右へ曲がると、商店街のほぼ真ん中あたりに出てくる。ここで、二手に分かれて買い物をする。

恭子と母親の早紀は生鮮食品などを取り扱う商店が集まっている右手に、父親の孝之と弟の浩人は雑貨屋や乾物屋等がある左手の方へ買い出しに行く。

「じゃあ、後でね。」

恭子は孝之と浩人にそう言って手を振った。

「お姉ちゃん達、今日は早く戻ってきてね。」

浩人が恭子たちに釘をさした。

毎年、買い物が終わると、この路地の向かい側にあるフルーッパラーで待ち合わせをすることになっている。

浩人と孝之は、いつも先に買い物を追えて、かなり待つことになる。今年は夕方から、浩人が大好きなアニメの特番があるので、早く帰

りたい：出来れば、今年は留守番をしていた方が良かった：それが浩人の本音だった。

「分かった、分かった。分かったから早く行きな。」

孝幸と浩人が担当するのは、大掃除に使い道具や洗剤と年越しそばや雑煮の材料だ。

最初に米屋によって、伸し餅を切っておいてくれるように頼んでから、乾物屋に入った。

そこで、だしを取るための昆布や鰹節、煮干しなどを買った。

それから雑貨屋で洗剤や化学雑巾、ゴミ袋、軍手、そして、しめ飾りなどを買う。

浩人は進んで、買い物袋を持った。

米屋の戻る前に、おもちゃ屋に寄る。

お年玉用のぼち袋を選ぶ。

「お父さん、これがいい！」

浩人が選んだぼち袋は、今日、帰ってから見る予定のアニメのキャラクターのものだった。

「OK！ 恭子はどれがいいだろうか……」

悩んだあげく、キャラクターものではなく、お札を折らずに入れられる梅の花をデザインしたものに決めた。

「ねえ、お父さん、今何時？」

孝幸は腕時計に目をやった。

「2時40分だ。」

浩人が見たいアニメの特番は4時からだ。

まだ充分時間がある。

孝幸と浩人の買い物は、米屋でお飾り用の餅と切って貰った餅を受け取って、フルーツパーラーの隣のそば屋に年越し用のそばを予約するだけだった。

恭子と先は、商店街の一番奥まで歩きながら、野菜や肉などの値

段をチェックしていった。

八百屋や肉屋、魚屋はこの商店街の中だけでも何件かある。品物によつては、店を変えて買った方が安い場合があるので、いつもそうしている。

まず、商店街の奥の八百屋で、青菜系の野菜を買った。

それから肉屋で、鶏肉を買い、二件目の八百屋では漬物用の白菜や煮物に使う材料を調達した。

魚屋では刺身を数種類購入し、酢蛸や切り身は、また違う魚屋で買った。

そんな感じで、恭子と早紀は商店街を3往復位してから予定の買い物を終えた。

二人で両手にいっぱい買い物袋をぶら下げて、待ち合わせ場所のフルーツパーラーに到着すると、浩人がっこりと二人を迎えてくれた。

「今日は早かったね。」

店の壁に掛けられている時計を見ると3時25分だった。

孝幸と浩人は既に、パフェを食べ終わっていた。

「浩人が早く帰りたいみたいだから、荷物持って先に帰るよ。お前たちはゆっくりしてくるといい。」

孝幸がそう言うのと、浩人はそわそわして、恭子たちが買ってきた買い物袋を担ぎ始めた。

先は、そんな浩人の姿を見てクスツと笑い、頷いた。

「おそばはもう頼んだの？」

「いや、まだだ。」

「じゃあ、それは私頼んでおくわ。」

早紀はそう言つて、既に店の出口に向かっている浩人を見た。

「浩人、大丈夫？重かったら少し置いて行きなさい。」

「大丈夫！」

浩人は振り返らずにそう答えると、店のドアを開けて外にでていっ

た。

「じゃあな！」

孝幸は二人に手を振って、浩人の後を追った。

「おい、お父さんがもう少し持ってやるよ。」

「いいよ。」

一瞬、店の外からそんなやり取りが聞こえてきたが、すぐに静かになった。

二人は、顔を見合わせてクスツと笑った。

ウェイターが水の入ったグラスを持って注文を取りに来たので、恭子はメニューを広げた。

「うん…」

12月30日。

この日は朝から大掃除に取りかかった。

孝幸は照明器具やエアコンの上など、高い場所と窓や網戸などの危険を伴う場所を担当した。

早紀は台所を中心に水回りを担当する。

恭子と浩人は自分たちに部屋と、浩人が風呂場、恭子は玄関廻り。それぞれの分担が終わると、居間をみんなで掃除してからお供えのお餅を飾って廻った。

最後に、玄関にしめ飾りをかけて、大掃除が終了した。

12月31日。

朝、台所に立っているのは父親の孝幸だった。

年越しそば用のだしを取っている。

昆布、煮干し、鰹節、それぞれ別の容器でだしを取っている。

水につけて、夕方まで、じっくりだしを取るのだ。

夕方になると3種類のだしを合わせながら味付けをしていくのだ。

孝幸が買ってくる昆布は、羅臼昆布なので、昆布自体からかなりいい味がでる。

孝幸は三が日に食べる雑煮の分も見込んで、大鍋一杯のだしを創った。

ついでに、この日の食事は、朝・昼・晩と孝幸が作る。

早紀は、昨日の疲れがでたのか、朝から微熱があり、ゆっくり過ごすことにした。

起きていられないほどではなかったが、孝幸が食事の支度をしてくれるというので、疲れを癒すことに専念することにした。

浩人は、午前中、ジュニアスターズの練習納めに参加していた。

恭子は陸上部の練習がなかったので、浩人の練習納めに一緒にいって行った。

朝から、いい天気で、日なたにでていると、ぽかぽか気持ちがいい陽気だった。

第三小の校庭には、クラブのメンバーのほとんどが既に来ていて、準備運動をしていた。

恭子は監督の寺西のそばに行くと、軽く会釈をして、横に立った。

「おはようございます。いいお天気で良かったですね。」

「おお、おはよう！ 陸上部の練習はもう終わりなのかい？」

「はい、冬休みの間の練習は休みなんです。」

「そうか、まあ、たまにはゆっくりしないと、体が持たないからな。」

「

「いえ、いえ、そんなことはないんですけど、コーチが帰京しているもので。」

「へえ、つ、野村先生の田舎ってどこなの？」

「たしか、九州の方だって言っていましたけど。」

「そうか、じゃあ、辛子明太子だなあ。」

「何が辛子明太子ですか？」

後から悠斗が急に声をかけたので、寺西は一瞬、ビクツと体をふるわせて振り向いた。

「いや、その…野村先生の田舎が九州だって言うから…」

「九州は九州だけど、辛子明太子は福岡でしょう？野村先生は鹿児島県ですから明太子はないと思いますよ。」

「そ、そうか…」

悠斗は、チラッと恭子を見てウィンクした。

「拓が帰ってきてるから、練習が終わった後会った。一緒に来るかいい？」

「いいんですか？おじゃましても？」

「ああ、その方がきつと楽しいから。そうそう、仁美ちゃんも呼んだらどう？」

「そうですね。じゃあ、そうします。」

「うん！今日は、ずっと練習見ていくのかい？」

「ええ、そのつもりです。」

「じゃあ、練習の後、一緒に食事会にも顔を出すかい？」

「いえ、一度家に帰ります。」

「そうか、じゃあ、適当にやってて。」

「はい、ありがとうございます。」

子供たちの方へ走っていく悠斗を眺めながら、恭子は携帯電話を取り出した。

メールが1件入っていた。

「今夜、初詣に行かないかい？」

恭子はすぐに返信した。

「午後、悠斗先輩と会ったんでしょう？仁美とご一緒させていただくことになりましたが大丈夫ですか？」

すると、今度は電話の着信音がなった。

拓からだった。

「恭子ちゃん？悪い。メールってどうも面倒くさくて。それより今、第三小に来てるのかい？」

「はい、弟の練習納めなんで見物に来てます。」

「そうか、じゃあ、俺も今からそっちに行くよ。」

そう言うと拓は電話を切った。

子供たちがいなくなった三浦家では、久しぶりに夫婦水入らずでくつろいでいた。

早紀は、だいぶ具合が良くなってきたようで、自分で紅茶を入れて居間に入ってきた。

孝幸はソファをずれて早紀が座れる場所を開けてやった。

「具合はどうだ？」

そう言つて孝幸は、早紀の額に手を当てて、熱が下がったかどうか確かめた。

「うん！もう、熱はなさそうだな。だけど、油断は禁物だ。今日は夕方までゆっくりしているといい。なんと言つても、君がダウンしてしまつたら、お世ちをこしらえる人がいなくなってしまうからな。」

「まあ、恭子がいるわ。」

「ああ、でも、まだまださ。」

三浦家では、毎年、大晦日の夜、母親の早紀がお世ち料理の支度をする。

恭子も中学生になつてから、早紀を手伝うようになった。

とはいえ、まだまだお手伝いレベルだ。

“ばれいしょ”では昨日30日で年内の営業を終えているが、マスターと女将はこの日も忙しそうに料理の下拵えをしている。

板前の徳次郎は、今日から休みを取つて帰京しているので、普段は調理をしない女将も一緒にやっている。

大晦日の夜は、常連客だけを集めてカウントダウンパーティーをやるのが恒例となっているからだ。

「おい、今日は悠斗と拓も来るんだよな？」

「来ると言つても、ちよつと顔を出す程度だよ。それに、まだ二人は未成年だからね。」

「分かつてるよ。だから聞いたんだよ。二人が来るなら仁美もパー

ティーにでるだろう。そしたら、三浦ん家の嬢ちゃんも来るだろう？」

「まあ、そうだねえ。少なくとも、仁美は顔を出すと言っていたわよ。」

「そしたら、子供たちが食えるもんも何か用意しなきゃならないだろう？」

「そんなに気にすることないよ。子供と言ったって、赤ん坊じゃないんだから、そこそのもんは食べられるんだから！それに、もう徳さんを休ませてるんだから、手が廻らないよ。」

「そうか？それならいいんだが……」

仁美の父親でもあるマスターは、一人娘の仁美が可愛くてしかないので、俗に言う、“親ばか”に輪をかけたように仁美のことになると張り切ってしまう。

当の仁美も、どちらかといえば、父親っ子で、そのことに対してまんざらではない様子なので、さらに増長しているのだ。

母親の女将は、ある程度、放任主義なので、父親の親ばかりには、『やれやれ』というように、半ば諦めている。

そんな二人を後目に、仁美が調理場に顔を出した。

「あれっ？お母さん、料理してる。珍しいね。」

「何言うんだい？ これでも昔はちゃんと食事の支度だってやってたんだからね！」

野々村家では、“ばれいしょ”を始めたときに、雇った住み込みの板前、吉田徳次郎が三食の食事の支度をするようになったので、女将の久仁子はそれ以来、料理をすることが少なくなったのだ。

「まあ、そんなことはどうでもいいや。ちょっと出掛けてくる。お昼ご飯はどうなるか分からないから、後で電話するね。」

「ああ、分かったよ。気を付けてお行きよ。」

仁美は、母親の久仁子にウインクすると、奥にいる父親の勝晴に手を振って、出ていった。

仁美が三小に來ると、朝礼台の上に並んで座っている恭子と拓の姿があつた。

「まったく、あの二人ほどお似合いのカップルは、この辺ではお目にかかれないわね！」

そう呟きながら仁美は二人に近づいた。

電話を切つてから拓は、ウインドブレーカーを手に取ると、外へ跳びだし、走りながら羽織つた。

拓の家は第五小学校の学区区域になるので、第三小学校までは普通に歩いて20分ほどかかった。

しかし、拓はジョギング程度のペースで走り、10分とかからずに第三小のグラウンドに到着した。

グラウンドに着いた拓は辺りを見回すと、すぐに、朝礼台の上に座っている恭子を見つけた。

白いウインドブレーカーを羽織つて、お馴染みの阪神タイガースの野球帽を被っている。

「やあ、相変わらずだね。」

拓は、朝礼台の前に回り込み、恭子が被っていた野球帽を手にとった。

「先輩！」

恭子はちよつと驚いたが、すぐに帽子を取り返し、言い返した。

「先輩こそ、相変わらずですね。電話を切つてから、まだ10分も経っていませんよ。それなのに、息も乱さずにいられるなんてさすがオリンピック代表ですね。」

拓は、朝礼台に登つて、恭子の隣に座つた。

「オリンピックか！ まだ、代表になつたわけじゃないけど、もし、行けたら一緒に来てくれるか？」

恭子はその言葉を聞いて、少しドキツとしたが、素直な気持ちを正直に伝えた。

「うん！ というか、絶対に連れて行ってくださいね。出来れば、次

の北京へ！」

拓は、正面を向いたまま、少し考えていたが、恭子の顔を覗き込むようにして、右手の小指を差し出した。

恭子も、同じように小指を出して拓の小指に絡ませた。

「指切げんまん嘘ついたら針千本飲ます。指切った。」

ちょうどそのとき、近づいてくる誰かの気配に気が付いた。振り向くと、仁美が腕組みをして仁王立ちしていた。

朝9時から始まったジュニアスターズの練習納めは、二時間の通常メニューを終えると、グランドの整備に取り掛かった。

悠斗は楽しそうに談笑している朝礼台の三人がずっと気になっていた。

普通なら、あっという間に終わってしまう練習が、今日はやけに長く感じられた。

グランド整備が終わって、ようやく監督の寺西が子供達に集合するように号令を掛けた。

寺西は、休みの間の注意事項を話した後、解散の挨拶を悠斗に依頼した。

「…おい！悠斗！」

早く拓たちと合流したかった悠斗は寺西の話が耳に入っていなかった。

寺西に大声を出されて我に返ると、子供たちがクスクス笑っていた。

「う・うん… えーと…」

悠斗はチラッと寺西の顔を見た。

おおかたの事情を察知していた寺西は、悠斗を睨み付けて、ポンと軽く頭を叩いた。

「最後の締めをやれ！」

「あ！はい。」

最近是一年中休みなしで営業している店が増えてきた。

おかげで、大晦日のこの時期でも、時間をつぶすのに不自由しない。駅前のショッピングモールでは、今年最後の大売り出しと銘打った商戦が繰り広げられている。明日になれば、初売りと銘打って今年最初の商戦が繰り広げられるのだ。

恭子たちは、ショッピングモールの中にある、ファミリーレストランに来ていた。

ここで、ジュニアスターズの食事が開催されていたからだ。

恭子も、結局、家には戻らず、ジュニアスターズの食事に参加した。

会費は、拓が仁美の分も含わせて3人分出した。

ちよつと、昼時で込み合っていたが、ジュニアスターズは店の半分以上を貸し切っていた。

食事のメニューは決められていたため、好きなものを選ぶとは出来なかったが、恭子と仁美は大好きなハンバーガーとオニオンリングフライが出たので、大喜びだった。

食事が終了した後も、4人はそこに居残って、お茶を楽しみながら雑談に花を咲かせた。

「そう言えば、今夜は仁美ちゃん家でカウントダウンパーティーやるんだろっ？」

悠斗が切り出すと、仁美が悠斗と拓に参加することを確認した。

「そう、そう！二人とも来るんでしょっ？」

「ああ、ちよつと顔を出すくらいだけだね。」

拓がそう答えると、仁美は恭子も誘ってみた。

「ねえ、恭子もおいでよ。」

「うん… うちはお父さんがおそばを作るから、無理かもね。」

「えっ？だって、お店のリストに恭子ん家のお父さんの名前ものつてたよ。」

「じゃあ、お父さんはおそばを食べてから行くのね。」

「それなら、お父さんと一緒に来ればいいじゃない。」

「でも…遅くなっちゃうし…」

「その、おそばって何時頃食べるの？」

「10時頃だと思うけど。」

恭子は、拓に初詣へ行こうと誘われていたので、遅い時間まで父親と一緒に居たくなかったのだ。

恭子が困っているようだったので、拓が助け舟を出した。

「じゃあ、こうしたらどうだい？ パーティーは7時からだろう？」

だったら、逆に、早い時間に来て、おそばを食べる頃に家に帰ればいいんじゃないか？」

「そうだ！それがいい！」

拓の提案に仁美と悠斗が賛成した。

「ねえ、それならいいでしょう。」

仁美が強引に誘うので、半ば、押し切られるような形で恭子は承諾した。

家に帰ると父親の孝之が夕食の支度をしていた。

三浦家では、毎年、大晦日には夜に年越しそばを食べるので、少し早い時間に軽めの夕食を取る。

5時過ぎには、食事を終えたので、恭子は仁美との約束のことを両親に話した。

孝之も先も、拓や悠斗と一緒になら安心だと、承諾してくれた。

恭子は食事の後、風呂に入って“ばれいしょ”へ出かけた。

店についたのは7時半過ぎだった。

既に、店内は盛り上がっていた。

1階の奥のテーブル席で仁美が手を振って合図をしている。

この席のテーブルには鉄板が備え付けられている。

マスターは、結局、仁美たちのために、もんじゃ焼きが出来るように特別メニューを用意してくれたのだ。

パーティーは、「町会の青少年部部长で孝之の上司でもある高橋が仕切っていた。

拓と悠斗は、ちよくちよく知り合いに勺をしたり、してなかなかテーブルに落ち着けなかった。

メンバーは入れ替わり立ち代り常に店の中は満員に近かった。

拓と悠斗が一通り勺をし終えた頃を見計らって、マスターがいつもの二階の座敷を用意してくれた。

4人は速やかにそっちへ移動した。

すかさず、女将が上がってきて、冷蔵庫の鍵を置いていった。

「今日は、勝ってに好きなもの飲んでおくれ。食べたいものがあつたら、とうちゃんに言いな。」

やっと静かになった。

拓は、両手を高く上げて伸びをした。

「いやゝあ、やっぱ、地元は良いなあ！」

「さすがに地元のヒーローは違うわね。」

仁美が、感心して拓にウーロン茶を注いだ。

「まあ、陸上競技なんて、マイナーなスポーツだから、地元でもない限り、変装もせずに居られるのはあらがたいけどね。」

そんな話で盛り上がっているところで、恭子の携帯がなった。

「もしもし… うん、分かった。」

電話を切ると恭子はそろそろ帰ると告げた。

「おそばの時間？」

仁美が聞く。

「そう。」

恭子はそう言って席を立った。

すると、拓も席を立ちこう言った。

「送っていくよ。」

「でも、せっかく集まったのに、みんなに悪いわ。」

恭子が遠慮してそう言つと、仁美と悠斗が声を揃えて、こう答えた。
「私たち（俺たち）のことは気にしなくてもいいよ。」

それを聞いた恭子は、一瞬きょんとしたが、拓がウインクしながらこう言ったのでピンときた。

「そういうことだから、二人っきりにしてやるうぜ。」

そして、拓と恭子は、裏口からそっと店を出て行った。

二つの決意

12・二つの決意

恭子を送ってきた拓は、恭子の両親と一緒にそばを食べていかないかと引き止められた。

拓はそういう事態を予測していたので、素直に従った。

恭子は拓を居間へ案内すると、ソファを指して座るように告げた。ソファには先客がいて、テレビゲームをしていた。

「やあ、こんにちは。優子ちゃんに浩人くん。」

声が出た方を振り向いた優子は、拓を見て驚き、ゲームのコントローラーを手放した。

浩人はすかさず、優子が動かしていたキャラクターをやっつけた。

「ちよつと、浩人！」

「よそ見るほうが悪いんだ。拓さんこんにちは。」

そう言つて拓に手を振り、ゲームの電源切った。

テレビの画面が紅白歌合戦に変わった。

恭子は台所で孝幸が年越しそばを作るのを見ていた。

「お父さんつて、こついうの、すごく凝るよね。普通につゆのもととか使えばいいのに。」

「お父さんだつて、樂はしたいけど、このそばだけは特別なんだ・・」

孝幸はそばの具に使うかまぼこを切ながら話し始めた。

孝幸は今の会社に就職したばかりの頃、工事現場で人夫に混じつて土方まがいの力仕事をさせられることも少なくなかった。

そんな頃、現場の先輩に連れて行ってもらった新宿のパブで偶然、前の席に座っていたシヨートカットの女の子を見て一目惚れしてしまった。

彼女は大学の友達と二人で来ていた。

一緒に来たお調子者の先輩は抜け目なく彼女たちに話し掛けた。

先輩の目当ては彼女の隣にいた髪の長い女の子だったらしく、しつこく電話番号を聞き出そうとしていた。

しかし、その子は孝幸のことが気になるようで、二人の電話番号を教えてくれるならOKだと申し出た。

孝幸が住んでいたアパートには電話がなかったので、孝幸はアパートの住所を教えた。

先輩は積極的に彼女にアプローチして何度かデートを重ね、付き合うようになった。

孝幸は、もう一人の女の子の電話番号を教えてもらうべきだったと後悔していた。

しばらくたってから孝幸宛に一通の手紙が届いた。

差出人は“沢村早紀”。

部屋に戻った孝幸は聞き覚えのない名前になにかのセールスかと疑いながらも、女性からの手紙は気になったので、すぐに封をきって手紙を読み始めた。

それはセールスでも不幸の手紙でもなく、純粋なラブレターだった。三浦孝幸様、私のことを覚えていらっしゃるでしょうか・先日友達と二人で新宿のパブでお会いしました。今、そのとき一緒だったあなたの先輩と私の友達がお付き合いをしています。私はあのとき以来あなたのことが気になって仕方なかったのですが、友達もあなたのことが気に入っていたようなので言い出せなかったし、連絡をする術も知りませんでした。ところが幸運なことに、私の友達はあなたの先輩とお付き合いをするようになってあなたへの関心がな

くなつたようです。あつ、すみません。もしかして、あなたが彼女のことを想っていたとしたら申し訳ありません。でも勘違いしないでください。私は決してあなたを中傷しようと思つてこの手紙を書いたわけではありません。実は、あの時初めてお会いしたときからあなたのことが気になつて仕方ありませんでした。勇気を出して友達にあなたの住所を教えてもらい、この手紙を書きました。もし、よろしければ一度会つていただけないでしょうか……」

孝幸は、天にも昇る気分になつた。

手紙を握り締めて、近くの電話ボックスに走ると、手紙に書かれていた番号をダイヤルした。

受話器の向こうから聞こえてきたのは聞き覚えのある澄んだ声だつた。

こうして二人が付き合うようになって初めての大晦日を迎えた。二人とも地方出身で、早紀は親戚の家に下宿していたが孝幸は一人暮らしだったため、いつも自炊をしていた。

その日、早紀は孝之のアパートで過ごすことになっていたのだが、貧乏暮らしの孝幸の部屋には早紀を喜ばせるようなものは何一つなかった。

しかし、早紀はそんなことをまったく気にしていなかった。

朝から二人で部屋の大掃除をし、昼はありあわせの材料で早紀が作った料理を二人で食べた。

大掃除が終わつた後、孝幸は年越しそばのだしを取り始めた。

「へー！いつも、そうやってだしを取るの？」

「ああ、年越しそばだけは、いつもお袋がこうやって作ってくれたんだ。自分でやるのは初めてだからうまく出来るか分からないけど、付き合つてみる勇氣ある？」

「ええ、もちろん！楽しみだわ。」

夕食になると近くの居酒屋で軽く食べながら酒を飲んだ。九時前になると二人は部屋に戻つて紅白歌合戦を見た。

孝幸は白組を、早紀は赤組を応援しながら、他愛のない、しかし、二人にとってはかけがえのない時間を過ごした。

孝幸は赤組の歌手が歌っている合間に年越しそばの支度をした。歌合戦は赤組の勝利で幕を閉じ、孝幸は心から悔しかった。

そんな孝幸が可笑しくて先はクスツと笑った。

「さて、君の勇気が本物かどうか試す時が来たよ。」

そう言つて、孝幸は立ち上がり、台所でそばを用意してきた。

かまぼこと天カスだけが入ったそばは、シンプルではあったが、羅臼昆布のいい香りがしていた。

早紀は両手でどんぶりを抱えると、つゆを一口すすった。

「おいしい！こんなに美味しいおつゆ初めて！」

「本当？」

二人は一言も喋らずにそばを食べた。

テレビの画面には芝増上寺の除夜の鐘が鳴らされている映像が流れていた。

その夜、孝幸は、初めて“この人とあったかい家庭を築きたい”そう想った。

恭子は、孝幸の話を聞いてなぜか感動した。

そういえば、両親が付き合うようになったきつかけなど、聞いた事がなかったし、聞きたいとも思っていなかったから意外な事実心に心を打たれた。

「へー！そんなことがあったんだ。だから年越しそばだけはお父さんが作るのね。」

孝幸は、ウインクして恭子に微笑んだ。

「さあ、できたぞ！みんなのところへ運んでくれよ。」

恭子が年越しそばを運んでくると、優子と浩人はゲーム機を片付け、テーブルを開けた。

普段の食事は食堂で取るのだが、この年越しそばだけはテレビのある居間で紅白歌合戦を見ながら食べるのが三浦家の慣わしなのだ。

「へー！美味そうだなあ。」

拓は、初めてみる三浦家の年越しそばを手にとると、立ち上る湯気を顔で受けながらつゆの香りを嗅いだ。

そんな拓に向かって浩人が叫んだ。

「拓さん、お父さんのおそばは長寿庵のそばより美味しいんだからね！」

「うん、この香りはすごく食欲をそそるね。」

最後に自分のそばを持ってきてソファに座った孝幸は、全員にそばが行き届いているのを確認して、箸を持って手を合わせ感謝の言葉を唱えた。

「それでは、今年も家族全員無事に過ごすことが出来た幸せに感謝し、来年も一年間無事に暮らしていけるように祈っていただきますよう。では、いただきます。」

そして、孝幸に続いて家族も全員一斉に「いただきます。」そう唱えてそばを食べ始めた。

拓の父親は出張で家を空けることが多かったので、家族揃って食事をするのがあまりなかったので、三浦家のこんな風景がなんだかとても暖かく感じた。

そんなことを思っていると、浩人が早速問い掛けてきた。

「ねっ！美味しいでしょう？」

拓はどんぶりを抱えると、つゆを一口すすった。

「うん！これは美味い。この関西風の味付けはこの辺ではあまりお目にかかれませんか。」

それを聞いた孝幸は嬉しそうに微笑んで早紀の方を見た。

早紀も満足そうに笑みを浮かべて頷いている。

そんな中、優子がボソツと拓に話しかけた。

「ねえ、拓さん？拓さんはお姉ちゃんと結婚するの？」

突然の優子の質問に、拓より先に恭子が反応し、危うくそばを喉に

つかえそうになった。

「優子、いきなり何てこと聞くの？」

恭子は慌てて、話題を変えようとして優子を戒めるように見た。そんな二人をよそに拓は、にっこり笑いながら、こう答えた。

「そうだね、こんな綺麗なお嬢さんがお嫁さんに来てくれたらどんな男の人だって嬉しいだろうね。」

拓の予想外の答えに、周りの全員が一瞬動きを止めて拓のほうを見た。

当の拓は、まるで、何もなかったかのようにそばをすすり始めた。そして、みんなの視線に気がつく、他人事のように言った。

「あれっ？どうしたんですか？まだ食べちゃいけないかったですか？」すると、孝幸は目に涙を潤ませて、拓に向かってこう言った。

「西崎君、よく言ってくれた！これで俺も安心して成仏できるよ。」

いや、その前にちゃんと恭子の花嫁姿を見ないと・・・」孝幸のその言葉を聞いて、拓は孝幸が勘違いしているのだと思って言葉を付け加えようとしたが、もはや後の祭りだった。

優子が、自分の花嫁姿は見てくれないのかと孝幸にくっついてかかったのだ。

孝幸は慌ててそんなことはないと言解したが、優子の機嫌は直りそうになかった。

見かねた早紀は、孝幸を睨みつけ、優子の肩をやさしく抱いて慰めた。

「大丈夫。お父さんはあなた達みんなが幸せになってくれることを何よりもいちばんに願っているのよ。だから、ちゃんと優子の花嫁姿だっけ見てくれるわ。」

孝幸はバツの悪そうな顔をしながらも、頷いて優子に謝った。

恭子は、自分の話題が思わぬ方向へ変わってしまったことにホッとした。

そばを食べ終わると、恭子は両親に拓と初詣に行きたいと話して

みた。

「ねえ？お父さん、お母さん、今年は拓さんと初詣に行ってもいい？」

「ああ、いいとも。紅白が終わったらみんなで出かけよう。」

孝幸は即答した。

しかし、恭子は拓と二人だけで出かけたいと言いたかったのだが、孝幸には伝わらなかった。

「えっと・・・そうじゃなくて・・・」

早紀は恭子の気持ちが分かっていた。

「お父さん、二人で先に行かせたあげたらどうかしら？紅白が終わるころだと神社も混んでくるわ。」

早紀にそう言われると孝幸は驚いて早紀と恭子を見た。

恭子は、恥ずかしそうにモジモジしていたが、早紀は微笑んでさらに言葉を続けた。

「恭子も、もう子供じゃないんだし、西崎さんが一緒なら安心だね。」

孝幸は怪訝な表情を浮かべながらも、渋々承諾した。

「西崎君、それじゃあ頼んだよ。」

「分かりました。お任せ下さい。参拝が終わったら向こうでお待ちしてますから向こうで一緒に甘酒でも飲みましょう。」

そう言つて、コートを手に取ると立ち上がり、孝幸に頭を下げると、既に恭子はスタジアムジャンパーを羽織り、マフラーを首に巻きつけ、タイガースの野球帽を手にしていた。

「拓さん、早く。」

そう言つて、拓を手招きした。

部屋を出る時、拓はもう一度孝幸に頭を下げた。

孝幸はテレビの画面に目を向けたまま片手をあげて応えた。

恭子は見送りに玄関まで出てきた早紀にウィンクして両手を合わせた。

「お母さん、ありがと。恩に着るわ。」

早紀は恭子のほつぺたに手を当てて「寒いからね。」と言だけ言った。

そして、改めて拓に恭子のことをお願いした。

外に出ると、さつきより気温が下がっているように感じた。

日当たりのよくない路地には、クリスマスイブの日に降った雪がまだ残っている。

恭子は手を合わせてこすりながら拓の方を見た。

「手袋忘れちゃった。拓さんのポケット借りてもいい？」

すると、拓は自分の左手がつつまれたコートのポケットにすき間をつくってくれた。

恭子はそのわずかなすき間に自分の右手を滑り込ませた。

「あったかい！」

恭子はポケットの中で拓の手を握り締めた。

拓はもう片方のポケットから手袋を取り出すと、片方を恭子にわたした。

「そっちの手に付けるといい。」

そう言つて、拓は残った方を口にくわえて、右手を差し込んだ。

恭子も同じように手袋を口にくわえると、余った左手を手袋に突っ込んだ。

拓の手袋は言うまでもなく大きかった。

恭子は余った指先の部分をぶらぶらさせながら笑った。

「大きな手袋・・・でもあったかい。」

「そりやそうさ！ずっとポケットの中であつたためていたんだから。」

神社の近くまで来ると、松明の火やちょうちんに照らされた灯りがほんのりと見えてきた。

初詣に来た人の列が既に鳥居の外から神社の廻りを1周していた。恭子と拓は鳥居の前を通り過ぎると、列の最後尾へ向かって歩いた途中で二人を知る町会の面々に合うと、「よっ！未来のオリンピック選手」とか「お似合いだよ！」などとからかわれた。本来ならうざつたいはずの言葉が、なぜかこの時は心地よかった。

列の最後尾が近付いてきたとき、悠斗と仁美が手を振っているのが見えた。

「恭子遅いわよ。」

悠斗と仁美は二人で1本のマフラーを首に巻きつけていた。

仁美は背が高いので悠斗とのバランスもちょうどいい。

「こうして見てると、二人は恋人同士みたいだわ。」

「あら、あなた達こそお似合いよ。」

恭子は今まで散々からかわれてきたが、仁美にこんな風に改めて言われると、急に恥ずかしくなってきた。

「よう！大将。三浦家の年越しそばはどうだった？」

「拔群だった。」

「そうか、じゃあ、来年は俺も食に行きたいもんだなあ。」

「先輩、ダメですよ。そばならウチで食べて下さい。」

そう言つて仁美が悠斗の腕をつねった。

「痛いなあ！分かったからもうやめてくれよ。」

そうこうしているうちに、境内の方からカウントダウンの声が聞こえてきた。

4人も、時計を見ながらカウントダウンを始めた。

「10・9・8・・・3・2・1！」

「明けましておめでとうございます。」

4人をはじめ、そこらじゅうでおめでとうの声が聞こえてきた。

それと同時に、列も少しずつ動き始めた。

恭子達の後には、もう最後尾がどこら辺にあるのか分からないくら

いの列が続いていた。

列が進み始めて20分ほどしてから、孝幸達がやってきた。

“ばれいしょ”のマスターと女将、高橋も一緒だ。

優子と浩人が4人の方へ走り寄ってきて列に加わろうとした。

すると、孝幸が「ちゃんと並ばないとだめだぞ。」と怒鳴った。

しかし、後ろに並んでいる人たちは、「いいから入れてやれ。」と気を使ってくれた。

「すみません、どうもありがとうございます。」

孝幸も一緒に加わろうとすると、「大人はダメだよ。後ろに並びな」と言われ、すぐごと早紀や高橋達と一緒に列の後ろへ歩いていった。

「あなたったら本当に大人げないんだから・・・」

「まったく！何のために二人を先に行かせたのか分かってないよ。うだな。」

恭子が振り返ると、孝幸が早紀や高橋にたしなめられている声が聞こえた。来た。

列が動き始めて40分。

ようやく恭子達に参拝の順番が回ってきた。

参拝は4人まで並んで出来る。

恭子達は優子と浩人を自分達ん前においてその後ろに4人並んで参拝した。

浩人はさい銭を投げ入れると、パツと手を合わせて、すぐに鈴のひもをつかんだ。

ガラガラ、ガラガラ・・・4回鐘を鳴らすと、先に一人で小走りに階段を降りていった。

恭子は手を合わせて、全国大会への出場を誓った。

参拝を終えて拓の方を見ると、拓はまだ目を閉じて手を合わせたまままだた。

しばらく見ていたが、後が詰まっていたので仁美たちと一緒に先に降りた。

階段を降りると、既に社務所の前では、破魔矢を手にした浩人が手招きしている。

「今年は、ボクが選ぶ番だからね。」

浩人はそう言って優子をけん制した。

破魔矢は矢の色が赤と白の二種類ある。

浩人は赤、優子は白がいいと言って毎年ケンカになる。

そこで何年か前からは、交代で選ぶことにしているのだ。

そして今年は浩人が選ぶ番だった。

恭子は財布を出そうとジーンズの尻ポケットに手をつ込んだ瞬間、冷や汗が出てきた。

財布がない！

「浩人、ちよつと待ってて・・・」

そう言って、今歩いて来た道を引き返そうとした。

「お姉ちゃんどうしたの？早くお金ちょうだい。」

「ごめん、浩人、お姉ちゃん、お財布落としたみたい。」

「なんだって？そりや大変だ！」

悠斗は、とりあえず、浩人の破魔矢の代金は自分が払っておくからと言い、仁美と、優子と一緒に探すよう指示した。

拓は例の夢のことを考えながら、自分の決意を確かめていた。

そして、近い将来起こりうることに對して最善を尽くすと固く誓った。

目を開けて、歩き出そうとしたとき、財布が落ちているのに気がついた。

見覚えのある財布だった。

「これは・・・」

財布を拾うと、辺りを見回した。

恭子達の姿はすでになかった。

急いで階段を降りようとしたとき、辺りを伺うようにキョロキョロしながら戻ってくる恭子達の姿が見えた。

「恭子ちゃん！」

拓は手を振って恭子に合図すると、財布を掲げて見せた。

そして、恭子のもとへ降りていった。

社務所のそばにはいくつかの長椅子が並べられていて、甘酒が振る舞われている。

先に参拝を終えた恭子達は長椅子に座って甘酒を飲みながら孝幸達が来るのを待った。

優子と浩人は、さっき引いたばかりのおみくじをそばの木の枝に結んでいる。

「いいなあ、あ姉ちゃんは大吉で。」

「日ごろの行いがいいからよ。あんただって中吉なんだからいいじゃない。」

「でも、お正月のおみくじは大吉じゃなきゃ。僕、一回も大吉当たったことがないよ。」

そんな二人をよそに、恭子はじっとおみくじ見つめていた。

“凶”

「知ってるかい？」

拓が恭子のおみくじを覗きこんで言った。

「凶って箱の中にメという文字が入っているだろう？箱にはフタがないから芽が伸びて大きな木になることの暗示なんだってさ。考えようによっちゃあ、大吉よりもずっと縁起がいいもんなんだよ。」その話を聞いた仁美が自分のおみくじを差し出した。

「本当？それじゃあ、私って大ラッキー？」

仁美のおみくじは大凶だった。

「なんだよ、さっきまで落ち込んでいたのに現金なヤツだなあ。」悠斗がそう言うともんなは一斉に笑いだした。

恭子も笑って、甘酒が入った湯のみを両手で持って、冷たくなった手を温めた。

「やあ、お待たせ。」

ようやく参拝を終えた孝幸達が恭子達に合流した。

「みんな、今年最初の運だめしはどうだった？」

高橋が自慢げに自分のおみくじを差し出して見せた。

“大吉”だった。

孝幸は小吉、早紀は中吉、マスターは大吉、女将は大吉だった。

「なんだよ、“ばれいしょ”の親子は揃って大吉かよ。」

高橋が言つと、女将の久仁子もあきれたような顔をして言った。

「なにも、そんなところまで真似しなくてもいいだろうに・・・」
すると仁美は母親に反論した。

さつき、拓が言つたことをそのまま話して聞かせたのだ。

「へー！さすが俺の娘だ。なかなか良いことを言うじゃないか。」

脇で、恭子達はクスクス笑ってお互いの顔を見合わせた。

恭子達は家族と一緒に帰って行った。

それを見送ってから、拓と悠斗は二人で歩いていた。

「なあ、タイショウ、ずいぶん長く拝んでみたいだが何をお願いしてたんだい？」

悠斗は拓に尋ねた。

「内緒だ。」

「まあ、だいたい察しがつくさ。」

「ああ、そんなところだ。」

そして、二人が見上げた冬の空からは白い雪が舞い降りはじめた。

13・いざ、全国へ！

13・いざ、全国へ！

恭子は年が開けて、正月の3が日はどこへも出かけず家で過ごした。

4日には学校のグラウンドでランニングをはじめた。

新学期が始まる頃にはいつでも記録を更新できるような気がするほど充実した練習を消化することができた。

そして、あっという間に4月になり、恭子は3年になった。

恭子が廊下に掲示されたクラス分けの結果を見ると仁美が後ろから声をかけた。

「また同じだね。神様に感謝しなくちゃ！」

「そうね。仁美と同じクラスで本当によかったわ。三年間同じクラスでいられたのはきつと神様のおかげだね」

「それより、見て！担任」

「ええ、知ってる！野村先生」

「野村先生ったら、恭子にクビったけって感じだね」

「そうね！違う意味で、だけどね」

そんな話で盛り上がっていると、恭子は背後に人の気配を感じて振り向いた。

野村だった。

「それより、もっと凄いニュースがあるぞ。二組のメンバーをよく見てみるよ」

そう言われて恭子は二組のところを順番に見ていった。

「田中・・・高野台の田中美由紀？」

「そうだ。春休みの間に最近できたマンションに引っ越して来たんだと」

田中美由紀は去年の100m決勝で3位に入った選手だ。

「そう言えば、彼女も2年生だったわね。原姉妹が抜けたとはいえ、四中は選手層が厚いから彼女が来たのは大きいわ。これでリレーも期待できるじゃない」

仁美は恭子の手をとって飛び跳ねた。

ちよんどそこへ田中美由紀が現れた。

「三浦さん、同じチームで走れて光栄だわ」

そう言って田中美由紀は手をさしのべた。

こうして、恭子の中学生生活最後の1年は、学校も万全のサポート体制で、いよいよ全国へ行くための花道が設けられたのだ。

春の中体連陸上大会では、一中から恭子と美由紀が決勝に駒を進めた。

結果は言うまでもなく恭子の圧勝だった。

美由紀が2位に入り、一中がワン・ツーを決めた。

恭子走り幅跳びでも優勝し2冠を達成した。

恭子以外のメンバーが卒業していなくなった、100×4リレーでは第一走者の美由紀が貫録で先頭に立ったが、第二走者の横井直美よこい なおみと第三走者の宮下麻衣子みやした まいこは共に2年生で実力は他の学校のメンバーと比較しても見劣りしたが、懸命に頑張つて、僅差の3番手で恭子にバトンを渡した。

その時点で、野村は一中の優勝を確信した。

恭子は麻衣子からバトンを受け取ると、一気に大外を回って前の二人を抜き去った。

直線に入ると、その差は広がる一方だった。

「やったネ！」

表彰台の上で美由紀に握手を求められて恭子は笑顔で答えた。

そして、二人の2年生に労いのことをかけた。

「あなた達も頑張ったわね」

直美と麻衣子は首にかけられた金メダルを噛むポーズをしてVサインを返した。

「さあ、次は都大会だ。そして全国が待っているぞ」

野村は恭子達の肩に手を廻して涙目でそう言った。

都大会では、手始めに走り幅跳びで5m89を跳び優勝すると、100mでは中学記録の迫る12秒07で優勝し、全国の切符を手にした。

「よしっ！いいぞ！」

応援に駆けつけてきた孝幸と高橋がガッツポーズをとると、横で見ていた早紀は思わず吹き出してしまった。

「課長、夏休みは8月の末にして下さいね」

「当たり前だ！俺も四国に行くぞ」

今年の全日本中学陸上選手権は8月の末に四国の香川で開催されることになっていた。

美由紀も決勝まで進み、3位と健闘したが標準記録の12秒60にはわずかに届かない12秒65で全国行きの切符を逃した。

100×4リレーは残念ながら準決勝で敗退した。

2年の直美と麻衣子は自分たちが足を引っ張ったと泣き崩れたが恭子と美由紀は二人のおかげで都大会まで来ることができたのだと二人を称えた。

「先輩、来年は私たちだけでも決勝に行けるように一生懸命頑張って練習します」

涙ながらに、恭子達にそう訴える二人を見ると、自分も、もっと練習し根ければと言う気持ちになった。

「全中選手権は夏休み中だからみんなで応援に行くわね」

美由紀がそう言うと、直美と麻衣子も頷いた。

「仁美先輩に頼んで“ばれいしょ”でアルバイトをさせてもらいま

しょう！それで旅費を貯めなくっちゃ」

そんな二人を野村は睨みつけた。

「なにバカなこと言ってるんだ。中学生がバイトなんかできるわけないだろう！それに、今、一生懸命練習するといっただろう」

「そんな」

拓は国体に備えての合宿中で応援には行けなかったが悠斗からのメールで恭子の活躍を喜んだ。

「今年の全中選手権は確か四国の香川だったな・・・」

9月に開催される国体が兵庫で時行われるため、千葉県代表で参加する拓は他の競技に参加する東洋電機のメンバー達と会場の下見を兼ねて8月末には兵庫に行く予定になっていた。

「・・・どんぴしゃだ！」

野村に全日本陸上選手権の日程を確認してもらったら、1000mの決勝が行われる日に拓は兵庫にいる。

しかも、その日は下見を終えた後の自由行動になっていたのだ。

拓は早速、孝幸と連絡をとり、同じホテルを手配してもらった。

孝幸は快諾し、早紀や夏休み中の子供たち、高橋に“ばれいしょ”の一家、悠斗も同じホテルに泊まることを告げた。

「こりゃあ、まるで、町内会の旅行だな」

拓は、苦笑いしながら宿舎の窓を開けて空を眺めた。

ひとときわ輝く星が二つ、そして、その周りには無数の星が集まっているように見えた。

まるで、自分と恭子のように思えた。

夏休みに入ると、野村は東洋電機の陸上部と合同練習を申し入れ、グラウンド近くにある女子寮に恭子と美由紀を止めてもらっ手配を陸上部の池田監督に依頼した。

池田は快く引き受けてくれた。

「いきのいい子が来てくれるとウチの真田にもいい刺激になるってもんだ」

真田と言うのは、東洋電機陸上部の女子部員で恭子達と同じ短距離の選手である。

男子は拓や篠塚といった全国区のトップランナーを抱えていたが、女子は長距離に有望な選手が多く、短距離ではこの真田綾子（あなた あやこ）がリーダー的存在で、高校生の時に関東大会まで行って池田にスカウトされた。

実業団に入ってからには伸び悩んでいて池田も頭を悩ませていた。

綾子本人も陸上をやめようかと悩んでいるようだった。

野村の申し入れは、まさに“渡りに船”で、恭子達を指導すること
で綾子何かを掴んでくれるのではないかと期待していた。

合同練習を前日に控え、恭子は身の周りの物をバッグに詰め込んでいた。

そんな恭子に孝幸は手提げ袋を差し出し、激励した。

「いよいよ明日だね。しっかり練習してくるんだぞ。香川にはそのまま行くんだろう？」

「そうよ。だからしばらく会えないね」

「みんなで応援に行くからな。それにしても西崎君がいないのは残念だなあ」

「仕方ないわ。拓先輩は国体の会場の下見に行ってるんだもの」

恭子が中身を覗いた後の笑顔を見ると、Vサインをして出て行った。「じゃあな。ちよつくら、ばれいしょに行ってくる」

孝幸が差し出した手提げ袋の中には新しいシューズが入っていた。

恭子は早速そのシューズを履いてみた。

まるであつらえたように恭子の足にフィットする。

「お父さんったら夏のボーナスを全部それにつぎ込んだのよ。西崎

さんの靴を作ってくれている職人さんの所へ恭子のはきつぶした靴を持って行ってお願ひしたらしいわ」

恭子は孝幸がくれたシューズを抱きしめて心から感謝した。

“ばれいしょ”はこのところ連日の大盛況だった。

話題はもっぱら恭子のことだ。

町内会の連中はもちろん、常連の客は皆恭子のことを小学生の時から知っている。

孝幸が店に着くと、高橋がカウンターの奥から手を挙げて合図した。

孝幸は高橋の隣に腰かけると、生ビールを注文した。

「おそいぞ。主役がいないと始まらないじゃないか」

「すいません、ちよつと用事があつたもので・・・」

「まあいい、よし！それじゃあ始めるとするか」

青少年部の高橋の呼びかけで恭子の応援ツアーが企画され、父親である孝幸が団長に任命されたのだ。

ツアーには町内会の連中をはじめ、“ばれいしょ”の常連客や地元

出身の議院、金村雅夫もいた。

「なんだか知らないけど、ずいぶん大袈裟になっちゃったなあ・・・」

「そう思いながら孝幸は、この町に引越してきて本当に良かったと思つた。」

兵庫に来ていた拓は千葉県代表の選手団とともに練習場となる近くの高校のグラウンドにいた。

選手団の中には同じ東洋電機陸上部の篠塚や女子マラソンで前回の

アテネオリンピックに出場した渡辺弘子わたなべひろこらが出場した。

弘子は拓の横に來ると拓の腕を掴んで話しかけた。

「三浦さんだっけ？今頃ウチで練習始めた頃ね」

「そうですね」

「私期待してるのよ」

「それはありがとうございます」

「違うの。彼女のことじゃなくて綾子のことよ」

「真田先輩のこと？」

「そうよ。あの子、私の後輩なんだけど、ウチに入ってからパツとしないでしょう？」

「・・・」

「監督が言ってたけど、三浦さんの指導をすることで何か得るものがあるんじゃないかって」

「そうですね、ボクも真田先輩は才能があるとずっと思っていましたよ。高校生の時はあこがれましたから」

「へーっ！ そうなんだ。まあ、それはさておき、私みたいなマラソンランナーと違ってスプリンターとしては、あの子も年齢的にそろそろ厳しいと思うのよ。」

「・・・」

「高校生の時から思ってたんだけど、あの子はどっちかっていうと選手より指導者に向いていると思うの」

「そう言えば確かに。ボクがスランプのとき真田先輩に声を掛けてもらったことがあるんですけど、それがきっかけで吹っ切れたことがあります」

「だから、今回、三浦さんを教えているうちにそう言う自覚を持ってくるといいなって期待してるんだ」

東洋電機の女子寮はほとんどの寮生が陸上部に所属している。

恭子と美由紀は2階の二人部屋に案内された。

荷物を置くと早速とレーニンウェアに着替えてグランドに出た。

他の部員たちは日中仕事をしているので、グランドにはまだ誰もいない。

二人でストレッチを始め、軽くトラックをランニングした。

綾子は早めに仕事を切り上げると、池田のもとを訪れた。

「よう！真田か」

池田は、東洋電機陸上部の監督をやっているが、東洋電機を定年退職して以来、グランド近くの一戸建てを購入し、夫婦二人で悠悠自適の生活を送っていた。

「前にも話したが、今日から中学生が二人一緒に練習に参加する。お前と同じ短距離の選手だから面倒みてやってくれ。もう寮にしているころだから、そろそろグランドに顔を出すだろう。紹介するからついて来てくれ」

「わかりました」

綾子は池田とともにグランドへ向かった。

二人がグランドに着くと、既に恭子と美由紀はトラックをランニングしていた。

「おっ！早速やってるな」

綾子がグランドに入ろうとすると、池田はそれを制止してこう言った。

「ちょっとあいつらの走りを見ていよう」

恭子達は、ランニングをしながら時々、交互にダッシュをしては追い付いた時に相手にタッチするといったような練習をしている。

これは、野村が考えたリレーメンバーの練習方法だった。

それを見ていた綾子はあることに気が付いた。

「あのショートカットの子・・・タッチされてからの反応がすごく早い！」

「ああ、そうだな」

池田は、綾子の目の色が変わるのを感じえ内心『しめた！』と思った。

「そろそろ行こうか？」

そう言つて池田はグラウンドに入るとトラックの前で二人に声をかけた。

二人が気付かないようだったので、綾子は一歩前に出て大きな声で合図を送った。

それでも二人は夢中で走り続けている。

コーナーを回つて池田と綾子がいる方に向いた時、始めて気がついたようにこつちへ向かつて走ってきた。

二人は池田と綾子の前まで来ると立ち止まり、「よろしく願ひします」とお辞儀をした。

池田が「ようこそ」と言つて手を差し伸べると、二人は互いに顔を見合せてから、ハツとしたように耳に手を当てた。

二人は耳から耳栓を外し、改めて挨拶をした。

「耳栓？」

綾子は驚いた。

「耳栓をして走っていたの？」

「はい！リレーの練習のときはバトンを受けてからの反応が大事だと言つて、野村先生が足音や周りの雰囲気やシャットアウトしてバトンを受け取った感触に集中できるようにって考えた練習方法なんです」

綾子も当然リレーの経験があるから分かるが、バトンの受け渡しが大きく順位に影響するのがリレーだ。

こんなことを思いつく先生も先生だが、それをサラッとやってのける二人に改めて感心した。

それで、あの反応の良さはまさに天性のものだと感じた。

池田は大したものだと感心し、それを聞いた綾子の表情を見て更にニヤツと笑った。

「どうだ？教えがいがあるだろう？」

「ええ、なんだかワクワクしてきました」

全中選手権開会式の3日前、合同練習の最終日に野村が二人を迎えに来た。

野村は池田のもとを訪ね礼を言った。

池田は笑顔で野村に握手を求めた。

「いや、あ、野村さん、こちらこそありがとうございます。おかげでうちの選手たちにもいい刺激になったようで次の試合が楽しみですよ。三浦さん、いいところまで行けるんじゃないでしょうか。ウチの真田が太鼓判を押しましたから！」

「そうですか。それは心強い。」

野村が寮へ行くと恭子と美由紀は既に荷物をまとめて、真田綾子とともに玄関先で待つていた。

「先生、ありがとうございます。いい勉強になりました」

二人が、その声を揃えて言うのと、野村も満足そうに応えた。

「そうか、じゃあ、行こうか。いざ、日本征服へ！」

「日本征服ってなんですか？それじゃあ、まるで悪の秘密結社みたいじゃないですか」

そのやり取りを聞いていた綾子は思わず吹き出してしまった。

「それを言うなら全国制覇でしょう？」

綾子がそう訂正すると、恭子と美由紀もうん、うんと頷いた。

「まあ、そうとも言っな」

野村は、綾子に深々とお辞儀をするとお礼を言った。

「いろいろとお世話になりました」

「どういたしまして。私も色々勉強になりました。向こうにいら西崎君によろしく伝えて下さい」

そう言っ綾子は3人を見送った。

3人がバスに乗るのを見届けると池田がやってきて綾子に隣に立った。

「監督……」

綾子の表情が晴れやかに輝いているのを見て池田は満足そうだった。
「監督、わたし今度の試合で引退します。その後は指導者の勉強をしようと思うんです。あの子たちと一緒にいて気が付いたんですよ。わたしにはその方が合ってるって。あの子たちがウチに来るころには、きっと、東洋電機を短距離王国にして見せます。」

「そうか、それは残念だが、お前がそう思うのなら仕方ないな。だが、次の試合はそれなりの結果を出して、指導者としての箔をつけてくれよ」

「はい！任せて下さい。たぶん、監督が、『頼むから現役でいてくれ』と泣きつくかもしれませんけど」

「こいつ！」

池田はそう言っていると、綾子の頭を手を当て髪の毛をくしゃくしゃにした。

「もうう！監督！」

14・新たなライバル

14・新たなライバル

ここ丸亀陸上競技場はプロサッカーの公式戦も開催されたことのある競技場で、サブグラウンドが眼と鼻の先にあり試合前の調整を行うには最高の条件だった。

恭子達は宿泊先のホテルに着くと早速練習着に着替え始めた。着替え終わる頃に部屋の襖戸が開いて野村が顔を出した。

「キヤー！ ちょっと、野村先生」

すごい剣幕で美由紀は持つていた手鏡を野村に投げつけた。

野村はとっさに手を出したが、手鏡は野村の肩に命中し畳の上に落下した。

野村は手鏡を受けた痛みも忘れ、慌てて襖戸を閉めた。

「悪い！」

すぐに着替え終わった美由紀が襖戸を開けて手鏡を回収しに来た。

「気をつけて下さいよ。乙女の部屋なんですから。着替え終わったからもういいですよ」

野村は部屋に入るとテーブルの前に腰を下ろした。

「先生、大丈夫ですか？」

恭子は手鏡が命中した左肩を示して心配そうに尋ねた。

「ああ、大したことはない。田中も多少は手加減してくれたみたいだしな」

美由紀はバツが悪そうに、お茶を淹れながら目をそらした。

「しかし、着いたばかりだって言うのに、もう練習を始める気なのか？」

そう言いながら野村は美由紀が淹れたお茶を一口すすった。

「流しても12秒切れるくらいでないと全国では通用しないと思うし、とにかく、東洋電機の合宿の後は体が軽くて、走りたくて走りたくて仕方ないんですよ」

そう訴える恭子と美由紀の目は合宿前に比べると明らかに自信を深めているようだった。

「そういえば、都大会の後はタイムを計ったことないなあ・・・

よしっ！　じゃあ、会場の下見を兼ねて軽く競技場までランニングしていくか」

「はい！」

二人とも声を揃えて立ち上がると、野村の腕を引っ張って部屋を出た。

「ちょ、ちよつと待て！　俺も着替えてくるから先に外で待ってる」

ホテルから競技場までは1km足らずの距離だった。

野村はホテルの従業員が通勤で使っている自転車を借りて、恭子と美由紀に伴走した。

あつと言う間に競技場に着くと、そこでは大会の準備も整い、最後の整備がおこなわれていた。

三人はサブグランドの方へ行った見ることにした。

サブグランドに着くと、練習しているどこかの選手たちが次々と引き上げてくるところだった。

野村は事務室で1本タイムを取るだけだと頼み込んでグランドに入ってもらった。

「もう、閉門時間なんだから早く頼みますよ」

係員は鍵のついた紐をくるくる廻しながらそっけなく言うと、事務室の方へ歩いて行った。

恭子と美由紀が夕日を見ながら準備運動を始めると、一人の選手が近付いてきた。

「東京の三浦さんでしょう？　これから取るの？」

そう言つて、ストップウォッチを手にしてゴールラインの方へ歩いて行く野村を見た。

「はい。　１本だけ」

「見させてもらつてもいいかしら？」

「どうぞ・・・」

恭子がそう答えると、美由紀が恭子の腕を引つ張り耳打ちした。

「ダメだよ！　あれ、埼玉光陽中の高部知美よさいたまこうやう　たかべ　ともみ」

高部知美は１１秒８０の記録を持っていて、今、一番中学記録に近いと言われている選手だった。

「どうして？　いいじゃない。　どうせ試合になればわかるんだし」

恭子はあっけらかんとして答えると、再び高部知美に向つて微笑んだ。

「どうぞ、ごゆっくり」

高部知美は頷いてゴールラインの方へ歩いて行つた。

「おい！　準備はいいかーっ」

野村の声に恭子と美由紀は両手を頭の上で合わせて（OK）の合

図をして、先に恭子がスタートラインに着いた。

野村のピストルの音と同時に、恭子は地面を蹴った。

恭子がゴールする瞬間、高部知美の髪が風に舞った。

ストップウォッチを見た野村の表情が緩む。

「どうでした？」

「今ので何パーセントだ？」

「最後流したので８０％くらいです」

「そつか！　見る」

野村が差し出したストップウォッチは１１．９２だった。

続いて、美由紀がゴールした。

「なんてこつた！」

野村はさらに驚いた。

美由紀のタイムも１２秒を切っていたのだ。

それを聞いた美由紀は「まさか！」という顔をして驚いていたが、最後流した恭子と違って自分は目いっぱい走りだった。

「やっぱり恭子は凄いわ」

それを聞いていた高部知美は恭子位近づいて来て右手を差し出した。

「試合が楽しみになってきたわ。お互い、頑張りましょうね」

「ええ！」

恭子も高部知美の手を握って微笑んだ。

そして、美由紀にも握手を求めてきた。

「どうしてあなたが出ていないのか不思議だわ」

「ありがとう。私、大器晩成型なの。高校生になったら負けないわよ」

美由紀はそう言って高部知美の手を両手で包みこんだ。

「楽しみだわ。それで、どこへ進学するのかしら？」

「決まってるでしょう！ 一校よ」

「一校？ 第一高校ね。なるほど、東洋電機の西崎選手の母校ね」

「ええ、拓さんは恭子の・・・」

「美由紀！」

恭子は慌ててみゆきの口を塞いだ。

「あら？ 何か意味ありげね。そうだわ、私が優勝したら、その件、詳しく教えてね」

そして、高部知美は野村に会釈をすると、グラウンドを後にした。

「おい、今のは高部知美じゃないのか？」

「そうですよ。雑誌の記事とかでみた時は、もう少し高飛車なイメージがあっただけど、意外といい子ね」

美由紀は自分が褒められたので、高部知美が気に入ったようだ。

ホテルに戻ると、シャワーを浴びて食事をとった。

「しかし、短期間でよくこれだけタイムを縮められたなあ」

「なに言ってるんですか先生。そのために東洋電機の合宿に参加させたんでしょう？」

「まあ、そうだが・・・」

実際、野村もある程度は期待はしていたが、思った以上の成果に野村は改めて二人の資質の高さに驚いていた。

恭子はともかく、美由紀がこれだけのタイムを出すようになったのは予想外だった。

本人が言うように“大器晩成”というのもあながち冗談ではないと思った。

「とりあえず、やることはやったんだ。後はレースに備えて無理な練習はするなよ」

孝幸ら応援団は丸亀から少し離れた宇多津のホテルにチェックインした。

丸亀市内はビジネスホテルが多く、孝幸達のように家族単位で泊まる場合には勝手が良くない。

競技場からは遠いが、高橋がマイクロバスのレンタカーを手配してくれた。

もちろん、運転も高橋が自ら買って出た。

そこは海に近く、瀬戸大橋もよく見える。

恭子の出番がない日は観光するのにも都合が良かった。

孝幸は、恭子達が宿泊しているホテルに泊まりたかったのだが、早紀は気が散るからやめた方がいいと孝幸を諭した。

孝幸も、メンバーを見渡して、確かにそうだと諦めた。

高橋は借りてきたマイクロバスを入念にチェックしていたが、孝幸が様子を見に行くと、試運転がてらひとつ走りしないかと誘った。「大事な命を預かるんだ。しっかりチェックしとかないとな」

「そうそう、部長の腕前をまず確認しとかないと」

「ばか、プライベートでは部長と呼ぶなって言ってるだろう」
そう言って高橋は運転席に腰かけた。

孝幸は運転席わきのバスガイドが使う補助席を出して、そこに腰かけた。

「ところでどこまで行くんですか？」

「決まってるだろう！」

「やっぱり」

高橋は、一路丸亀へ向かってバスを出した。

高橋と孝幸は丸亀陸上競技場の場所を確認すると、競技場の付近を一回りして恭子達が止まっているホテルへ向かった。既に辺りは暗くなっている。

ホテルの駐車場にマイクロバスを止めると、フロントでまず、野村の部屋を訪ねた。

フロント係は、一応、野村に來客が來たことを伝えようと内線電話を手に取った。

受話器の向こう側で野村がすぐにロビーへ降りると答えたようだ。フロント係は1階のロビーで待つように二人を案内した。

間もなく、野村が恭子と美由紀を連れてやってきた。

「おじ様、遠いところわざわざありがとうございます」

恭子はそう言つて高橋に抱きついた。

その様子をいぶかしそうに見ている孝幸に美由紀が声をかけた。

「はじめまして。 田中美由紀です」

「ああ、恭子の父です。 恭子がいつもお世話になってます」

5人はロビーの一角にある喫茶室に移動した。

「先生、どうですか？ 恭子はどの辺まで行けるでしょうか？」

孝幸が野村に尋ねると、恭子も美由紀も聞き耳を立てた。

都大会で優勝したとはいえ、全国には数えきれないほどの強豪がひしめいている。

100分の1秒差で大きく順位が入れ替わる世界なのだ。

恭子も実際自分がどれくらいのところにいるのか予想もつかない。

「都大会のタイムは悪くはないが、予選を勝ち抜くにはちよつと厳

しいかもしれませんね」

野村は顔を引き締めてそう答えた。

孝幸と高橋は落胆の表情を浮かべたが、美由紀は目を輝かせて野村に質問した。

「都大会の時ならでしょう？」

すると、野村も表情を緩めて頷いた。

孝幸と高橋は二人のやり取りに何かあると感じて野村に言い寄った。
「どういうことですか？」

「実は、ここへ来る前に東洋電機の場合に参加させたでしょう？あれが大当たりでした。よっぽどいいコーチがいたんだと思います。今日、都大会の後初めてタイムを取ったんですが三浦は最後流して12秒を切ってますからね。更に、この田中も三浦が都大会で優勝した時のタイムを上回りましたから。今なら、二人とも準決くらいまでは大丈夫でしょう」

それを聞いた美由紀は「ちえっ！」と指を鳴らして悔しがった。

「それじゃあ、絶対恭子には優勝してもらわなきゃね！」

「そうか、田中さんは出られなかったんだよね」

孝幸は慰めるような口調で美由紀の方を見た。

「大丈夫ですよ。わたし、大器晩成型なんで高校生になったら鮮烈デビューを飾るのよ」

美由紀はあっけらかんと言つてのけた。

孝幸も高橋も安心して胸をなでおろした。

「それを聞いて安心しました。せつかく長期休暇をとってきたんだからな。まあ、ちよつとは観光旅行気分みたいところもあるがな」

高橋はそういうと、野村の肩に手を置いて激励した。

「それじゃあ、先生、恭子ちゃんをよろしく頼みますよ。東京に

帰ったらいい酒を飲みましょう」

「はい、きつといい酒が飲めるでしょう」

華やかに執り行われた開会式の後、恭子と美由紀は高部知美と一緒にライバルたちの様子をうかがいに行った。

高部知美は2年の時にも全国大会に出場しているだけあって名だたる全国の強豪ランナーたちとも顔見知りらしく、友達のように会話している。

そして、皆に恭子を紹介して回った。

都大会の優勝者ということで誰もが一応、名前くらいは知っているようだったが、タイム的にはライバル視している者はほとんどいなかった。

「みんな分かってないなあ。私が連れて歩くんだから『注意なさいよ』ってことなのに、三浦さんのことを全然気にもかけないなんて。都大会の時のタイムしか頭にないのね」

高部知美は、そう呟きながらライバルたちが本番で驚く顔を想像すると表情が緩んできた。

「さすがに、中学記録にいちばん近い女。みんなが知美ちゃんには一目置いているのね」

美由紀はすっかり高部知美の友達気取りだ。

「わたしね、三浦さんの走りを一度見たことあるの。強い人と一緒に走ればもつと伸びるんだろうなと思ったわ。なにしろ、走り方が男の子のようなんだもの。そう・・・日本記録保持者の西崎拓選手の走り方によく似ているわ」

高部知美がそういうのを聞いて、恭子と美由紀は顔を見合わせて笑った。

「あのね、恭子が本格的に陸上を始めたきっかけは拓さんなんだよ」「えっ？」

高部知美が驚いた表所を浮かべたのを見て、美由紀は得意げに話を続けようとした。

しかし、恭子が赤い顔をして首を横に振ったので思いとどまった。

「そうだったわ。話しの続きは知美ちゃんが優勝したらだったわ

ね」

「もしかして、二人はそういう中なの？」

「違うつてば！」

高部知美が妙な風に勘ぐるので、恭子はむきになって否定した。

「何となくわかったわ。この大会はきっと、あなたが台風の目になるわね。みんなびっくりするわよ」

高部知美が思った通り、恭子は難なく予選を突破した。

しかし、組み合わせが良かったのか、タイム的には準決に残ったメンバーの中では下から3番目だった。

だから、この時点では、まだ誰も注目していなかった。

高部知美だけが恭子と顔を合わせるたびにVサインを出して見せた。準決勝第1組、恭子が出場する。

高部知美は第2組なので、決勝に残らなければ一緒に走ることはできない。

予選通過タイムでは恭子がいちばん下だった。

スターターが位置についてピストルを持った右手を高々と上げた。恭子はいつものように集中した。

ピストルの弾がはじき出されるようなスタートダッシュを決めると、体一つ抜け出した。

他の選手たちには黒い影が通り過ぎたようにしか見えなかった。

気がついた時には恭子の背中だけが視界に入ってきた。

なんとかその背中を捕まえようと必死に追いかけるが、届きそうになかなか届かない。

「そんなバカな・・・」

きっとだれもがそう思ったに違いない。

その差をキープしながらゴール前20メートルでさらに加速した。その瞬間、他の選手たちは完全に戦意を失った。

恭子がゴールした瞬間、高部知美だけが飛び上がってガッツポーズをしていた。

第2組は言うまでもなく、高部知美がトップで決勝進出を決めた。

スタンドでは恭子の応援団が第一中学の校旗と応援旗を振りながら全員がお祭り騒ぎを演じている。

誰もが恭子だけしか見ていなかった。

孝幸と高橋は抱き合って大喜びしている。

スタンドの最前列で仁美と一緒に大声で恭子に声援を送っていた悠斗は、近づいて来た人影に気がつかなかった。

ポンと肩をたたかれ振り向くと、そこには拓が立っていた。

「あれっ？ 来るのは明日じゃなかったのか？」

「ああ。 シノさんが気を使ってくれてね」

「今のレース見たか？」

「たった今、着いたところなんだ」

「そいつは残念だったな。 恭子ちゃんの走り、凄かったぞ」

「大体わかるさ」

「ちえっ、面白くないヤツだな」

恭子はすぐに拓の姿に気が付いた。

高部知美が横にいたので、ちらつとその存在を確認しただけだったが、高部知美はそのしぐさを見逃さなかった。

「に、西崎選手じゃない！ まさか、あなたの応援に？」

恭子は何も言わずに、うつむいた。

そして顔をあげると少しだけ微笑んで頷いた。

「行こう！ ほら、せっかくなんだから向こうに行こうよ。 きつ

と他の連中がやきもちを焼くわよ」

「そ、そんな・・・」

照れ臭そうにしている恭子の腕を引っ張って高部知美はスタンドの方へ歩きだした。

15・一騎打ち

15・一騎打ち

恭子がスタンドのほうに歩いて来るのが見えたので、孝幸達は我先にとスタンドの最前列へ移動し始めた。

真っ先に駆け降りてきた孝幸は拓に握手を求めると、拓も右手を差し出ししっかりと握り返した。

それから早紀に頭を下げた微笑みながら言った。

「おめでとうございます」

「西崎君のおかげね」

「そんなことはありませんよ。これは彼女の持つて生まれた才能というか……ある意味、宿命なんですよ」

「宿命だつて？ それは大袈裟じゃないのか」

孝幸は、拓の言葉に謙遜しながらも、胸の内では興奮していた。

「ほら、ボク等のヒロインのお出ましたよ」

悠斗が言つと、いっせいに拍手の嵐が始まった。

「すごい応援団ね。羨ましいわ」

高部知美は、そう言いながら、なんだか自分も勇気を貰えるような気分になっていた。

「ごめんなさい。みんな下町の人たちだから」

「いいのよ。私の家は農家だから、この時期は夏野菜の収穫があつて応援どころじゃないの。だから気にしないで。それより、私にも紹介してくれる？」

「ええ！ いいわよ」

恭子は、スタンドの前までやってくるとみんなに向かって頭を下げ

た。

すると早速、高橋から祝福の言葉が飛んできた。

「恭子ちゃん、よくやった！ 今の準決勝のタイムはすごかったなあ。決勝もいけるんじゃないか？」

「それは分らないけど、とにかく頑張ります」

「ところで、隣にいるのは・・・」

高橋は恭子が出るレースしか見ていなかったが、この赤いユニフォームだけは目に焼き付いていた。

「埼玉光陽中の高部です」

高部知美が頭を下げて挨拶すると、高橋は納得の表情でうなずいた。「どうりで、見覚えがるわけだ。けた違いに早いヤツが一人いるなと思っていたんだが、お前さんだったのか」

「はい、申し訳ありません。でも、決勝は三浦さんがいるので全力を出しますよ。そうしないと、きっと勝てないでしょうから」

「そうかい、そうかい、恭子ちゃんはそのなりに強敵かい？」

「はい！ わたし、ずっと前から、三浦さんだけが私と一緒に楽しんでくれる相手になりそうだと思っていたんですよ。今日の走りはずっと見てて、私の予想が正しかったと確信しました」

「そうか！ 君は大したものだなあ。敵になる人間に対してそんな風に考えられるなんて」

「そうですか？ 三浦さんもそうだと思いますけど、私は単純に走るのが好きなだけですから」

高部智子の話が高橋は深く感心した。

「まあ、『類は友を呼ぶ』ということでしょう」

拓がそういうと、高橋たちは一様に納得した。

「おう！ じゃあ、君もがんばりな。応援してやるからな」

高部智子は改めて頭を下げ、感謝の気持ちを示した。

そして、拓に向って挨拶をした。

「高部さん、中学を卒業したらウチに来るんだって？」

拓の言葉に恭子達は驚いた。

高部智子は、高校へは進学せず、中学卒業と同時に東洋電機の陸上部に入ることが内定しているとういうのだ。

「ウチは農家だし、ゆくゆくは私も後を継ぐつもりだから学歴は必要ないしね。両親も、今のうちに好きなことをやっておけというものだから」

「ウチは女子のスプリンターがないから監督が期待しているみたいだよ。頑張ってね」

「ありがとうございます。皆さんには悪いけど、決勝では三浦さんにも負けませんよ」

「よく言った。それでこそ、恭子ちゃんのライバルだ」

高橋は、すっかり高部知美のことが気に入ったらしい。

そんなやり取りを恭子は黙って聞いていたが、拓が恭子の方を着てウインクしたので、改めて報告をした。

「拓さん、なんとか決勝に残ることができましたよ」

「ああ。真田先輩から話は聞いているよ。先輩が決勝までは保証すると言っていたよ」

拓は、大会前に恭子達が東洋電機で合宿した時の様子を、真田綾子から聞いていた。

「真田さんにはとても感謝してます。なんだから、今までにない力を引き出してもらったみたい」

「決勝、楽しみにしているよ。それから高部さん、君も負けるなよ」

「はい！」

恭子と高部知美は、二人一緒に返事をする、お互いに顔を見合せて吹き出すように笑った。

「じゃあ、決勝で。そして表彰台で」

高部智子はそう言つと、その場を後にした。

準決勝のタイムは、高部知美が11秒85でトップ。

恭子は自己ベストの11秒90で2番目だった。

3番目以降の選手たちはほとんど11秒9の後半から12秒を少し超えるくらいのところでかなり接戦が予想された。

スタートのタイミング一つで充分に順位が入れ替わるレベルだ。

そんな中であって、高部知美の優勝は間違いないというのが大方の見方だった。

フィールドでは既にすべての競技が終了していた。

トラックでは決勝のスタートが近付いて、選手たちがトラックに出てきた。

恭子と高部知美は二人並んでレーン向って歩いた。

他の選手たちは、かなり入れ込んでいるようだった。

これが全国大会の決勝という舞台なのだ。

しかし、さすがに、高部知美は離れしているようで、ちっとも緊張した様子は見られなかった。

恭子も、リラックスしていた。

スタート時刻が近付いて、選手たちが自分のレーンに入った。

1コース、宮崎県延岡中学校、若居香奈子。わかいかんこ

2コース、福岡県博多女子短大付属中学校、中島小百合。なかしま さゆり

3コース、地元、香川県高松第三中学校、小倉真紀子。おぐら まきこ

4コース、埼玉県埼玉光陽中学校、高部知美。

5コース、東京都城東第一中学校、三浦恭子

6コース、大阪府堺南中学校、吉田ひとみ。よしだ

7コース、兵庫県神戸青陵中学校、古沢順子。ふるさわじゅんこ

8コース、秋田県角館桜花中学校、南優子。みなみゆうこ

選手たちは、入念なウォーミングアップを終え、それぞれのスタート位置に着いた。

恭子の隣のレーンにいる高部知美は、さっきまでの穏やかな表情と違って、既にゴールだけを見据えている。

恭子も気持ちを切り替えた。

スターターがピストルを構える。

選手たちは一斉にスタート態勢に入る。

「よい・・・」

ピストルの引き金が引かれると同時にパンパーンとピストルの音が2階なり響く。

6コース、大阪の吉田ひとみ福岡の中島小百合がフライングを犯した。

二人は、一か八かの勝負に出て失敗したのだ。

思わぬ仕切り直しに、一度、緊張が緩んだ。

選手たちは、気持ちをリラックスさせようと首を回したり、屈伸をしたりしながら再スタートに備えた。

恭子は、スタートを切らなかった。

隣の吉田ひとみの飛び出しが明らかに早いと感じ取ったからだ。

他の選手たちは、恭子が出遅れたのに運が良かった、と思っていた。

高部知美は、そんな恭子を見て鳥肌が立つのを覚えた。

（この子は本当にすごいわ。もしかしたら、負けるかもしれない）
陸上を始めてから、常にトップを走り続けてきた高部知美が初めて負けるかもしれないと感じたのだった。

恭子と高部知美以外の選手たちは、一度途切れた緊張と集中力を、再び同じレベルに引き上げることではできなかった。

恭子は一度立ち上がって深呼吸をした。

そして再び、スタートの態勢に入った。

恭子は、スターターが引き金を引く腕の筋肉のふるえ、そして指先の動き、100m先の人間のわずかな変化がすべて感じ取れるほど集中していた。

ピストルが鳴った瞬間、恭子は地面を思いっきり蹴って飛び出した。その瞬間、恭子の視界にはゴールのテープしか見えないはずだったところが、一陣の風と共に一歩前に出たのは高部知美だった。

高部知美は、そのまま一気に加速すると、少しずつ恭子を引き離し

ていった。

恭子は、スタートの勢いを殺すことなく加速したが高部知美との差を詰めることはできなかった。

スタンドで見ている者には、まったく同じ位置を走っているようにしか見えないくらいの差が、二人の間では10メートルの距離ほどに感じられていた。

スタートした時点で、最初にフライングを犯した2人が出遅れた。これは仕方がない。

せっかく、全国大会の決勝にまできて、失格になるわけにはいかない。

2回目のスタートはどうしても慎重にならざるを得なかった。

3コースの地元香川の小倉真紀子はほぼ、高部知美と同時にスタートを切った。

しかし、高部知美のスタートの爆発力は半端ではない。

準決勝でも一緒に走っていた小倉真紀子は、十分に承知していたので、ゴールまで、差を広げられないようにについて行けば、2位になれると計算していた。

しかし、自分が2人の背中を見ることになろうとは、全く予想していなかった。

7コース、兵庫の古沢順子と1コース、宮崎の若居香奈子、8コース秋田の南優子はほぼ横一線に並んで4番手で追走する。

50メートルを過ぎたあたりで、兵庫の古沢順子が少し抜け出す。そして、大阪の吉田ひとみがじわじわと盛り返してきた。

この段階で、トップは高部知美、続いて恭子、少し離れて吉田ひとみ、ほぼ同じ位置で古沢と小倉真紀子、さらに離されて南、若居、中島はスタートの出遅れが響いて最後尾から抜け出せずにここまで来た。

先頭から最後尾までは5メートルほどの接戦だった。

レースはいよいよ後半戦に入っていく。

恭子は前に行く高部知美の存在を気にすることなく、ただ、心地よ

い風を感じていた。

高部知美もまた、追いかけて来る者たちのことなど意識の中には置いていなかった。

地元の吉沢順子は、なんとか表彰台をキープしたいと思っていた。高部智子にはかなわないとしても、2位は確保したい。

あわよくば、高場知美の調子いかんで、棚ぼたの優勝もあるかもしれないとさえ思っていただけに、今までノーマークだった恭子の存在は予想外だった。

吉田ひとみも同じ思いだった。

高部知美を負かすためには、一か八かのスタートに賭けるしかなかった。

結果的にはそれが裏目に出てしまったが、高部知美以外のものに負けるわけにはいかなかった。

古沢順子は決勝に残れただけで満足していた。

この決勝のレースは、中学校生活の最後のご褒美というような感覚で臨んでいた。

スタートで二人が出遅れてくれたことで、表彰台へ欲が少し出てきた。

中島小百合は最後まであきらめていなかった。

恭子と同様に、今大会中に自己記録を塗り替えながら、勝ち進んできた。

さほど注目もされていなかったので、逆にあつと言わせてやろうという思いが最初のフライングにつながった。

若居と南は、準決勝2組目で高部智子達と走り、若居が4位、南が5位だった。

順位で決勝に進むことができず、タイムで拾われた。

組み合わせのあやとはいえ、一度は決勝をあきらめた二人だった。ただ、決勝を走るからには、無様な走りだけはしたくなかった。

ゴールが近付くにつれ、前の二人と他の選手の差が広がってきた。

3場番目の位置にいる吉田は必死にもがいたが、差を詰めるどころか、次第に二人の背中が小さくなっていくのが分かると、後続の選手に足元をすくわれることのないよう気を引き締めた。

3位争いはし烈になってきた。

吉田ひとみがわずかに抜け出しているが、古沢順子、小倉真紀子もほとんど差がなくゴールへ向かってくる。

中島も後半追い上げて入るが、若居と南を交わすところまではいかず、最下位争いもほぼ横一線となった。

高部知美はトップを走りながらも内心焦っていた。

恭子の走りは最後の20メートルの加速がケタ違いだということを知っているからだ。

今のままでは逃げ切れないかもしれない。

そう思う反面、恭子が並んできて一緒にゴールできたら、最高にいい気分だろうな、とも思っていた。

いずれにしても、ここまで来たら、残っている力をふりしぼって悔いのないようにレースを終えよう。

そう思った。

恭子はスタートで高部智子が前に出た時、『さすが！』だと思った。

しかし、あとは自分以外の選手の存在も、周りの景色も感じなくなっていた。

ただ、風に導かれるように走った。

いや、走っているというよりも、風に乗って飛んでいるような感覚だった。

そして、やがて決着の時を迎えようとしていた。

高部智子のスピードは既にMAXに達していた。

それでも恭子を引き離すことができなかった。

ゴールまであと20メートル。

恭子のスピードがMAXを迎えた瞬間、スタンド中のすべてのものが恭子と同じ風を感じたに違いない。

まさに、ほんの一瞬の出来事だった。

しかし、その瞬間はまるで2時間ドラマでも見ているようにゆっくりと瞼に焼き付けられた。

今までなかなか追いつけなかった高部知美が、その一瞬であつたという間に抜き去られた。

まるで、瞬間移動でもしたかのように。

追いつく・・・ そう思った時には、恭子が真つ先にゴールのテープを切っていた。

恭子がいちばんにゴールを駆け抜けけると、スタンドにいた恭子の応援団は一斉に万歳を繰り返し始めた。

悠斗は拓に握手を求めた。

「やったな！」

「ああ。きつとこうなると思っていたよ」

孝幸と高橋は、早速、宴会の準備をホテルに申し入れようと携帯を電話取り出した。

「おい、早紀、ホテルの電話番号は？」

「すべて用意できてますよ」

「えっ？」

「宴会の準備なら、もう出来てますよ。あなた達の考えることなんてすべてお見通しです！」

早紀は、仁美と二人で、既に、宴会の段取りを行っていた。

実は、ここに来る前からホテルと打ち合わせして、貸し切りになるパーティールームをホテル近くに予約してあったのだ。

今頃は、ホテルからご馳走が運び込まれているところだ。

「じゃあ、恭子が勝つことが初めから分かっていたのか？」

「そんなことは思ってませんよ。私は今まで頑張ってきた恭子に御苦労さんの意味でパーティーの用意をしていたのよ」

「そういうことか。まあ、考えてみれば当然だな」
「だけど、これで東京に戻ったら大変なことのなりそうね。」「ば
れいしょ」が！」

「早紀さん、その通りだよ！　そのときは、売上の半分は恭子ちゃんにあげたいくらいだよ」

電光掲示板に着順が表示された。

1 .	三浦（東京 城東第一）	1 1 . 7 1	R
2 .	高部（埼玉 光 陽）	1 1 . 7 2	R
3 .	吉田（大阪 堺 南）	1 1 . 8 9	
4 .	小倉（香川 高松第三）	1 1 . 9 0	
5 .	古沢（兵庫 神戸青陵）	1 1 . 9 3	
6 .	南（秋田 角館桜花）	1 1 . 9 5	
7 .	若居（宮崎 延 岡 西）	1 1 . 9 6	
7 .	中島（福岡 博多女附）	1 1 . 9 6	

拓は、その数字をじつと見つめた。

11秒71。

中学生女子の日本新記録。

何も言わずに、ただ、強くこぶしを握り締めた。

その瞬間、恭子と高部知美は抱き合った。

優勝した恭子も、準優勝の高部知美も中学生女子日本記録を更新したのだ。

「三浦さん、あなたのおかげよ。 やつと超えられたわ。 あなたと走れば、きつといけると思っていたの！　でも、あなたがその上に行ったのは、ちよつとシャクだけだね」

「ごめんなさい。私、余計なことしちゃって・・・」
すると、高部知美は突然笑い出した。

「もう、冗談だつてば。あなたつて本当に素直なんだね」

そして、すぐに、美由紀や野村が駆け寄ってきた。

一緒に走った選手たちも集まって来て、恭子の胴上げが始まった。

そんな光景をスタンドで見っていた拓は、今のこの瞬間を心から祝福した。

16・運命の日

16・運命の日

東京に戻って来てから1か月。

恭子は中学校の部活からは引退して、後輩の指導をしながら自主トレーニングをしていた。

学校が休みの週末には東洋電機へ出向き、真田綾子の指導を受けた。全国大会が終わったときには、陸上競技で名門といわれる私立の高校から数えきれないくらいのオファーがあった。

だが、恭子は都立の城東第一高校に行く決めていたし、孝幸と早紀もそのつもりでいたので、スカウトたちの対応には一苦労だった。2月になると、推薦の試験が行われたが、恭子は体調を崩して受験することができなかった。

まあ、一般入試でも充分に合格するだけの学力はあったから、恭子が拓と同じ一高のユニフォームで全国の舞台に行くことは誰もが疑わなかった。

恭子はトレーニングにも受験勉強にも努力を惜しまず、拓と一緒にオリンピックに出ることを夢見ていた。

恭子が全国大会を制した後、拓は海外の賞金が出るレースを転戦していた。

元旦には、恭子もそんな拓とメールで新年のあいさつを交わした。ところが、年が明けて間もなく、拓は3月までの海外遠征を切り上げて、急に東京に帰ってきた。

東洋電機の池田監督をはじめ、マスコミも拓の突然の帰国には驚

いていた。

「どうした？ 怪我でもしたのか？」

池田監督は拓が会社を辞めて、海外で賞金を稼ぎながら実績を作りたいと申し出た時は猛反対をした。

しかし、拓の熱意に負けて、会社に休職扱いにしてくれるよう頼み込んで、拓を送り出した。

「いえ、体調は申し分ありません。帰ってきたのは、今、ボクがここにいないくちやならない理由があるからです。ボクの人生は、この時のために、そして、その後の未来をつくるためにあったようなものですから」

「拓、お前、いったい何を言ってるんだ？」

池田監督の問いに、拓は答えず、ただ、黙って空を見つめた。

『なにも心配するな。ボクがささえてあげるから』

拓が帰国したニュースは、否応なく恭子の耳にも入った。

しかし、恭子は受験勉強に専念し、毎晩深夜まで机に向かっていた。

「おい、恭子、あまり無理するなよ。また体調でも壊したら元も子もないぞ」

孝幸はそんな恭子のが心配で仕方なかった。

「そうよ、たまには早く休んでもバチは当たらないわ」

早紀もまた孝幸と同じ気持ちだった。

ふたりとも、最近の恭子を見てみると、無性に胸騒ぎがしたのだった。

「お父さんもお母さんも心配し過ぎだよ。この冬休みが受験生にとってどれだけ大切かわかっているでしょう？」

「そりゃあ、そうだが、お前の成績なら一高どころか聖都付属だって楽勝だと野村先生も言ってたからな・・・」

「そうね。聖都付属を受けるなら勉強なんかしないわ。一高だからやるのよ。一高だから、どんな間違いがあっても必ず入った

いの！　一高だから・・・」
そんな恭子の言葉を聞いたら孝幸達も何も言えなかった。

受験日の一週間前、恭子はいつものように熱心に受験勉強をしていた。

体調管理にも気を使い、この冬は珍しく風邪ひとつひかなかった。
夕食は、恭子の好きなハヤシライスだった。

サラダは孝幸のお手製だった。

恭子は孝幸のポテトサラダがとてもお気に入りだった。

「お母さんの料理は私の自慢だけど、ポテトサラダだけはお父さんのが世界一美味しいわ」

「まあ！　確かにお父さんのポテトサラダは美味しいけれど、世界一は褒めすぎじゃない？」

「そんなことないわ！　世界一料理が上手なママより美味しいのよ」
このところ、勉強ばかりで、ろくに食事もしていなかった恭子が、
今夜はこのほかよく食べた。

孝幸も早紀も、その姿を見て、すっかり安心した。

「それじゃあ、ごちそうさま」

「ああ、喜んでもらえて光荣だよ。」

恭子は食器を片づけると再び部屋に戻って行った。

「どうして神様は、一生懸命頑張っている人に試練を与えるの？」
恭子がまだ小学校のころ、あるテレビの番組を見ながら、涙ながら
に孝幸に聞いて来たことがあった。

「その人ならきつと乗り切ることができると神様には分かるからよ」
そんなことを早紀は話した覚えがある。
まさに、その時のことが夢に出てきた。

早紀はハッとして目を覚ますと、何とも言えない不安感に襲われた。

その夜、恭子は久しぶりにお腹いっぱい食事を取ったので日付が変わる頃には睡魔に襲われはじめていた。

「うーん」

椅子から立ち上がり、両手を高くあげ、思いっきり伸びをした。少し、気分がシャキツとしたように思えた。

「あと少しだけ頑張ろう」

そう思って椅子に座り、ペンを手にした。

左手で参考書のページをめくろうとした時、運命のときは訪れた。

『あれっ？ 手が動かない・・・』

そう思うと同時に、左足の力が抜けて、恭子は椅子から崩れ落ちた。『どうしたの？』

何が大分分からなかった。

両手で体をささえて起き上がろうとするけれど、左側に倒れてしまふ。

「わ、わたし、左手と左足が動かない・・・ おかあさん、助けて・・・」

そう叫びたかったが、声もまともに出せない。

恭子は動かすことができる右手と右足で、床を這いながら、どうか孝幸と早紀の寝室までたどり着いた。

右手をのばしてドアノブを廻すと、開いたドアに身を任せるように部屋の中ん転がり込んだ。

夢から覚めた早紀は、その瞬間、寝室のドアが開いて恭子が倒れ込んで来たのを見てベッドから飛び出した。

「恭子！」

孝幸は恭子の体を支えると、抱きしめた。

「どうしたの？」

「・・・ないの」

「えっ？」

「動かないの・・・」

恭子はそう言つて、右手で左手と左足を指した。

早紀はこの重大さに気がつくとき孝幸に向つて叫んだ。

「おとうさん！ 起きて頂戴。 恭子が、恭子が・・・」

孝幸が目覚めると、ぐったりした恭子を抱きかかえる早紀の姿があつた。

『どうした！ 何が起きたんだ？』

とにかくただ事ではない。

孝幸は恭子を背負うと、車のキーを早紀に渡した。

「とにかくエンジンをかけておいてくれ。」

そして、ベッドから毛布を引き抜いて恭子の背中に掛けると、携帯電話を取り、すぐに高橋に電話した。

「部長、一大事です。 恭子が・・・」

布団の中で電話を受けた高橋は、その瞬間、半開きの瞼を開いて立ち上がった。

「わかった。 子供たちは俺が引き受ける。 早く病院に連れて行ってやれ」

「ありがとうございます。 恩に着ます。 ドアのカギは開けてきますから」

エレベーターでエントランスに降りてくると、早紀が玄関先に車を止めて後部座席のドアを開けた。

孝幸は恭子を後部座席に乗せると、運転席に座りハンドルを握った。

一番近い救急指定病院に着くと、孝幸は再び恭子を背負つて救急の受付に走った。

夜中だと言うのに順番待ちの患者が数人並んでいた。

『なんてこつた！ こんな時に限って・・・』

「すいませ〜ん、先生！ ちょっと診てもらえませんか？」

受付の看護師は事務的に「少々お待ちくださいね」と言う。

「ふざけるな！ この子にもしものことがあったら、あんたどう責任取るつもりだ。いくら順番でも、時と場合があるだろう。とりあえず見てくれよ。それで大丈夫ならいくらでも待つから」

脳外科医の香坂尚輝は緊急のオペを終えて下番するところだった。たまたま救急外来の受付のそばを通った時に、孝幸の叫び声を聞いた。

孝幸に背負われた少女の姿を見て、すぐに脳出血だと思った。

香坂は孝幸のほうに歩いて行くと、少女の表情を確かめた。

少女は不安そうにしていたが、この父親を信頼していることが一目見て分かった。

「おとうさん、私の診察室へ行きましょう」

孝幸は恭子を背負って医者に従って診察室へ恭子を連れて行った。診察室のベッドに恭子を寝かせると、医者は恭子の症状を確認した。そして、孝幸に発症した時の状況を聞くと、頷き、看護師に指示を与えて孝幸を応接室へ案内した。

車を駐車場に止めてから病院に入ってきた早紀は、受付で孝幸と恭子のことを聞いた。

「ああ、多分、香坂先生が診ている患者さんね・・・その診察室“C”の応接にいらっしやると思いますよ」

「ありがとうございます」

早紀はそう礼を言うと、診察室“C”のドアを開けた。

「あの、三浦と申しますが、今、ここに・・・」

「お母様ですね。こちらへ」

看護師が応接に案内してくれた。

部屋に入ると、孝幸が神妙な顔をして医者の話を着ているところだ

った。

「おとうさん、恭子は？」

孝幸は早紀の顔を見た途端、目頭が熱くなり、唇が震え始めた。

「き、恭子が・・・走れないって・・・走れないって言うんだ」

「おとうさん、落ち着いてください」

早紀は孝幸の肩に手を置いて、医者に事情を聞いた。

「まず、恭子さんの病名は『脳動静脈奇形』 脳動静脈奇形は一般の方には聞き慣れない病名と思いますが、脳神経外科の領域では良く知られている疾患です。普通の脳の血液循環ですと、動脈・毛細血管・静脈の順序に血液が流れます。毛細血管は酸素やグルコースなど脳にとって大事な物質の交換場所であると同時に脳循環からみますと血流の抹消抵抗の強い場所でもあります。 脳動静脈奇形は原始動脈、毛細管、静脈が分かれる胎生早期（第三週）に発生する先天性異常であり、脳血管撮影をしますと、正常の流れと異なり、毛細血管相が無く、動脈相の時期に既に静脈が造影され（動脈血が直接静脈に移行）、同時に『無数のマムシが巣の中で二ヨロニヨロと絡み合っているような異常血管塊（ナイダス、ラテン語の巣の意）』が描出されます。 動動静脈奇形が存在しますと、脳の血流は、毛細血管があるため抹消抵抗の強い正常脳組織への還流を避け、抵抗の少ない動静脈奇形部に多くの血液が流れ込みます。従って周辺部の脳は乏血状態になり、まひなどの脳虚血症状が出現することがあります。これを動静脈奇形部に血が盗まれる現象、『盗血現象』と言います。 また、毛細血管が存在しないため、動脈系と静脈系の圧調整が出来ず、静脈系に過大の圧が加わり、次第に脳動静脈奇形は増大します。大きなものになりますと血液が空回りしますので心臓に負担が加わり、心筋肥大や心不全になる場合もまれにあります。さらには、破裂による出血の危険も伴います。 さて、脳動静脈奇形の頻度ですが前回の脳動脈瘤の約10分の1から20分の1と言われています。代表的な症状は脳動静脈奇形の破裂による頭蓋内出血症状Ⅱくも膜下出血、脳実質内出血、脳室内出血Ⅲ突然の激

しい頭痛、嘔吐や出血の部位によるまひなどの巣症状^{おつと}が40～50%、次いでけいれん発作が20～30%、前述の盗血現象によるまひなどの進行性の神経脱落症状が数%、頭痛などのスクリーニングで偶然発見されるものが20%前後となっています。いずれも発症年齢は20～30歳代と比較的若年です。この年齢で発症したくも膜下出血やけいれん発作の患者さんを診れば、われわれ脳神経外科医は最初にこの脳動静脈奇形を考える程です。この疾患の予後は、脳動脈瘤破裂より軽症ですが、いったん出血に見舞われますと死亡率約10%、まひなどの後遺症が残る罹病率が約30%と云われています。脳動静脈奇形の自然歴をみますと、非出血発症例の将来の出血率は年間2～3%、出血発症例では再出血率は1年目は6%と高く、以後は非出血例と同等の年間2～3%と云われています。さてこの脳動静脈奇形の治療の第一は将来の出血による死亡を含む重篤な神経脱落症状出現の防止にあります。この目的のため現代の医学では次の三つの戦略が考えられます。？手術による摘出術：最も確実である。しかし脳深部や重要な神経機能部位では手術が困難な場合がある？血管内手術による塞栓術：血管内操作でマイクロカテーテルを動静脈奇形の栄養血管に誘導して塞栓物質を注入してナイダスを中から塞栓する。しかし単独では治癒率は低く、現況ではまだ補助的治療手段の段階である？ガンマナイフやx-ナイフなどによる放射線治療：通常一日で治療が終了しすぐ社会復帰出来るという利点がある。一方、完全塞栓率が摘出術より低く、完全塞栓に至るまでに2～3年を要し、その間の出血率は未治療と同等である。また、？？をいろいろ組み合わせた治療も良く行われます。さらに、？根治療法のリスクや脳動脈瘤破裂より致死率が低いことを考慮して抗けいれん剤のみを投与し保存的治療で経過をみるという選択も重要です。脳動静脈奇形の大きさ、存在場所が脳の表面か深部か、重要な神経機能をつかさどる場所か、出血例か非出血例か、既に神経脱落症状を伴っているか、年齢、合併症の有無など症例ごとに各治療手段のリスクも異なります。患者さんに十

分説明し、可能であれば完全治癒が得られる摘出術が望ましいとは考えますが、さらに一人ひとりにとり最も適切な治療方法を吟味し選択すべきだと考えます。因みに胆沢病院では摘出術を中心とする根治療法と保存的治療の比率はほぼ半々です。いずれにしても、恭子さんの症状ではすぐに手術しなければなりません。そして、恭子さんの場合はほぼ100%に近い確率で麻痺が残ると思われます。それを踏まえて、こちらの同意書にサインして頂きたいのですが」

専門的なことはよく分からないが、すぐに手術が必要ならサインするしかない。

孝幸に比べて、早紀は自分でも驚くほど冷静だった。

「とにかく、恭子のために最善を尽くしていただけますか？」

「もちろんです」

数十分後、手術に向けての検査を行うため、恭子は検査室へ運ばれて行った。

検査だけで3時間かった。

そして、これから7時間にも及ぶ手術が始まる。

手術室へ入るとき、恭子は一瞬、孝幸と早紀に向ってVサインを出して見せた。

『大丈夫だから心配しないで』

きつと、そう言いたかったのだろう。

孝幸は、そんな恭子の姿を見たら、自然に涙が溢れだして止まらなかった。

「くそっ！ 涙が止まらねえ。父親のくせに、だらしないな・・・カッ」悪いよ」

「そんなことはありませんよ。父親だから涙が流れるんですよ。あなたはとてもいいお父さんよ」

早紀はそう言って孝幸を抱きしめた。

そして、早紀の頬にも涙のしずくが流れ落ちていた。

17・全員集合

17・全員集合

第一報が拓の耳に入っただのは朝の8時30分だった。

この日は土曜日だということもあって、会社は休みで陸上部も朝練はなかった。

拓の部屋は無人だった。

誰もいない部屋で、ベッドの上におかれた携帯電話がマナーモードでブルブルと震えていた。

拓は軽くランニングするつもりで寮の玄関で靴を履いているところだった。

靴の紐を結び終わり立ち上がったときに、寮母から声をかけられた。

「西崎君、電話だよ」

拓は事務室へ廻ると置かれている受話器を取った。

「もしもし、西崎です・・・」

電話の相手は悠斗だった。

孝幸は最初に家に電話して高橋に状況を説明した。

次に“ばれしよ”へ電話した。

拓の携帯や亮の電話番号を知らなかったから、仁美から連絡を取ってもらおうと思ったのだ。

電話に出たマスターに大まかな事情を話すると、すぐに仁美に代わってもらった。

仁美は驚いて放心状態だったが、すぐに気を取り直して、すぐに連

絡を取ると孝幸に告げた。

仁美はすぐに拓の携帯に電話した。

拓はなかなか電話に出なかった。

呼び出しコールが10回を過ぎると、留守番電話に切り替わった。

仁美は仕方なく、すぐに電話するようメッセージを残すと、すぐに悠斗に電話した。

仁美から悲報を聞いた悠斗は「信じられない……」と言いながら、例の話を思い出していた。

『まさか、本当にこんなことが起きるなんて』

そう思いながら、仁美に言った。

「あいつのことだから、多分、部屋に携帯置きっ放しでランニングにでも行ってるんだろう。一応、寮にかけてみるよ。それで、仁美はどうするんだ？ 病院に行くのか？ だったら迎えに行くから用意しろ」

「手術が終わるのは夕方近くになるみたいだから、先に恭子ん家に行って身の回りの物を持ってくるようにおじさんに頼まれてるの」

「そうか、わかった。どっちにしても迎えに行くよ。浩人たちも心配してるだろう」

悠斗は電話を切ると、すぐに東洋電機陸上部の寮に電話した。

「……悠斗か？ 悪い！ 携帯、部屋に置きっ放しだ」

「そんなことより、つかまって良かった。恭子ちゃんが大変なんだ！ すぐに戻って来られないか？」

悠斗の口調から、拓は、ついにその日が来たのだと理解した。

拓は受話器を置くと、寮母に礼を言って部屋に戻った。

ベッドの上に置かれた携帯電話は、着信があったことを知らせるランプが点滅していた。

留守電のメッセージを聞きながら、私服に着替えると、通用口を出

て寮の裏手にある駐車場へ向かった。

東洋電機陸上部の寮は、交通の便があまり良くない場所にあるので、寮生のほとんどが車を持っていた。

拓も、寮に入ってすぐに免許を取り、車を買った。

駐車場に止められている車の中でも、ひときわ目を引く赤いRV車のドアにキーを差し込むと、拓は一瞬空を見上げて呟いた。

「頑張れよ！」

三浦家では、高橋が朝食の支度をしていた。

高橋は、この年まで独身だということもあり、料理の腕前は大したものだ。

卵を溶いて、牛乳・バター・ツナ・千切りにしたキャベツを混ぜてオムレツを作る。

フライパンの返しが鮮やかに決まった。

「おじさん上手なんだね。でも、どうしてここにいるの？」

優子が起きてきて、不思議そうに高橋を見た。

「優子か。おはよう！ まあ、待ってろ」

続いて浩人も起きてきた。

「お母さん達は？」

高橋はオムレツを皿に盛り付けると、テーブルに運んだ。

「二人とも、とりあえず、飯を食え。説明はそれからだ」

優子と浩人は席について、お互いに顔を見合せながら手を合わせた。

「いただきます」

テーブルには、オムレツの他にもサラダ・ソーセージ・トースト・味噌汁が並べられていた。

「パンのときはいつもコンソメスープだよ」

浩人が味噌汁をすすりながら言った。

「たまにはいいだろう」

「まあね。これ、全部おじさんが作ったの？」

「なかなかのもんだろう？」

「うん。でも、お母さんの方がうまいよ」

そんな会話をしている浩人と高橋をよそに、優子は食事中、ずっと無言だった。

「ごちそうさま」

食事が終わり、テーブルの上を片付けると、高橋は改めて二人を席に着かせた。

「いいか、よく聞くんだ」

高橋は二人の目をじつと見つめた。

二人とも、真剣な表情で高橋の目を見据えている。

「実は、昨日の夜中に恭子が病院に運ばれた」

「お姉ちゃんが？」

二人は声を揃えて尋ねた。

「どうして？」

高橋も詳しいことはまだ聞かされていないが、自分が知りうる限りの情報を二人に話した。

二人とも充分に理解できる年齢だと判断したからだ。

優子は、高橋の話を聞きながら涙を流している。

しかし、一度も下を向いたり目をそらしたりせずに最後まで高橋の話を聞いた。

「俺も、詳しいことはまだ分からないが、とにかくそういうことだから、これから三人の身の回りの物を持って病院に行くぞ。

分かったら支度をするんだ。いいな」

「わかった！」

浩人はそう答えると、孝幸のポストンバッグにタオルや洗面道具を詰め込み始めた。

「みんなにはもう連絡したの？」

「ああ、多分、病院から孝幸が連絡してるはずだ」

「そつ、なら、みんな病院に集合だね」

優子も涙を拭いて席を立った。

孝幸は待合室のベンチに座って頭を抱えたまま動こうとしなかった。

ベンチとは言っても、脳外科の手術室専用の待合室はホテルのロビーのように豪華な内装が施されていた。

孝幸が座っているベンチも会社の応接セットよりはるかに豪華なものに見えた。

そのスペースには孝幸達の他には誰もいない。

静まり返ったその空間に、空腹を告げる孝幸の腹の虫の音が響き渡った。

早紀は思わず吹き出した。

孝幸もフツと声を漏らした。

「ここにきてから何も食べてないものね。さすがに、私もお腹が減ったわ。近くにコンビニがあったから何か買ってくるわね。

あなた、何か食べたいものはある？」

「そうだな、なんか温まるものが食べたいな」

「わかったわ。適当に見繕ってくるわ」

早紀が去ると孝幸は立ち上がり窓から外を眺めた。

どんよりと曇った空は孝幸の心を不安から解放してはくれなかった。

「俺がこんなことじゃダメだな！」

そう言つて、孝幸は自分を励ました。

手術室に運ばれて行く時、恭子が見せたVサインが脳裏に浮かび、それが恭子の意志であり、両親に対する“心配しないで”という願いなのだ。

三浦家では、高橋と子供たちが病院にいる3人の身の回りの物を用意していた。

しかし、こんなことは今までに経験がないだけに、何をどのくらい

用意すればいいのが皆目見当がつかなかった。

浩人は旅行気分で、ゲームや漫画の本を自分のリュックに詰め始めた。

優子は部屋に戻ったきり出てこないし、高橋も、女性の着替えとなると手が付けられずにいた。

そんなとき、ちょうど仁美と悠斗がやってきた。

仁美は部屋に入るなり、驚いた。

「なに？ これ？ 引っ越しでも始める気？」

辺り一面に着替えやら雑誌やらが散乱しているのだ。

「おう！ ちょうどいいところに来てくれたな。病院に行っている早紀ちゃん達の身の回りの物を持って見舞いに行こうと思ったんだが、何を持って行こうか悩んでいるうちにこんなになっちまって・・・ いや、だが、ほとんどは浩人がやったんだぞ」

「まったく！ 両親揃って病院で暮らすわけじゃないんだから、とりあえず、恭子の着替えや洗面道具があればいいわよ。あとはその都度運べばいいんだから」

仁美はそう言いながら、散らかり放題になったリビングを片付け始めた。

「これじゃあ、二人が病院から帰ってきたら、泥棒にでも入られたんじゃないかと心配するわ」

悠斗は優子の姿が見えないのが気になった。

優子の部屋のドアをノックすると、中から返事が聞こえてきた。

「優子ちゃん？ 大丈夫かい？」

「悠斗コーチ？ 入ってもいいですよ」

悠斗は恐る恐る優子の部屋のドアを開けた。

優子はパソコンに向かって何か調べているようだった。

それは、恭子の病気についての記述が記されているホームページだった。

さらに、恭子の携帯電話を手にしてメールをしているようだった。

「何してるんだい？」

「うん、お姉ちゃんの一大事だもん。みんなに知られなきゃ！

おじさんはお母さんとお父さんがみんなに連絡したって言ったけど、たかが知れてるわよ。だから私がみんなにメールしてあげてるの」

「まるほど、恭子ちゃんの携帯ならすべての情報が入っているからね。でも、携帯を見たことばれたら怒られるんじゃないのかい？」

「大丈夫！ お姉ちゃんはそのうちの無頓着だから・・・ あっ！

返信来た。 高部知美だつて。 コーチ知ってる？」

さすが、今時の小学生は違う。

悠斗は、優子が部屋に閉じ込もって泣いているのではないかと心配した自分が恥ずかしくなった。

恭子の妹だけのことはある。

知美は最初冗談かと思った。

今、手術しているはずの人間から手術中などというメールが来るなんて馬鹿げている。

『変な冗談はやめて。 あなたらしくないし、笑えないから』

そう返信すると、すぐに返事が返ってきた。

『本当だよ。 私は妹の優子です。』

「なんてことなの！」

知美はすぐに拓の部屋へ走った。

この時、既に、知美は東洋電機の陸上部に入って拓と同じ寮に入っていた。

女子寮と男子寮は棟が分かれていて2階の渡り廊下でつながっている。

知美が渡り廊下を走っている時駐車場へ向かう拓を見かけた。

「西崎さ〜ん！」

知美は大声で拓を呼んだが、拓には聞こえていないようだった。

拓がこれから恭子の所へ行くのだと察した知美は、当りを見渡し下に降りられるような足がかりがないか探した。

うまい具合に渡り廊下の下の階にある食堂の屋根伝いに進めば、一段低くなった通用口の庇がある。

そこからなら飛び降りることができそうだった。

知美はすぐに窓から飛び出し、屋根を走って通用口の庇に飛び移ったと同時に地面に着地した。

そして、そのまま駐車場まで走った。

車に乗ってエンジンを掛け、アクセルを踏もうとした瞬間、フロントガラスの前に知美が現れた。

拓は慌ててアクセルから足を放した。

知美の表情を見た瞬間、恭子のことを知らされたのだと感じた拓は、助手席のドアを開けて手招きした。

「早く乗れ。これから病院へ向かうところだ」

「ありがとうございます」

知美は、どうにか息を整え、やっとの思いでそれだけ言うと助手席に飛び乗った。

優子のメール作戦は効果的だった。

恭子の携帯電話に登録しているすべてのメールアドレスに、恭子が入院したことで、入院先の病院名を一斉送信したのだ。

ひっきりなしに帰ってくる返信メールの対応に優子は一苦労だった。日頃、メールなどやり慣れていない優子にとっては相当面倒くさい仕事だった。

見かねた悠斗が、優子から携帯電話を取り上げた。

「俺がやってあげるから、優子ちゃんも出かける支度をした方がいいよ。行き先が病院だといっても、パジャマのまま出掛けるつもりじゃないだろう？」

「悠斗コーチありがとう。じゃあ、着替えるから出てくれる？」
「ああ！ わかったよ」

早紀はコンビニで、弁当や雑誌、スポーツ新聞などを買って病院に戻ると、救急病棟のエレベーターホールで田中美由紀や陸上部のメンバーに会った。

「あら？ どうしたの？ 誰かのお見舞いかしら？」

その声に振り向いた美由紀は、血相を変えて早紀に駆け寄った。

「あばさん、恭子はどうなんですか？ 手術だなんて・・・」
他のメンバーも心配そうにしている。

「あら、恭子のお見舞いに来てくれたの？ まだ、手術が終わるまで、けっこうかかるわよ。でも、あなた達が来てくれた、退屈せずに済みそうね」

早紀の様子が意外と明るいので、美由紀たちは少し安心した。

「ところで、どうして知ってるの？」

「優子ちゃんが恭子の携帯を使ってみんなにメールしてるみたいですから、これからもつとにぎやかになりますよ」

「まあ！ 困ったわね。待合室に入りきれるかしら・・・」

悠斗は大変な役目を引き受けたと後悔していた。

返信メールを打ち込んでいるそばから、次々とメールが返ってくる。

悠斗も自分が知っている相手には直接電話して状況を報告したが、陸上関係の知り合いがこんなに多いとは思いつかなかった。

さすがに、日本記録を塗り替えるくらいの大物になると、知り合いの数も半端じゃないし、日本中のあちこちからメールが入ってくる。

悠斗はたまりかねて、『詳しいことが分かり次第、こちらからまたご連絡いたしますのでしばらくの間メールの返信はご遠慮ください。緊急の連絡が取れなくなると本人及び、本人の家族に迷惑が

かかりますのでよろしく願います』という内容のメールを一斉送信した。

しばらくすると、メールは来なくなつた。

「準備はできたか？」

悠斗は高橋や浩人たちに向つて声をかけた。

「いいよ」

「じゃあ、出かけるぞ」

18・意識の中

18・意識の中

東洋電機の寮は高速のインターからほど近い場所にある。

拓は迷わずに高速道路へ車をすすめた。

土曜日だということもあって、反対車線は既に切れ目なく車の列ができている。

都内へ向かう拓たちは、そんな風景には目もくれず、ひたすら道路の先を見据えている。

「悪戯だつたらいいのに・・・」

知美がポツリとつぶやいた。

「運命なんだ」

「えっ？」

知美は拓の横顔を見つめたが、拓はまっすぐに前を向いたままそれ以上口を開こうとはしなかった。

「運命？」

この二人の間には何か特別なものがあるのだろう・・・

初めて出会ったときからそんな感じを持っていた知美は、もしかしたら拓はこうなることが分かっていたのかもしれないと思った。

悠斗達が病院に着いた時には陸上部の連中や町内の見慣れた顔が待合室を占領していた。

優子と浩人は両親の顔を見つけるとそばに駆け寄った。

「お姉ちゃんは大丈夫？」

浩人が心配そうに早紀に尋ねた。

「大丈夫だから心配しないで」

優子はソファに腰掛けていた孝幸の隣に座った。

「主人公はそう簡単には死なないのよ」

「主人公？」

孝幸は優子の顔を見た。

「そう！ お姉ちゃんは主人公なの。 私たちがいるのは物語の中なのよ。 ある少女が色々な苦難を乗り越えて陸上競技で日本一になるの。 そんな物語の主人公がお姉ちゃんなの。 だから、きつと大丈夫。 手術も無事に成功して、すぐによくなるわ」

孝幸は驚いた。

ちよつと前まで子供だと思っていた優子が、自分を励ましているのだ。

それにしても、何とも不思議な発想をするものだ。

「・・・困るの」

「えっ？」

「そうじゃないと困るのよ！」

そう言うのと優子は立ち上がった。

「主人公には素晴らしい家族がいるの。 きれいでやさしいお母さん、一流の建築エンジニアのお父さん、将来を有望視されているサッカー選手の弟、日本記録保持者のスプリンターが恋人で、そして売れっ子女流作家の妹。 お姉ちゃんの知名度を利用して私も世に出るつもりなの・・・」

孝幸はさらに驚いた。

「優子？ おまえ・・・」

しかし孝幸はそれ以上話し掛けるのをやめることにした。立ち上がった優子はしっかりとこぶしを握り締めて震えている。目からは涙が溢れてそのこぶしに降り注いでいる。

そして、優子は孝幸に抱きついた。

「大丈夫だよねえ？ お姉ちゃん、大丈夫だよねえ？」

ついさっきまで、まるで他人事のように事務的に振る舞っていた優

子が廻りを気にするそぶりさえ見せずに泣き崩れた。

その声は鼻水をすする音にかき消されそうなほどか細い声だった。孝幸はギュッと優子の体を抱きしめた。

「大丈夫だよ。主人公は最強さ！」

都内の環状線に入ると少し混んできた。

知美が横でイライラしているのが手に取るように分かる。

拓はそんな知美には目もくれず、高速道路を降りて一般道に入った。
「あと10分で着くよ」

知美は拓にそう言われて、イライラしていた自分を見透かされていたことに気がついた。

「まだまだだな」

「何がだい？」

「こんなに気持ちいが外に出ちゃうんじゃ、選手としては失格だね」

「そんなことはないさ！今はレースをしているわけじゃない。

俺達は走るロボットじゃないんだ。人を思いやる心があるからこそ記録を創れる。そう思わないか？」

「はい！その通りだと思います。」

拓の車が交差点に差し掛かる直前に、待ってましたとばかりに信号が青に変わった。

拓は左ウインカーを点滅させると、“聖都大学病院前”の交差点を左折した。

すぐに駐車場の入口が見えてきた。

警備員の指示に従い、車を止めるや否や知美が飛び出していった。

「拓さん、先に行ってますよ」

拓は手を振って“わかった”と合図すると、ドアをロックすると隣に停まっているひとときわ目立つキャンピングカーを見てニヤリと笑った。

“仁美命”と書かれている。

ロビーへ入ると、知美がキョロキョロしながら立ちすくんでいる。
「まだこんなところにいたのか？」

拓に声を掛けられると泣きそうな声ですがりついた。

「こんな大きな病院じゃ絶対に迷子になるわよ。 いったいどこへ行けばいいのかさっぱり分らないよ」

拓は正面にある総合案内板を確認して、エレベーターホールの方へ歩いて行った。

知美も拓の服の裾を掴んでついて行った。

待合室に到着すると、そこは暮の空港の出発ロビーのようにじつた返していた。

拓の姿に気が付いた悠斗がすぐに駆け寄ってきた。

「思ったより早かったじゃないか」

「ああ！ 割と空いてたからな。 それより、いつからそういう仲間なんだ？」

「そういう仲って？」

「車を見たよ」

「ああ！ あれか！ あれは、その・・・ 仁美のヤツが勝手に・・・」

「私が勝手にどうしたって？」

仁美が後から悠斗の頭をひっぱたいた。

「拓さん、お久しぶりです」

横にいる知美に眼をやって、不振の眼差しを拓に向けた。

今度は悠斗が仁美の頭を軽く叩いて言った。

「バカな想像をするんじゃない。 この子は恭子ちゃんのライバルでもあり親友でもあり、今は大将と同じ東洋電機の陸上部に所属している・・・」

「高部知美！」

悠斗が言うより先に仁美が叫んだ。

「思い出したわ。 恭子の次に早かった人ね」

知美は苦笑いしながら頷いた。

「恭子の様子はどうなの？」

「今、手術中。 夕方までかかるらしいわ。」

「夕方？ そんな大手術なの？」

「ええ、何しろ脳ですからね。 でも命には別状ないみたいだよ」

「後遺症は残らないのかしら？」

「そこまで詳しいことは聞いてないわ。 だって、聞けないでしょう？」

仁美はそう言って、恭子の家族の方を指した。

恭子は手術中に夢を見ていた。

首に風呂敷のマントをくくりつけて、ジャングルジムの天辺で腕を組み、遠くを見つめているの男の子の姿。

体も大きく力も強い。 この幼稚園の、いわゆる番長格に違いない。 それでいて、思いやりがあり、年中、年少のチビ助たちからは絶大な人気があるようだ。

風呂敷のマントは今時珍しいスタイルだが、本人はそれが気に入っているらしい。

お昼寝開けのお迎えまでの間はいつも、こうやってジャングルジムの上で迎えが来るまでの間の時間を過ごしているのだろう。

「タクちゃん、危ないから降りてらっしゃい。」

えっ？ タク？ 拓さんなの？

担任の先生が声を掛けても知らぬ顔をして遠くを見つめている。 その男の子が見ているのは日が沈む西の方角だ。

「タイシヨウ、何を見てるの？」

「一の子分らしい男の子がジャングルジムに登ってきた。」

「神様って本当にいると思うか？」

「神様？」

「そうさ。ボクは絶対いると思う。」

そして、ある日、その男の子が近所の公園で遊んでいると、白いヒゲを生やしたおじいさんが現れてこう言った。

「西崎拓、良く聞け。今日、お日様が沈む方角にある町で一人の女の子が産まれる。15年後にお前はそれのこと仲良くなるじゃろう。そしてその女の子はそれから1年後に歩けなくなってしまうじゃろう。お前は決してその子を見捨ててはいかんぞ。そして、お前が支えてやればきつと奇跡が起こるじゃろう。」

その男の子は、逃げたくても動くことが出来ずに、そのおじいさんの話をずっと聞いていた。

体が動くようになって、ハツと思った瞬間には、既に、おじいさんは消えていた。

そして、布団から顔を出したのは大きくなった男の子の姿だった。それは、まぎれもなく拓だった。

次の瞬間、“オギヤー” 元気な産声とともに、一つの新しい命がこの世に誕生した。

孝幸はその瞬間、腰を抜かして、その場にへたり込んだ。

えっ？ なに？ 今度はお父さん？ あの赤ちゃんって・・・

医師に手を差し出され、やっとの思いで立ち上がると、その場にいるすべての人たちから祝福されていた。

「おめでとうございます。女の子ですよ。」

「ご主人よく頑張りましたねえ。でも、いちばんのお手柄は奥さんですからね。」

孝幸は、早紀に歩み寄りねぎらいの言葉をかけた。

「よく頑張ったね。君は本当に偉いよ。それに比べたら、ボクなんか…」

孝幸の目からは、見る見るうちに涙がこぼれ落ちてきた。その涙が、早紀のほっぺたに落ちた。

早紀はそれを舌でなめて「しょっぱいよ。」と孝幸を見つめた。

「ねえ、疲れたから、少し休むね。」

そいつで早紀は眼を閉じた。

「うん。うん。ゆっくり休めばいいよ。」

お母さん……

なんだか不思議。

今のは私が生まれた時のことみたいね。

きつと、今頃、お父さんやお母さんがその時のことを思い出しているのかもね。

そうか！ 拓さんはその時から知っていたんだわ。

初めて拓さんに会った時、昔から知っているような気がしたのはこういうことだったのね。

でも、待つて……ということはどういうこと？ 私、歩けなくなるの？ そんな……だけど、拓さんがささえてくれるのよね。

そして奇蹟が起こる。奇蹟ってどんなことかしら？

今度はその映像が浮かんでくるのかしら……

恭子は夢の中でそんなことを感じていたが、やがて夢の中の恭子は意識を失い深い眠りに落ちて行った。

再び目が覚めると、そこは病院の病室のようだった。

意識がまだはつきりしない。

体も動かない。

頭の方が何だか窮屈に感じた。

眼だけで廻りを見ると、ベッドの脇のソファで孝幸が横になっている。

お父さん……

声になったのかどうか分からないが、そう呟いてみた。

すると、孝幸が跳び起きた。

「恭子！ 気が付いたのか？ お父さんのことが分かるんだな」

恭子の顔を覗きこむ孝幸の目から大粒の涙が恭子のほほに落ちてきた。

その涙は頬を伝って恭子の口元へ流れて行っただ。

「おとうさん、しょっぱいよ」

「そうか、しょっぱいか。よく頑張ったな」

あれっ？ これって……

そうだ。 恭子が生まれた時と同じだ。

「私が生まれた時と同じだね」

恭子がそういうと、孝幸は恭子が生まれた時のことを思い出した。確かにこんなことがあった。

もつとも、その時ベッドにいたのは早紀だったのだが。

「どうしてそんなこと知ってるんだ？」

「うん、なんとなくそんな気がした。 ねえ、お母さんは？」

「優子や浩人の世話もあるし、ここは完全看護だから付き添いで一緒に泊まることできないんだ。 だから無理言ってお父さんだけ何とか泊めて貰ったんだ」

孝幸は、恭子に意識障害が出ていないようなので安心した。

そこへ、担当の看護師が様子を見にやってきた。

「あら、気がつかれたようですね。 今、先生を呼んできますね」

孝幸は看護師に深々と頭を下げた。

「ねえ、お父さん。 私、歩けなくなっただの？」

孝幸は一瞬、ギョツとした。

恭子は病気のことを知らないはずなのに…… それに、生まれた時のことも知っていた。

手術を受けている間に、いろんな情報が意識の中に入りしただ。

人間の脳には無限の可能性があるらしいから、決して不思議なことではないのだろうが。

それよりも、恭子が意外と冷静なのに孝幸は驚いていた。

そして、今の恭子の姿を見たら父親である孝幸でさえ、不安を隠す自信はなかった。

「大丈夫だよ。まあ、大きな手術をしたんだ。少し時間がかかるかもしれないけれど、きつと歩けるようになるさ」
今はただ、そう言うしかない。

手術が終わったばかりなので仕方ないのだが、まだ頭から管が差しこまれている。

鼻からも同じような管が差し込まれていて、手からは点滴の管が。

そして、見たこともない機械がベッドの周りに並べられていて例外なく恭子の体につながっている。

早紀は恭子のこんな姿を見ていられないと言った。

それは孝幸も同じだった。

恭子が目を覚ましたときに知らない場所で独りぼっちだったらきつと不安になるに違いない。

最初だけでも傍に居てやりたい。

孝幸はそう思ったからこそ、病院に無理を言っただけ泊めてもらうことにした。

明日になれば早紀や子供たちも気持ちの整理ができていっただろう。

19・涙の卒業式

19・涙の卒業式

その日の夜、拓と知美は恭子の家に泊めてもらうことになった。早紀が戻ってきたので、高橋は自分の家に帰った。

夕食は支度する時間もなかったので帰りにみんなで“ばれいしょ”に寄って済ませた。

仁美から一通りの報告を受けたマスターは早紀を気遣って声をかけた。

「大変だったねえ。俺も一時はどうなるのか心配だったが仁美から事情をきいて一安心したよ。孝幸君は病院に泊ってるんだって？ 困ったことがあったらいつでも言ってくれよ」

「どうもありがとうございます。仁美ちゃんにはいろいろしてもらって本当に助かります」

「な〜に、お互いさまよ。今日は俺がご馳走するから腹いっぱい食べていってくれ」

三浦家に着くと、浩人は拓にゲームをやろうとねだった。

拓は浩人に付き合っ、ゲームをやったが、まったく相手にならなかった。

「なんだよ。拓さん弱っちいな」

それを見ていた知美が拓からコントローラーを奪い取った。

「浩人君、今度はお姉ちゃんが相手よ」

知美はそう言っ、ゲームを始めた。

なかなかいい勝負だったが、かろうじて知美が勝った。

「へへ、どんなもんだい！」

「お姉ちゃん、すげえ！　ねえ、もう1回やろっ」

「そうか？　それじゃあ、3回まわってワンと言いな」

「えゝ？　なにそれ？」

子供相手に威張っている知美を見ると、拓は少し気持ちが落ちていた。

わかっていたことだとは言え、こういう形で運命の日が訪れるとは想像していなかった。

子供のころ夢に出てきた老人は、拓が支えになることで“奇跡”が起こると言った。

果たして、自分がどう支えていけばいいのか正直不安だった。

恭子は気持ちの強い子だから、これからっ前向きに生きていくだろう。

だが、この事実はあまりにも残酷だ。

拓も“奇跡”を信じて支えていこうと固く誓った。

浩人と知美はひたすらゲームに夢中になっている。

優子は、自分の部屋で勉強でもしているようだった。

次の日が日曜日とはいえ、もう、12時を回ろうとしていた。

「浩人、もうそろそろ寝なさい。明日は朝から病院に行くのよ」

早紀がそう言い聞かせているところに電話が鳴った。

早紀は受話器を取り、頷きながら目頭を押さえている。

電話は孝幸からだった。

受話器を置いた早紀をみんなが注目している。

優子も電話の音に気が付き部屋から出てきた。

「お姉ちゃんが気が付いたって」

「本当？」

みんなが一斉に聞き返した。

「ええ、本当よ」

その瞬間、三浦家は歓声の嵐に巻き込まれた。

「寝てる場合じゃないわ。みんなに知らせなきゃ！」

優子はそう言って部屋から恭子の携帯電話を持ってきた。

「貸して！」

知美がそれを取り上げて優子にウィンクした。

「私のほうが早くできるわ。私に任せて早く寝なさい」

「ありがとうございます。それじゃあ、お言葉に甘えて」

優子はそう言って部屋に戻った。

その顔からは喜びの笑みが溢れていた。

「さあ、浩人君も！」

「わかったよ」

子供たちがそれぞれの部屋に戻ると、早紀は冷蔵庫からビールを出してきてダイニングのテーブルに置いた。

グラスを二つ取り出すと、ひとつを拓に渡した。

「お祝いには早いけど、乾杯しましょう。今日は本当にありがとう」

早紀と拓がテーブル席に着くと、知美も寄ってきて羨ましそうに見ている。

「そうね！高部さんもありがとう」

早紀は知美に温かい紅茶を出した。

知美が預かった恭子の携帯電話には、ひっきりなしに返信のメールが届いていた。

「こりゃあ、今夜は眠れないかも」

早紀と拓は笑いながらビールグラスを口にした。

手術後の経過は順調だった。

一週間もすると、恭子は一般病室に移され、車いすで病院内を自由に行き来することができるようになっていた。

しかし、左手と左足はまだほとんど動かすことが出なかった。

かろうじて、こぶしを握ったり足首を動かすのがやっとだった。

物をつかんだり、自力で立つにはもう少し時間が必要だった。

「焦らないで、少しずつリハビリしていこうな」

手術を担当してくれた香坂は、手術後も恭子のことを気にかけてくれて、時折、様子を見に来てくれた。

恭子も暇さえあれば、なるべく左手と左足を動かそうと意識している。

恭子に移された一般病室は6人部屋で、脳梗塞やくも膜下出血などで運ばれてきた年配の患者が多かった。

恭子の周りにはひっきりなしに誰かが見舞いに来るのに対して、他の患者のところにはほとんど見舞いに来る者がいなかった。

早紀や孝幸は、恭子の見舞いがあまりにも多いので周りの患者さんに迷惑がかかっているのではないかと心配になったが、仁美や悠斗をはじめ、陸上部の連中も他の患者さんに挨拶をしたり、話し相手になってあげたりと、歓迎されていると知り安心した。

何より、恭子はこのフロアのアイドル的な存在になっていた。

一月经つ頃から、本格的なりハビリが始まった。

すると、車いすへの乗り降りから、トイレに行ったり、入浴したり、日常生活に必要な動作は一通りこなせるようになっていった。

入院したせいで高校の受験はできなかったが、香坂の計らいで、卒業式には車いすで出席してよいと許しが出た。

卒業式の前日、早紀は病院に恭子の制服を持ってきた。

恭子はそれをカーテンレールに掛けてもらうと、ずっと眺めていた。

「おや、学校に行くのかい？」

隣のベッドの高崎さんが声をかけた。

高崎さんは二週間ほど前にも膜下出血でこの病院に運ばれてきた。63歳のおばあちゃんだ。

「はい、明日卒業式なんです」

「そうかい。それはおめでとう。　ここも早く卒業できるといいね」

そう言つてニツコリ笑つてくれた。

卒業式の当日、拓が久しぶりに病院に来た。

「あれっ？　拓さんどうしたんですか？」

「今日は会社に休みをもらった」

「まさか、卒業式に来るつもりじゃないよね？」

「ああ、そのまさかさ！　野村先生から連絡をもらつてね。　君を学校まで送つていく大役を仰せつかったのさ」

「いやだ！　恥ずかしい」

「これくらいで恥ずかしがつてちゃ、学校に着いたら大変だぞ」

「あら？　どうして？」

「あとで、高部も来るし、君のファンがみんな学校に押し寄せらるらしいぞ」

「まあ、たいへん！」

「さあ、早く支度をしな。　ボクは外で待つてるから」

拓はそう言つと、病室を後にした。

恭子はカーテンを閉めて久しぶりに制服に着替えた。

カーテンを開けて車いすに移ると、病室の他の患者さんたちが紙吹雪で送り出してくれた。

「素敵な王子様がいるんだね」

高崎さんが耳元でそう言つていつものようにニツコリ笑つてくれた。車いすで廊下に出ると、香坂先生と担当の看護師さんがいた。

「卒業おめでとう」

香坂先生が制服の胸ポケットに赤いバラの花を一輪差ししてくれた。

エレベーターが来ると、二人は恭子を見送り、看護師さんは病室へ検診に行った。

エレベーターの扉が閉まる直前、看護師さんの怒鳴り声が聞こえた。

「あなたたち、どういうこと？　こんなに散らかして・・・」

通用口から外に出ると、拓が来るまで待っていた。

恭子の姿に気が付くと、車を降りて助手席のドアを開けた。

「本当に王子様みたい」

恭子はそう思つてクスツと笑った。

恭子が助手席乗り込むと、拓は車いすをたたんで後部座席に積み込んだ。

すると、「痛ッ」後部座席から声がした。

恭子のがのぞきこむと、高部知美がかみこんで隠れていた。

「高部さん！」

「うわー！　見つかったじゃないの」

拓は運転席に乗り込むと、知美に「悪い！」と詫びて、恭子にシートベルトを掛けた。

「チエツ！　見つかったんじゃない」

知美はそう言つて堂々と座席に座りなおした。

「恭子！　卒業おめでとう」

「高部さんも卒業式じゃないの？」

「埼玉は昨日だったのよ。　今日から私も正式に東洋電機の陸上部よ。　恭子も早くおいでよ。　待ってるからね。　何といつても日

本で私の相手になるのは恭子だけなんだから。」

「じゃあ、行くぞ」

そう言つと拓は車を走らせた。

学校に着くと、仁美や陸上部の仲間が恭子を出迎えてくれた。

拓と知美とはひとまず別れて、仁美が車いすを押して教室に向かった。

教室に着くと、担任の野村をはじめ、クラスメートたちが拍手で迎えてくれた。

二年で陸上部の後輩でもある宮下麻衣子が胸に花をつけてくれた。

「先輩、卒業おめでとうございます。一中陸上部は私たちがしっかり引き継ぎますから安心してください。先輩と一緒に走れて本当に良かったです」

麻衣子はそう言いながら涙を流している。

「大丈夫！ あなたたちなら安心して任せられるわ」

そう言つて恭子は舞子に手を差し伸べた。

麻衣子は両手で恭子の右手をしっかりと握りしめた。

「さあ、そろそろ式が始まるぞ」

野村が叫んで恭子たちは廊下に整列した。

恭子の車いすは引き続き仁美が押して行つた。

体育館に入ると、在校生や保護者からより一層大きな拍手が沸き起こつた。

恭子自身は自覚していないが、恭子は学校の大スターであり、まさに時の人なのだ。

全卒業生が入場しても、拍手は鳴りやまなかった。

副校長の「静粛に」という声でようやく場内は静まり返つた。

そして厳かに式が始まつた。

校長や来賓の祝辞が終わり、いよいよ卒業証書授与式が始まる。

授与式が始まると、演台が舞台から降ろされた。

車いすの恭子の合わせての演出だった。

こうすることについては、卒業生はじめ、在校生、教職員、全保護者が同意してのことだと仁美が恭子に耳打ちした。

授与式は順調に進んで行き、仁美の番になった。

すると、仁美より先に恭子の名前が呼ばれた。

恭子はハツとしたが、仁美は「いいの、いいの」そう言つて、恭子の車いすを押して演台の前まで行つた。

校長が卒業証書を恭子に手渡そうと前かがみになる。

恭子は意を決して立ちあがろうとした。

最初は、車いすに尻もちをついたが、二度目の挑戦で、見事に立ち上がることができた。

校長は笑顔で証書を手渡した。

恭子はそれをしっかりと両手で受け取った。

会場にいたすべての人が立ち上がって拍手を送った。

恭子は、車いすに座ると、向きをかえて、もう一度立ち上がり、深々と頭を下げた。

恭子の授与が終わると、次に仁美の名前が呼ばれた。

出席番号順に並ぶと、たまたま、野々村仁美の次が三浦恭子だった。仁美の提案で順番を入れ替えてもらったのだ。

仁美は自分の卒業証書を受け取ると、再び、恭子の車いすを押して席に戻ってきた。

拓に知美、それに悠斗は保護者席で恭子の晴れ舞台をつ守った。

「こんな感動した卒業式は初めてだわ。自分の卒業式より感極まつて、なんだか・・・」

そう口ずさんだ知美は、それ以上ともに言葉を発することができなかった。

悠斗の目にもうつすらと涙があふれている。

拓は、涙こそ見せなかったものの、恭子の姿をしっかりと心に受け止めた。

孝幸と早紀は、万感の思いで恭子の姿を見ていた。

リハビリをやっている時も、杖なしでは立ち上がるところをまだ見たことがなかったのに、卒業証書を受け取るときに自分の足で立ち上がったのだ。

これ以上うれしいことが他にあらうか。

孝幸は、その後、流れる涙をこまかすために、ずっと天井を見つめていた。

早紀は、ハンカチで涙をぬぐいながら、肩を震わせている。

隣の席の“ばれいしょ”のマスターと女将、来賓席の高橋も、担任の野村も。

みんなの目に涙があふれている。

最後に卒業生の答辞となった。

進行役の副校長が卒業生代表として告げた名前は、三浦恭子だった。

「そんな・・・わたし？ 何の準備もしていないわ」

仁美がニツコリ笑って恭子を促す。

「いいの、いいの！ 何も言わなくていいのよ。 前に行って礼だけしてくればいいじゃない。 それで全部伝わるわ」

仁美は再び恭子の車いすを押して、演台の脇まで行った。

「今度は立たなくていいからね」

恭子はうつむいて少し考えた。

そして顔を上げるとハンドマイクを手にした。

「みなさん、今日は私たち卒業生のためにお忙しいところ足を運んでくださって、本当にありがとうございます。 三年前、この中学校に入学して何も分からない私たちをずっと見守ってくれた皆さんや、いろんなことをやさしく教えてくれた先輩たち、どんな悪さをしてでも愛情を持って接してくださった先生方、そして、何よりも、どんな時も、励まし、支えてくださったお父さん、お母さん。 皆さんの優しさをたくさんもらって、今日私たちは卒業の日を迎えることができました。 今、こうしてこの場にいと、三年間はあつという間でしたが、その中には一生忘れることのできない思い出が数えきれないほどあることを改めて実感しています。 みんなで力を合わせて競った運動会、はじめて遠くまで歩いた遠足、初めて親と離れて一泊した林間学校、そして、修学旅行や文化祭。 私たちは国語や数学といった勉強以外に人と人のつながり、みんなで協力して何かをやり遂げることの素晴らしさを知ることができました。

私たちが中学校生活の三年間で経験したことは、これかの人生においてかけがえのない財産になるのだと思います。 私はクラブ活動を通じていろんな経験をさせていただきました。 第一中学校の代表として全国大会に行くこともできました。 そこでいい成績

を収めることができたのも顧問の先生をはじめ、チームメイトや地域で応援してくださった方々のおかげだと感謝しています。そして、よきライバルにも恵まれ、日本中の同じ競技に携わる皆さんと親交を深めることもできました。そして、そのことで天狗になり、思いやりを忘れてしまうことのないよう、励んで行こうと思います。

卒業を間近に控えたある日、私は脳静脈奇形という病気が原因で脳出血を起こし入院しなければならなくなりました。夜中に手術を行ってくれて先生や、24時間体制で見守ってくれた看護師さんをはじめ、多くの皆さんが私の命を救おうと手を尽くしてくださいました。病気の後遺症で、今はまだ、左手と左足が自由に動かすことができません。私は、せっかく助けてもらった命に対して、手や足が不自由だからといって、ふてくされたり落ち込んだりしていたのでは、助けてくださった皆さんや、治ることを信じて助けてくださる皆さんに失礼だと考え、正々堂々と生きていこうと思っています。在校生に皆さん、皆さんも、これからの学校生活や人生において、いろんな困難にぶつかるかもしれませんが、だけど、私たちは決して一人ではないということを心に刻んでください。そして、私たちを助けてくれる大勢の人たちの恩に応えるためにも、私たちが自身がだれかの助けになれるような存在になれるようしっかり学んでいかなければならないと思います。どうか、そのことを忘れずに私たちの意思を引き継いでください。最後に、皆さんとともに第一中学校を見守っていくことを誓い、私の答辞の挨拶とさせていただきます。卒業生代表、三年一組、三浦恭子」

恭子の答辞が終わると、みんな立ち上がって、拍手で称えた。

そして、恭子は再び立ち上がり、礼をしたが、今度はよろけて倒れそうになった。

そばにいた仁美が、すかさず恭子を支えて車いすに座らせた。

「大丈夫？」

「ありがとう」

「それにしても、恭子、すごいよ。急に振られてよくあれだけの

ことをじゃべれるわね。 私感動しちゃったわ」

「うん、私も。 自分でも不思議なんだけど、自然に言葉がわいてきたの。 なんだか自分が喋ってるんじゃないみたいに」

無事にすべての式事が終了し、卒業生退場する時は惜しみない拍手がいつまでも鳴り響いていた。

20・夢よ再び

20・夢よ再び

卒業式が終わって、静まり返った校庭に恭子と拓の姿があった。

「ねえ、拓さん、お願いがあるの」

車いすから拓を見上げて恭子が口にした。

「なんだい？　まさか、校庭を走るなんて言うんじゃないだろうな」
「へへっ、本当はそうしたいけれど、そんなこと今はできないことくらい分かっているわ」

そう言った恭子の瞳には少しだけ悲しそうだったが、すぐに照れくさそうにほほ笑んだ顔にかき消された。

「あのね、走らなくてもいいから、自分の足で、もう一度ここを歩いてみたいの。だから、肩を貸してもらえないかしら」

「お安い御用だよ。でも、大丈夫かい？」

「うん。辛くなったら車いすに戻るわ」

拓は恭子の右側に回って、恭子の右腕を自分の肩に回した。

恭子は右腕に力を込めて立ち上がると、ゆっくり歩き始めた。

そして、三年間、練習してきた校庭の感触をしっかりと両足で確かめた。

何度も立ち止まりながら、ゆっくりと進んだ。

幅跳びを勧められた砂場や何度もタイムを計った直線コース、リレーの練習でバトンをつないだトラック・・・数えきれない思い出が鮮やかに甦ってくる。

だんだん感覚がなくなっていく左足を何とかかばいながら歩を進めていく。

何とか最後まで歩いて車いすに戻ってくると、4人の家族が出迎え

てくれた。

車いすに座ると、両足が疲労で痙攣していた。

「頑張ったね」

母親の早紀がそう言っ、少し細くなつた足をマッサージしてくれ
た。

「さあ、今日はみなでご馳走を食べに行こう」

孝幸がそう言い、みなで校庭を後にした。

孝幸は拓も誘つたが、拓は家族水入らずで楽しんだ方がいいと言い、
三浦家と別れて“ばれいしょ”へ向かった。

三浦家は、浩人のリクエストで和風のファミリーレストランで恭
子の卒業を祝つて食事をした。

浩人は、ここの茶わん蒸しと天ぷらが大好きだった。

「浩人ったら、今日はお姉ちゃん卒業祝いなのに・・・」

そう言つて優子は浩人の頭をポンとなでた。

「まあ、私もここの天ぷらは大好きだけど、お姉ちゃんは焼き肉と
かの方が良かったんじゃないの」

「そうね！ 本当は焼き肉が食べたかったなあ・・・」

恭子がそう言つと、浩人は申し訳なさそうに身をすくめ、早紀に助
けを求めた。

「うそ、うそ！ 私もここ好き。 おすしも食べられるし、特に茶
わん蒸しは大好物よ」

浩人は安心して、テーブルに広げられたメニューに飛びついた。

拓が“ばれいしょ”に顔を出すと、知美が悠斗たちと一緒に待つ
ていた。

「恭子ちゃんはどうした？」

悠斗が聞いた。

「ああ、今日は卒業祝いだから、家族で食事だ。 そして、そのま

ま病院に戻るそうだな」

「そうか・・・それにしてもよかったな」

悠斗は拓に気を使いながら答えると、ビールを差し出した。

「ああ・・・」

拓はグラスを差し出し、悠斗からビールを注いでもらうと、仁美と知美もジュースの入ったグラスを掲げた。

「仁美ちゃん卒業おめでとう！」

知美がそう言うのと、仁美はグラスを置いて、知美の手を握りしめた。
「高部さん、ありがとう！ 恭子のことで胸がいっぱいだったから忘れていたけど、私も卒業したのよね」

悠斗は、一瞬、気まずそうな顔をしたがすぐに取り繕うように切り出した。

「あたりまえじゃないか！ 俺たちは最初から仁美の卒業祝いのつもりでここに来ているんだからな」

「じゃあ、改めて、仁美ちゃんの卒業を祝して」

拓が音頭を取り、もう一度みんなで乾杯した。

「乾杯！」

拓は助手席に知美を乗せて高速道路を走っていた。

「恭子、また走れるようになるかしら？」

知美の問いに拓はしばらく黙っていた。

「ランナーとしてはたぶん無理だろうな・・・」

フロントガラスの先を見つめたままそう答える拓の横顔が悲しげで、恭子はすぐに目をそらした。

「そうか・・・でも、私は信じてるよ。また恭子と一緒に走れるって」

「そうだな。きっとそうなるさ」

病院に戻った恭子を待っていたのは、『卒業おめでとう』と書かれた横断幕だった。

執刀医の香坂や担当の看護師たち、それに、高崎さんをはじめとする病室の同居人たちが恭子の卒業を祝ってこしらえただった。

消灯までには、少し時間があつたので、みんなで談話室に行った。そこには、同じフロアの患者や、その家族が恭子の帰りを待っていてくれた。

恭子は感激のあまり、こぼれる涙を抑えることができなかった。孝幸と早紀のもとにも涙が溢れていた。

4月に入ると、恭子はリハビリ病棟に移された。

感覚が鈍い左足は足首の動きが良くないため、自分では足の裏で立つたつもりでも、つま先しか着いておらず、転んでしまうことが良くあつたので、足首を固定するための樹脂製の保護器具を作ってもらった。

恭子の足の形に合わせたオーダーメイドだ。

それと同時に、靴も保護器具をしたままはける、特注品を作ってもらった。

退院後の、社会復帰のために2週間に一度は2泊の帰宅が許されるようになった。

最初は孝幸が車で送り迎えをしていたが、車いすがなくても歩けるまでに回復すると、自分でバスや電車に乗って行き来するよう指導され、最初こそ、早紀が付き添ってきたが、その後は一人で帰宅し、病院に戻ることもできるようになった。

帰宅中は、極力、仁美や悠斗たちと買い物や食事に出かけ、外に出ることに慣れる努力をした。

5月に入ると、杖がなくても歩けるまでに回復した。

だが、手の方は握力が戻らず、食事の時も茶碗を持つことさえ難し

い状態だった。

しかし、日常の生活はほぼ一人でできるようになり、ゴールデンウイークの連休明けには退院できることになった。

孝幸は仕事を休んで迎えに行くと言ったが、恭子は一人で帰れるからと孝幸の申し出を断った。

結局、孝幸は、恭子の退院の日も出勤したのだが、高橋に客先へ挨拶に行くと言われ出され、そのまま家まで一緒に帰って来たのだった。二人が帰って来た時には、既に恭子は家に戻っていた。

「恭子！ 大丈夫だったか？ 一人で帰って来たのか？ 疲れてないか？」

孝幸と高橋は終えをそろえて恭子に尋ねてきた。

「そんなにいつぱんに聞かれても答えられないよ！」

恭子は笑いながら言い返し、言葉が続けた。

「それにしても、お父さんとオジさんって、双子みたいに気が合うよね」

そう言われて、孝幸と高橋は顔を見合わせた。

そして、すぐにそっぽを向いた。

「誰がこんなのと気が合うもんか！」

またしても二人同時に同じことを口にした。

恭子思わず笑ってしまうと、二人も吹き出してしまった。

「こりゃあ、まいったなあ」

「さあ、漫才はそれくらいにして席について下さいな」

早紀が料理を運びながらやって来て二人をたしなめた。

退院した後も、週に一度は通院してリハビリを受けたが、恭子は近所のジムに通いたいと孝幸に頼み込んだ。

もう一度あのスタートラインに立ちたい。

ゴールする瞬間の風を感じたい。

恭子は決してあきらめていなかった。

ジムに通うことにより、リハビリとは違ったメニューを取り入れ、入院していた間に衰えてしまった走るための体を取り戻そうと思ったのだ。

孝幸は、時間さえあれば左手、左足を動かそうともがいている恭子の姿を見て、胸が締め付けられるようだった。

孝幸は、真剣に訴える恭子の熱意に負けてジムへ通うことを許した。

拓は、東洋電機の寮を出ようと決心した。

リハビリを続ける恭子のそばで力になりたいと考えたからだ。

しかし、実家の戻るのとは何かと気を使うので、手ごろなマンションを購入することにした。

練習が休みの日に、実家へ戻り、駅前の不動産業者に手ごろな物件がないか相談に行った。

2LDKのちょうどおあつらえ向きの物件を紹介してもらい、その場で、手付金を支払い購入の手続きを行った。

翌週には、寮と実家から必要最小限の荷物を運び、会社に退寮の旨を伝えた。

会社や練習に通うのは大変だが、恭子のことを考えると、さほど苦にもならなかった。

ジムのトレーナー沢村は悠斗の知り合いで、スポーツ医学の知識もあり、恭子のリハビリの様子を見ながら、メニューや食事にもアドバイスをしてくれた。

通い始めて1カ月もすると、足首を固定するための保護器具を使用しなくても、通常の歩行速度で歩けるようになった。

手の握力もミカンくらいなら握りつぶすことができるくらいまで回復した。

ただし、走ることまでは到底無理だと思われた。

「恭子ちゃん、調子はどうだい？」

一休みしている恭子に声を掛けたのはトレーナーの沢村だった。

「はい、おかげさまでだいぶ回復しましたけど、ここから先がなかなか難しんですよ」

沢村は恭子の走りたいという気持ちが強すぎてこのところ無理をしているように見えたので、すこし、目先を変えさせようと考えた。沢村は恭子が座っているベンチに並んで座った。

「焦ったらだめだよ。この病気でここまで回復したこと自体が奇跡といってもいいくらいなんだから、これから先のことは全部余計な財産としてありがたく思うようにしよう。ところで、学校には行かないのかい？」

恭子は沢村から“学校”という言葉聞いて胸が躍るのを感じた。

「学校ですか？」

「そうだよ。本当なら高校生なんだろう？ 病気で受験できなかったと聞いてけど、来年、もう一度受験するんでしょう？」

「学校か・・・病気になってから、学校に通うなんて考えてなかったなあ」

「そりゃ、変な話だな。それは走れないからかい？ 学校って、陸上をやるためだけに行く所じゃないだろう？」

「そうですよね」

恭子は高校へ行くことはあきらめていたが、沢村の話はもったもっただった。

そう言えば、悠斗も怪我で選手としての夢はあきらめたものの、沢村のようにスポーツ医学の道を志している。

「来年、もう一度受験しよう！ いいえ、来年ダメだったら再来年も」

「そうそう、そうこなくっちゃ！ 今の状態なら、学校に通う分には何の支障もないよ。但し、体育の授業は受けられないかもしれないけどね。でも、来年の4月までにはまだ半年あるんだ。ひよっとしら・・・あくまでもひよっとしたらだけど、そのころに

はもう少しいい感じになってるかもしれないしね」

沢村はそう言って恭子の肩をぱんと叩いてから席を立った。

拓は、引っ越してきてからは、時間があれば恭子のジムに通い、リハビリを助けた。

恭子も、拓と一緒にだと、頑張れたし、何より高校に入るという目標もできたので毎日が充実して月日があっという間に過ぎて行った。目に見える進歩はなくても恭子は満足だった。

しかし、それは決して諦めたということではなく、長いスパンでやっていこうと考えたからだだった。

3月、恭子は見事に第一高校に合格した。

陸上部のマナージャーとして、ひと足早く入学した田中美由紀や同級生になった宮下麻衣子たちと再び陸上というステージの端の端に足を架けた。

学校に通いながら、毎日ジムにも通いリハビリとトレーニングを続けながら、スポーツ医学の勉強を始めた。

ジムには拓も付き合ってくれた。

拓は「マイペースでいいから」と笑顔で励ましてくれる。

このころから恭子は、はつきりと拓を一人の男性として意識するようになった。

家に帰ると、母親の早紀と一緒に台所に立ち、料理の修業も始めた。走ることだけ考えてきた以前に比べて、いろんなことを学び、経験することができるようになった。

恭子は、病気で走れなくなったことを少しも後悔していない。

むしろ、病気をしたことにより、人の心の温かさや思いやりのありがたみを身にしみて感じる事ができたし、リハビリを続けることで忍耐力や精神的な強さと弱さを知り、どう対応すればいいのかと

いうことを学ぶことができた。
これらのことは、今後の恭子の生涯でかけがえのない財産となるだろう。

拓は、恭子のリハビリを助けながら仕事もそつなくこなし、実力で出世して行った。

ランナーとしても常にトップを争い注目され続ける存在になった。そして、何より、恭子と一緒にいることで、「守るべき人がいる」ということを自覚していた。

子供のころに夢で見たことが現実になり、漠然とした形がはつきりとした形になって自分を支えていることを実感している。

恭子の卒業式。

校門で待っていた拓は、恭子の手を取り、左手の薬指にそつと指輪を滑らせた。

晴れ渡った青空。

決勝のレースを行うには絶好のコンディションになった。
選手たちは、既にスタートラインに並んでいる。

場内放送でファイナリストの名前がアナウンスされる。

1コース、吉見加奈 福岡城西高校。

2コース、松本洋子 大阪天王寺高校。

3 コース、宮下真弓 広島尾道高校。

4 コース、西崎百合 東京城東第一高校・・・

スタンドでは、孫の応援に駆けつけた三浦孝幸とお馴染みのメンバーたちが大獵旗を振りかざし、西崎百合の名前を叫んでいる。恭子と拓はその中で、そつと娘の姿を見守った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0409e/>

ボクがささえてあげるから

2010年10月13日15時14分発行